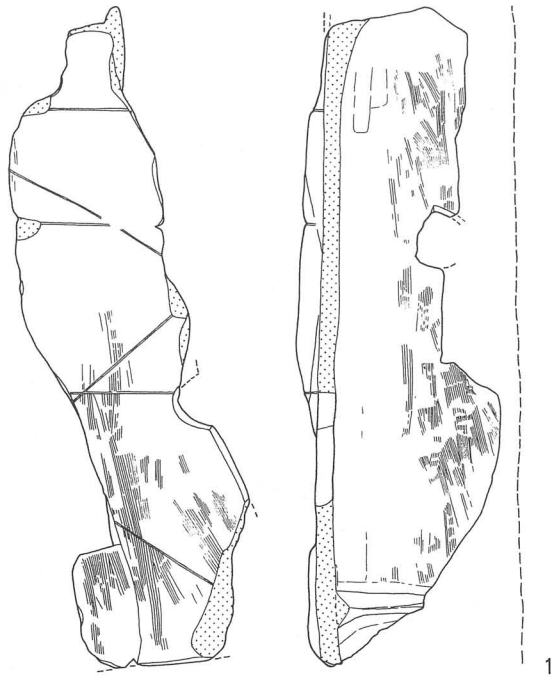
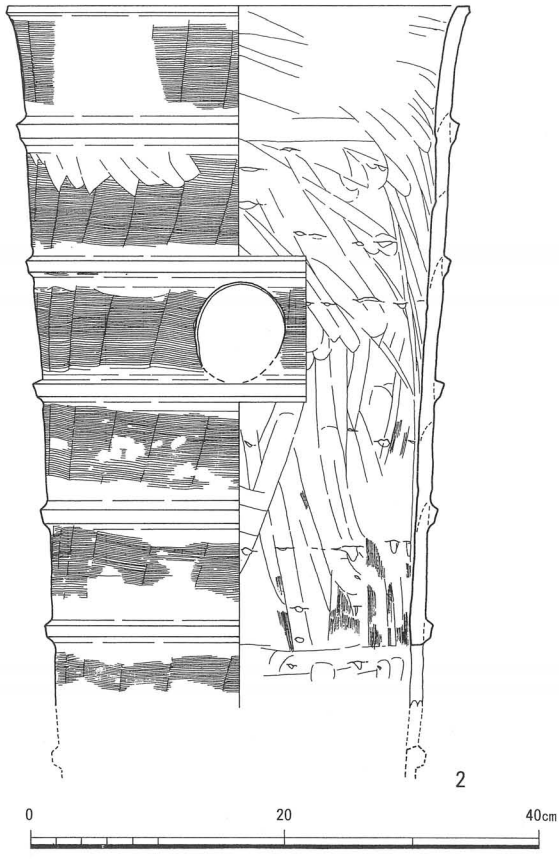
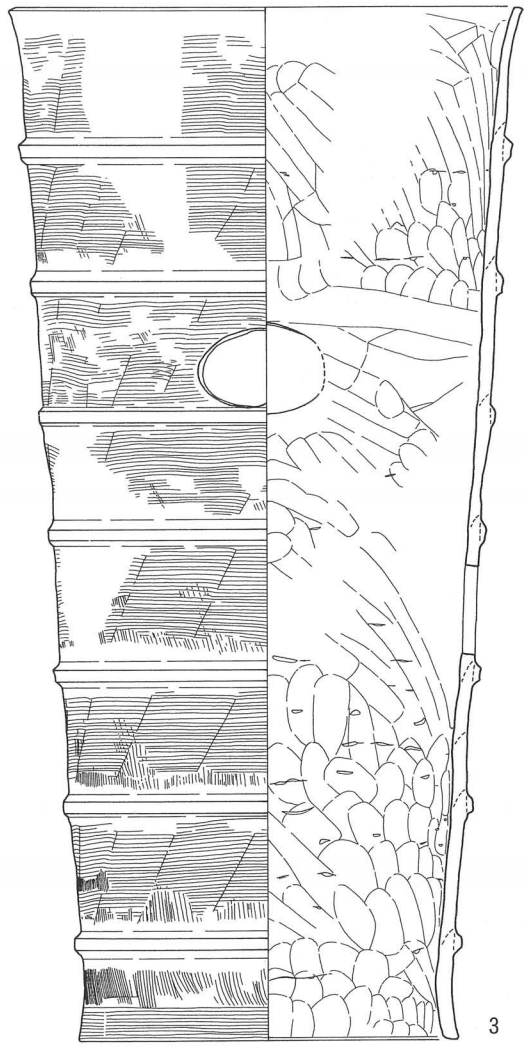
第128図　土師の里３号墳　２・３号埴輪棺墓構成埴輪

の時期は必然的にそれより遡ることになる。1、2号埴輪墓の築造時期の上限は127－2の小型円筒埴輪の年代である6世紀前葉と推測される。したがって土師の里3号墳の築造年代は6世紀代に下る可能性は少ない。

なお棺身に使用された埴輪のうち1号埴輪棺墓南棺身として用いられた126－2は現存高76.8㎝、円筒部の口縁部は楕円形で長径51.0㎝、短径42.6㎝、盾部の推定長47㎝、推定幅60㎝を測る。円筒部の口縁部に粘土帯を貼付けて方形に肥厚させている。1段目の突帯から5段目の突帯間に盾面が付けられている。盾面は無文で、タテハケのち両側部にかけて強くユビナデされており、ユビナデの痕跡が明確に残っている。無文であること、そして盾面の中央と円筒部とがほとんど同化していることから、一見鰭付円筒埴輪を想起させるが、円筒部正面に板状部が付けられていることから盾形埴輪としてよいと考えられる。







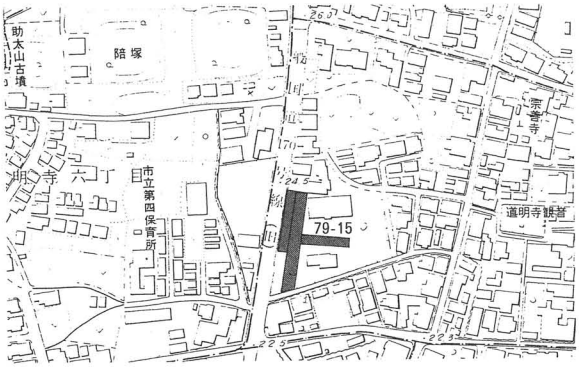
第129図　土師の里3号墳　3号埴輪棺墓構成埴輪

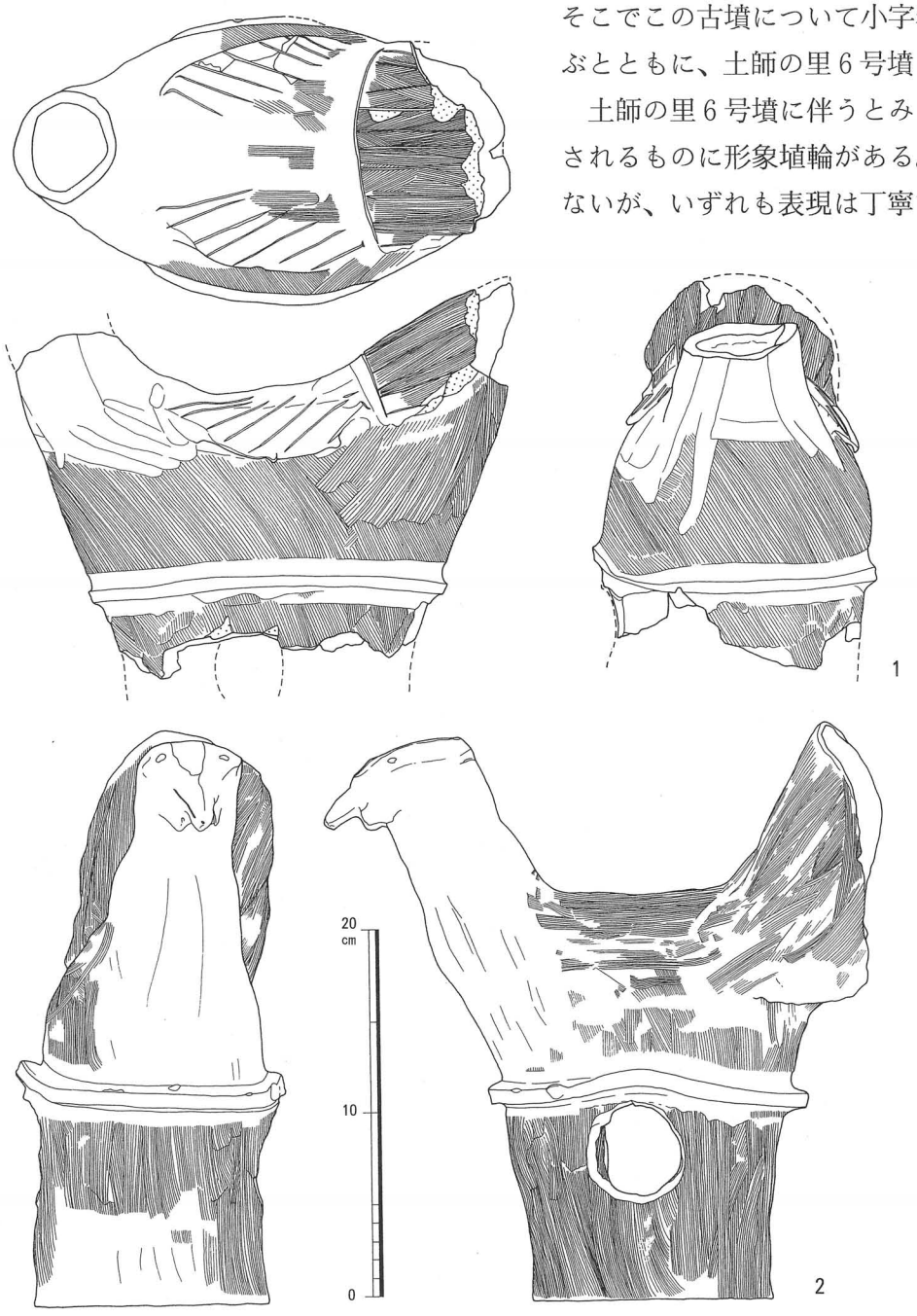
（4）土師の里6号墳（塚穴古墳）（第130～131図）

79－15区の調査で、調査区北半に瓦器を少量混入するものの、5世紀後半の埴輪、土師器、須恵器を多量に包含した堆積層が遺構面上を覆っている状況が確認された。調査区北東には直径80mほどの円形の地割りが残り、「塚穴」という小字名が残っていることから、かつて直径80m前後の大型円墳が存在したが、中世に墳丘が削平され南方向に客土されたものと考えられた。そこでこの古墳について小字名を付して塚穴古墳と呼ぶとともに、土師の里6号墳とした。

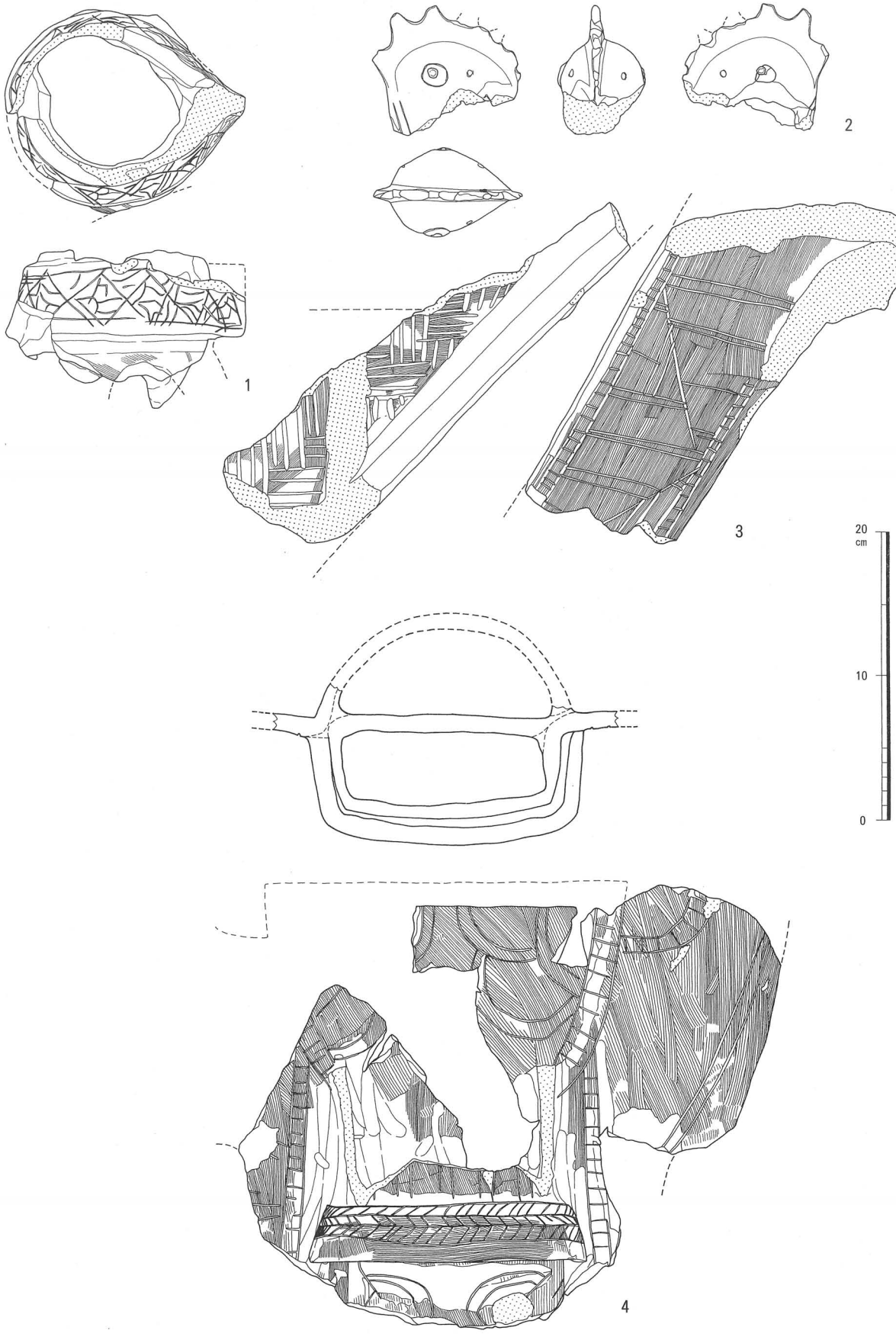
土師の里6号墳に伴うとみられる遺物の中でも注目されるものに形象埴輪がある。5点を図示したにすぎないが、いずれも表現は丁寧で、作りも精巧である。130－1・2、131－2は鶏形埴輪である。131－1は太刀形埴輪の把頭部と考えられる。退化した粗雑な直弧文が刻まれている。131－3は家形埴輪、131－4は靫形埴輪である。

本墳については、形象埴輪を伴うことおよび墳丘の形状や規模が予測される以外に知見はほとんどない。しかし円墳としては規模が大きいことや形象埴輪の様相は、被葬者の王権内に占める位置が一定度高かったことを暗示する。このことから、墳形については盾塚古墳や鞍塚古墳同様、帆立貝式前方後円墳ではなかったかとの推測も生じてくる。





第130図　土師の里6号墳 調査区位置、形象埴輪（1）



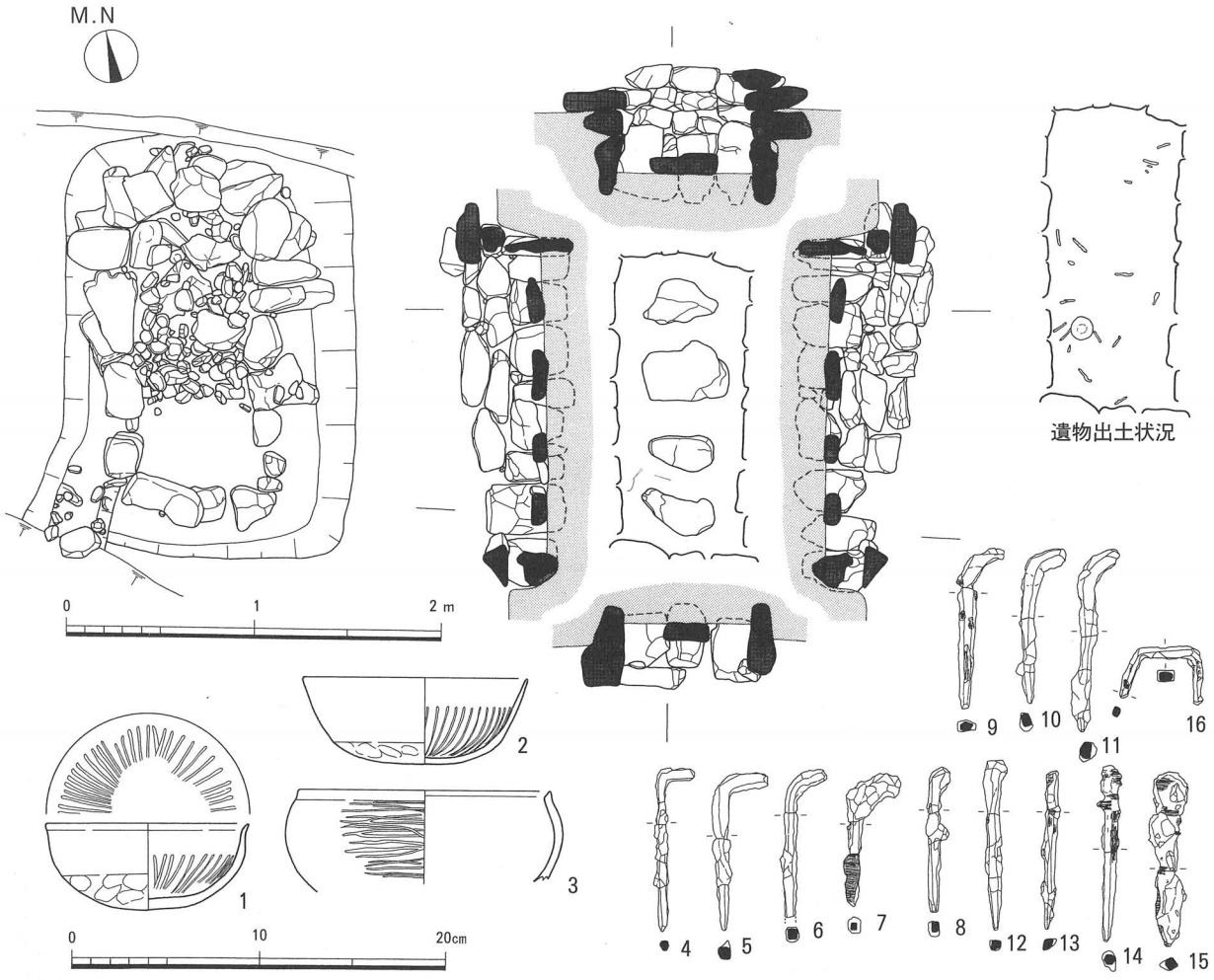
第131図　土師の里６号墳 形象埴輪（２）

（５）土師の里１号墳（第132図）

78－２区の調査で小型の竪穴式石室1基が単独で検出された。墳丘や周濠は確認されなかったが、古墳の埋葬施設と捉え、土師の里１号墳とされた。

石室の内法は南北1.6m、東西0.6～0.7m、残存高は0.6mを測る。石室の側壁は最大４段ほどが遺存しているだけで、天井部は残っていなかった。また側壁は３段目以上が持ち送られている。基底は長さ30～40cmの石材を縦並びにし、その上に長さ10～40cmほどの石材を平積みにしているが、北小口部や東側壁部などは小振りの石材の使用が目立つ。基底石は両側部と北小口部が連続しているのに対し、南小口部は両側部を仕切るように配されていることから、南小口部の配置によって最終的な石室の形状、規模が確定されたとみられる。また棺台には長さ35～50cmの平石４点が用いられている。棺台間および両小口部との間は10～15cmほどで、ほぼ等間隔である。南端と北端の台石では４cmの高低差があり、北側が高い。なお石室を納めた墓壙は南北現2.3m、東西1.5m強を測る。平面は隅丸方形を呈する。南西部に排水溝状の掘込みがみられるが、墓壙際まで延びた攪乱のため判然としない。

石室内覆土中から古墳時代～中世までの遺物が検出された。棺台石上面および台石間から木棺の固定に使用されたとみられる鉄釘12本（132－４～15）と鎹１点（132－16）、棺内に副葬されたとみられる土師器杯２点（128－１・２）が出土した。また土師器杯と同時期と考えられる土師器鉢1点（132－３）も堆積土中から出土しており、これも副葬品であった可能性が高い。これらの土師器から本墳の築造時期は７世紀初頭に比定される。



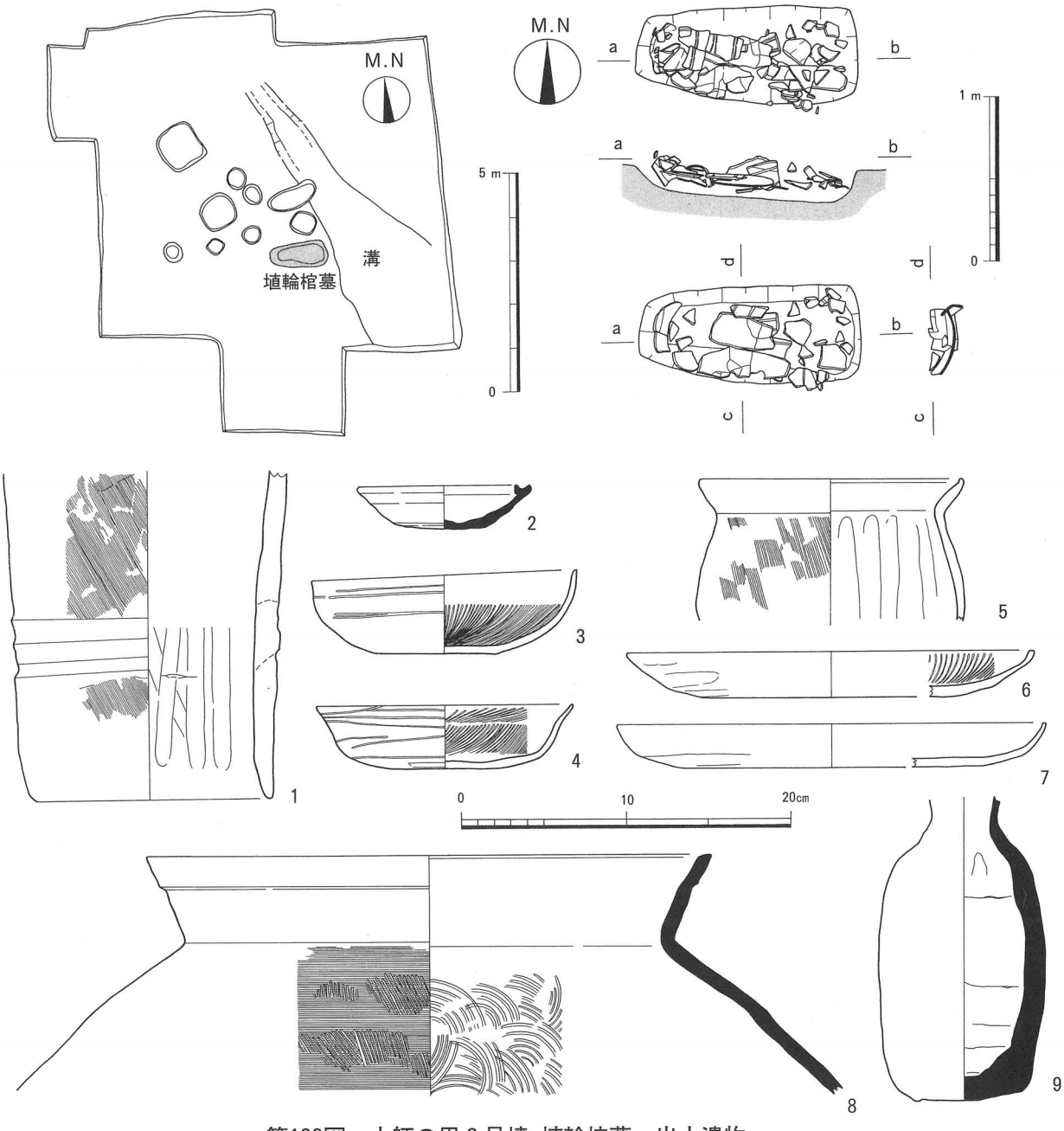
第132図　土師の里１号墳 石室、出土遺物

（6）土師の里2号墳（第133図）

78－11区で埴輪棺墓1基と溝1条が検出された。埴輪棺墓は上面の削平が著しく、棺身底が遺存しているにすぎない。掘方の長さは1.3m、幅0.6mほどで、最大深15cmを測る。主軸はほぼ東－西方向である。掘方の規模からすると棺身は残存する円筒埴輪1個体で構成されていた可能性が高い。また西小口部は埴輪片で閉塞されているが、東小口部については不明である。

埴輪棺墓の東脇に溝が北西－南東方向に主軸をもって位置している。この溝も上面の削平が著しいが、遺物の出土状況などから長さ6.4mまでの範囲が予想される。そこで両者を、古墳の周濠とその脇に設けられた埴輪棺墓とみて、土師の里2号墳とした。ただし墳丘の形状や規模については不明である。

溝内および推定されるその延長部分からは多量の遺物が出土した。遺物には時期幅があり、また133－1の円筒埴輪が本墳に伴うかどうか不明確なので、本墳の築造時期を求めるのは困難であるが、6世紀前半以前に古墳は築造され、その後埴輪棺墓が設けられた可能性が高いといえよう。



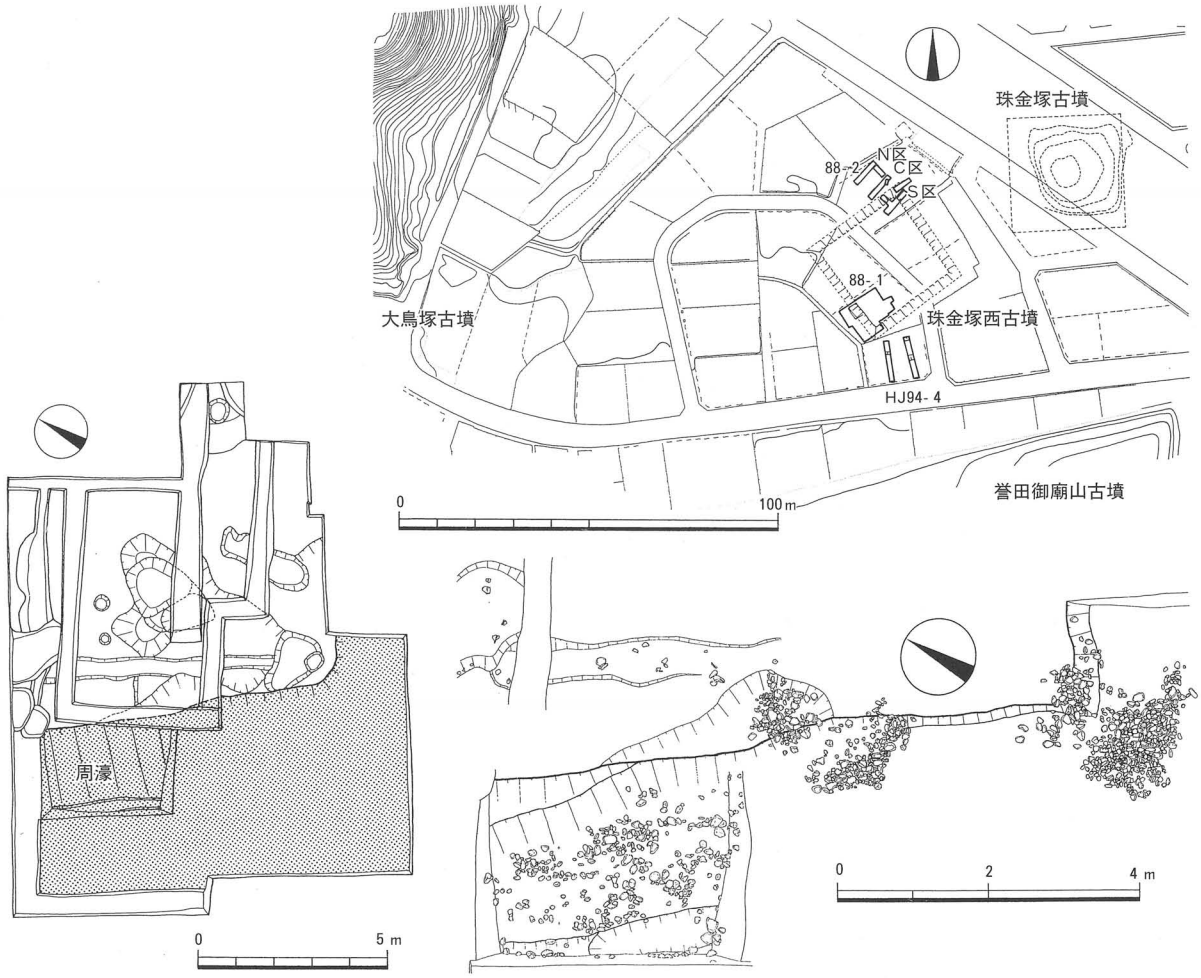
第133図　土師の里2号墳 埴輪棺墓、出土遺物

（７）土師の里７号墳（珠金塚西古墳）（第134・135図）

土師の里７号墳は土師の里遺跡の南西端に位置する古墳である。昭和30年代以前に墳丘や葺石が存在したことが伝えられているが、その後墳丘が失われたため、古墳の存在は確認できなかった。試掘調査および原因者の異なる２つの調査（88－１・２区)が実施されたことによって、本墳は一辺30ｍほどの方墳であることが判明し、土師の里７号墳（珠金塚西古墳）とされた。

88－１区では墳丘の南西辺および南隅を検出した。検出された南西辺の南で周濠を確認し、墳丘の１段目が地山を削り出して形成されていることが判明したとともに、墳丘の傾斜が約29度であることも明らかになった。墳丘斜面には拳大の葺石が存在していた。なお後世の葺石の集積も部分的にみられた。

現状の周濠上縁から1.2ｍ北東で墳丘に沿う溝が検出された。下底部の幅は約40㎝である。この溝内から埴輪の底部が多く出土し、さらに樹立状態で出土したものもあることから、埴輪を樹立するための布掘りの掘方と考えられる。上面が削平されていることを考慮すると、検出した周濠上縁より若干高い位置に第１段目のテラス面が巡り、埴輪列が囲繞されていたとみられる。またテラス面については、高さは確定する根拠に欠けるが、幅については埴輪列掘方の中心から周濠上縁までの距離が1.2ｍを測り、周濠上縁が本来は若干墳丘寄りにあったと考えられることから、２ｍ程度であったと推

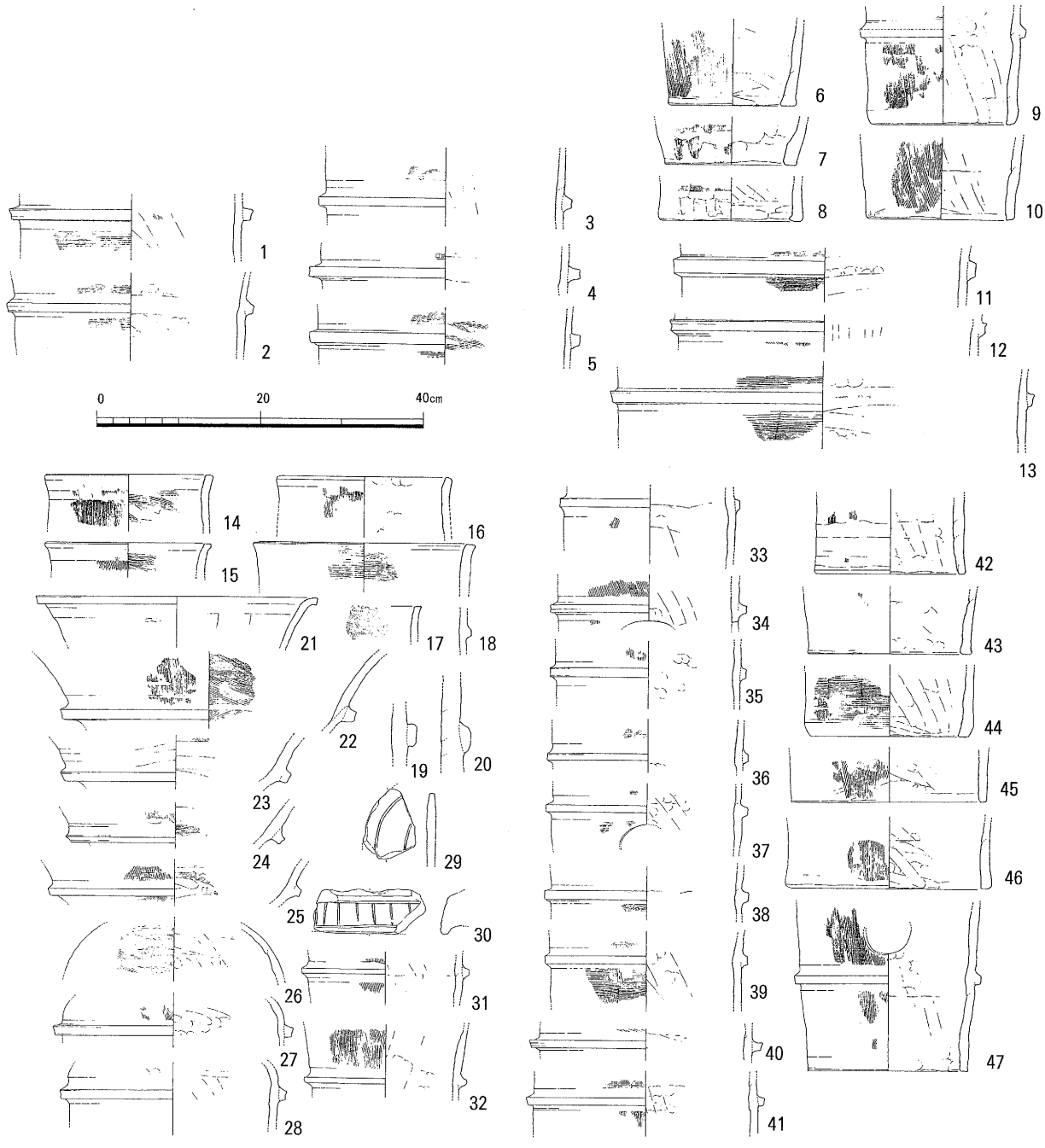


第134図　土師の里７号墳

測される。88－2区では墳丘北隅が検出された。これにより墳丘規模の予想が可能になるとともに、珠金塚古墳がほぼ正方位に墳丘を向けているのに対し、本墳の主軸は正方位からはかなり振っていることが確認された。

なお藤井寺市教育委員会により南東辺から南隅にかけての周濠の外縁と底部の一部が確認された(HJ94－4区)。その結果、周濠は南隅で幅を狭めていることが判明し、南東辺の墳丘裾がより南方に延びている可能性が示された。

出土遺物の大半は埴輪である。埴輪には円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（靱形、家形など）が認められる。そのうち本墳に伴うと考えられる円筒埴輪は、外面2次調整が突帯間1段のB種ヨコハケであり、その静止痕はほぼ垂直である。こうした特徴から本墳の時期は5世紀中葉に比定されよう。



第135図　土師の7号墳 周濠出土円筒埴輪・形象埴輪

第３節　埴輪棺墓の調査

府営道明寺南住宅地区ではⅠ区５基、Ⅱ区７基、Ⅲ区11基、Ⅳ区５基、Ⅴ区２基の計30基の埴輪棺墓が検出された。加えて90－⑤区でもⅡ区・墓29に繋がるとみられる埴輪棺墓のほかさらに１基が検出されており、また藤井寺市教育委員会の調査によるＨＪ91－３区では３基並列の埋葬施設に埴輪棺墓を採った土師の里８号墳とともに５基の埴輪棺墓が検出され、古墳埋葬施設を除いても40基近い埴輪棺墓が一帯でみつかっている。

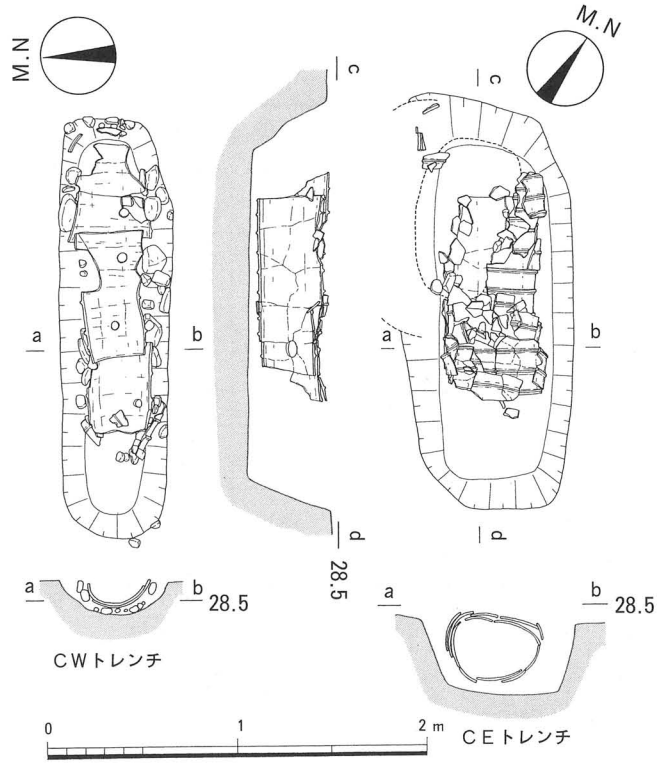
土師の里遺跡ではさらに、78－11区で１基、79－１区で３基、85－２区で２基の埴輪棺墓が検出されている。ただし、78－11区の１基および79－１区の３基は直接的に古墳に伴うあるいはその可能性が高いものであり、府営道明寺南住宅地区の埴輪棺墓の多くとは構築状況を若干異にしている。

したがってこれまで45基検出された埴輪棺墓の大半が府営道明寺南住宅地区に集中しているとともに、単独の埋葬施設としての埴輪棺墓はほぼその地区一帯に限られた存在であったといえる。

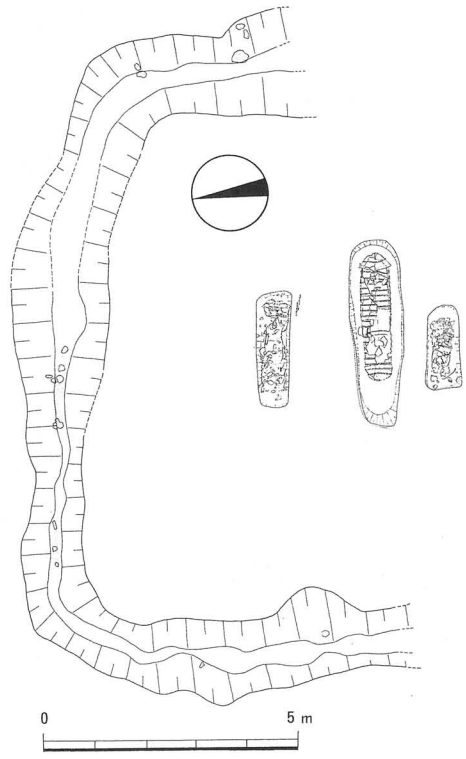
土師の里遺跡周辺においても埴輪棺墓の存在は認められる。市野山古墳や岡ミサンザイ古墳の外堤上で検出されたものや、青山５号墳周濠内検出のものなど古墳と直接関連して設けられたものもあるが、国府遺跡や茶山遺跡、はざみ山遺跡などでは単独の埋葬施設が存在する。ことに茶山遺跡ではこれまで10基以上の埴輪棺墓が検出されており、土師の里遺跡ほどの密度はないものの比較的密集した分布状況を示している。

土師の里遺跡と茶山遺跡とは隣接しているが、埴輪棺墓の分布には断絶がある。したがって両遺跡の埴輪棺墓は墓域を異にしていると考えられる。ただし、その違いが集団間の相違なのか集団内におけるものかは明らかにはしがたい。

さらに、埴輪棺墓の分布に疎密はあるものの土師の里遺跡、茶山遺跡に限らず古市古墳群域全体に及んでいることは、特定集団以外にもこの形態の埋葬施設が採用された可能性を暗示させる。



第136図　85－２区検出埴輪棺墓



第137図　土師の里８号墳

No.	調査区		埴輪棺墓	掘方		棺・槨長	棺身			
				長	幅		構成埴輪数	専用・転用	構造	川西編年
1	85－2区		CE	2.2	0.9	1.3～	2～	転用	複棺連接	Ⅳ
	85－2区		CW	2.3	0.7	1.8	3	転用	複棺連接	Ⅳ
2	79－1区	土師の里3号墳	1号棺	2.1	0.7	1.7	2	転用	複棺連接	Ⅳ
	79－1区	土師の里3号墳	2号棺	1.4	0.6	1.2	2	転用	複棺連接	Ⅳ
	79－1区	土師の里3号墳	3号棺	2.0	0.6	1.9	2	転用	複棺連接	Ⅳ
3	78－11区	土師の里2号墳		1.3	0.6	1.2	1	転用	単棺	
4	府住87・88年度	Ⅰ区	墓2	1.9	0.8	1.8～	1	転用	単棺	Ⅳ
	府住87・88年度	Ⅰ区	墓4	0.9	0.5	0.5～	1	転用	槨状囲繞	Ⅳ
	府住87・88年度	Ⅰ区	墓5	1.6	1.2	0.5～	1	転用	複棺連結？	Ⅳ
	府住87・88年度	Ⅰ区	墓23	2.0	0.75	1.6	1	転用	槨状囲繞	Ⅳ
	府住87・88年度	Ⅰ区	墓27	1.6	0.6	0.9～	2？	転用	複棺連結？	Ⅳ
5	府住87・88年度	Ⅱ区	墓28	2.3	0.8	2.1	2	転用	複棺連結	Ⅲ
	府住87・88年度	Ⅱ区	墓29	推3.7	1.0	3.1	2	転用	複棺連接	Ⅳ
	府住87・88年度	Ⅱ区	墓30	1.55	0.7	1.2	1	専用	単棺	Ⅳ
	府住87・88年度	Ⅱ区	墓31			0.6	1？	転用	単棺	Ⅲ
	府住87・88年度	Ⅱ区	墓34			1.3～	2	転用	複棺連結	Ⅱ・Ⅲ
	府住87・88年度	Ⅱ区	墓35			0.7～	1	転用	槨状囲繞	Ⅲ
	府住87・88年度	Ⅱ区	墓36			1.4～	2	転用	複棺連結	Ⅳ
6	HJ91－3区	土師の里8号墳	第1主体部	3.7	1.0	2.5	2	専用	複棺連接	Ⅲ
	HJ91－3区	土師の里8号墳	第2主体部	2.3	0.7	1.9	1	専用	単棺	Ⅳ
	HJ91－3区	土師の里8号墳	第3主体部	1.7	0.7	1.2	1	専用	単棺	Ⅳ
	HJ91－3区		円筒棺墓4	2.3	1.0	2.0	2	専用	複棺連接	Ⅳ
	HJ91－3区		円筒棺墓5	1.4	0.8	1.3～	1	専用	複棺連接	Ⅳ
	HJ91－3区		円筒棺墓6	2.5？	1.1		1	専用	複棺連接	Ⅳ
	HJ91－3区		円筒棺墓7		1.1		2？	転用	複棺連接？	Ⅳ
	HJ91－3区		円筒棺墓8		0.8		1	転用	単棺	Ⅳ
7	府住91年度	Ⅲ区	円筒棺1	2.36	0.87	1.9～	2	転用	複棺連接	Ⅳ
	府住91年度	Ⅲ区	円筒棺2	2.15	0.9	2.1	2	転用	槨状囲繞	Ⅲ
	府住91年度	Ⅲ区	円筒棺3	2.5	0.87	2.2	2	転用	複棺連結	Ⅳ
	府住91年度	Ⅲ区	円筒棺4	1.45	0.68	1.2	1	転用	単棺	Ⅳ
	府住91年度	Ⅲ区	円筒棺5	2.1	1.18	1.8	2	転用	複棺連結	Ⅲ
	府住91年度	Ⅲ区	円筒棺6	2.83	0.7	1.9～	1	転用	複棺連接?	Ⅲ
	府住91年度	Ⅲ区	円筒棺7	～1.3	0.43	0.8～	3？	転用	複棺連結	Ⅲ
	府住91年度	Ⅲ区	円筒棺8	0.95～	0.67	0.7～	1？	転用	単棺	
	府住91年度	Ⅲ区	円筒棺9	2.55	0.68	1.9～	3	転用	複棺連結	Ⅳ
	府住91年度	Ⅲ区	円筒棺10	1.68～	0.64	1.6～	3	専用	複棺連結	Ⅲ・Ⅳ
	府住91年度	Ⅲ区	円筒棺11	1.4～	0.85	0.7～	1？	転用	単棺	
8	府住92年度	Ⅳ区	円筒棺1	2.0～	0.85	1.8～	1	転用	単棺	Ⅲ
	府住92年度	Ⅳ区	円筒棺2	2.3	0.8	1.9	2	転用	複棺連結	Ⅳ
	府住92年度	Ⅳ区	円筒棺3	1.93	0.7	1.1～	2？	転用	複棺連結？	Ⅳ
	府住92年度	Ⅳ区	円筒棺4	2.5～	0.65	2.2～	2～	転用	複棺連結	Ⅳ
	府住92年度	Ⅳ区	円筒棺5	1.5	0.6	1.1～	1	転用	単棺	Ⅳ
9	府住95年度	Ⅴ区	埴輪棺墓1	1.68	0.59	1.4	6	転用	蓋状覆い	Ⅳ
	府住95年度	Ⅴ区	埴輪棺墓2	2.5	0.68	1.8?	2～	転用	槨状囲繞	

第2表　埴輪棺墓一覧表

閉塞部			副葬品	頭位	時期	備考
専用・転用	構造	川西編年				
転用	南：円筒2	V		南		古墳周濠内
転用	北：衣蓋1					古墳周濠内
転用	南：円筒1、北：円筒1、盾1		棺内：刀子、土師器提瓶 掘方内：土師器甕	南	6世紀末～7世紀初頭	古墳周濠内
				東		古墳周濠付近
転用	西：朝顔			東		
				西		改葬墓あるいは小児棺
転用	南：円筒3	Ⅳ				
専用	北：笠形、南：笠形					木棺墓の可能性
転用	西：円筒	Ⅳ		東		
転用	西：朝顔、東：朝顔			東		
転用	北西：衣蓋1・円筒1、南東:衣蓋1	Ⅳ				古墳周濠内？
	拳大の円礫			東		
				東		棺を固定するために拳大の小礫使用
						掘方底に4枚の板石
				西		
専用	東西：笠形各1		棺内：刀1、剣1、棺上：鋤1、鎌1、斧1、鏃8	東	5世紀後半	東に埴輪片の枕
転用	東：笠形、西：家		棺内：短剣 棺外：槍1・矛1	東	5世紀後半	東に埴輪片の枕
転用・専用	東：朝顔、西：笠形					
専用	東西：笠形各1		石製品	東？		
専用	南北：笠形各1					
専用	東：笠形、西：円筒2					
転用	南：円筒					
転用	南：円筒3					掘方上面より7世紀後半の土師器
転用	西：円筒1		鶏形埴輪の頭部	東		
転用	北西：円筒1・朝顔、南東：円筒？	Ⅲ		北西		
転用	南：円筒1、北：円筒1	Ⅳ		南		
転用	北東：円筒1、南西：円筒1	Ⅳ		北東		小児埋葬の可能性
転用	南：衣蓋、北：円筒	Ⅲ	土師器坩2、鉄鎌1	南	7世紀	
専用	北：笠形		須恵器甕1、鉄鎌1、刀子1	北	5世紀後葉	
	南：土師器鉢				7世紀	改葬もしくは小児埋葬の可能性
転用	西：円筒			東		
				南		
転用	南：朝顔					黄褐色粘土を充填して棺身を固定
転用	南：円筒1	Ⅳ		南		
転用	北：円筒1、南：円筒1	Ⅳ		東		
				南		
転用	東：円筒1	Ⅳ	鉄鏃11	西	5世紀末	
転用	西：円筒1	Ⅳ		西？		改葬もしくは小児埋葬の可能性
				南		
				北西		棺身に囲形埴輪使用

（No.は第138図と対応）

第138図　土師の里遺跡および周辺の埴輪棺墓検出地点

第4節　古墳時代の集落の調査

大阪府教育委員会の調査で、古墳時代の住居もしくはその可能性のある遺構が検出された調査区は76区、77－22～24区、78－６区、78－８区、78－12区、79－15区、79－17区、80－10区、82－14区の計11箇所である。これは本遺跡の範囲と調査件数を考えると決して多いとはいえない。しかも検出された位置は、遺跡の中心からやや南方にかけての約200ｍ四方の範囲に限られている。

ここで報告するのは大半が竪穴住居である。確実に当該期といえる掘立柱建物は明らかではなく、可能性のあるものは78－６区および80－10区で検出されているのみである。

78－６区では掘立柱建物1棟が検出されている。この建物の時期は６世紀代の可能性もあるが、平安時代の遺構、遺物も同時に検出されていることから断定はできない。

80－10区では小穴が多数検出された。時期は６世紀前半に比定されているが、調査区が狭小なため、建物の復元はできなかった。

次いで以下に、竪穴住居について概略を報告する。

[77－23、78－６区]

まず11箇所の調査区のうち77－23区、78－６区で検出した遺構については竪穴住居である可能性は高いものの、確実とはいえないものである。

77－23区では調査区の幅が0.5ｍと狭小だったために遺構は充分に確認できなかったが、住居の存在が推測されている。本調査区では包含層が約50㎝と厚く、上層が奈良時代、下層が古墳時代であることから、竪穴住居の存在が確実なら当該期のものである可能性は高いと考えられる。

78－６区では竪穴状落込みとして報告されている遺構が６世紀代の住居となる可能性がある（第142図）。ただ、調査区の隅でその一部を検出したに過ぎないので断定はできない。

[76、77－22、78－８、78－12、82－14区]

76区、77－22区、78－８区、78－12区、82－14区では竪穴住居１軒が検出されている。

76区では調査区端でその一部が検出されたが、過半は調査区外にある（第142図）。そのため詳細については不明である。

77－22区では他の遺構に切られて住居の一部が遺存していたにすぎない（第142図）。古墳時代後期の可能性があるが、やはり詳細は不明である。

一方、残る78－８区、78－12区、82－14区の住居については時期の特定が可能である。78－８区の住居は６世紀末～７世紀初頭に比定される。78－12区（第142図）は６世紀後半、82－14区（第142図）は５世紀中葉にそれぞれ比定される。

[77－24、79－15、79－17区]

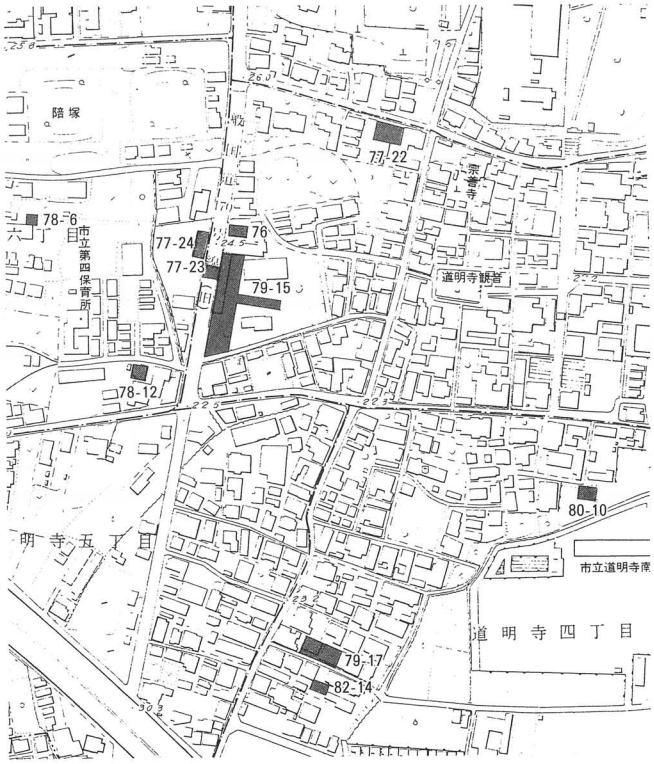
竪穴住居を複数軒検出している調査区は、77－24区、79－15区、79－17区である。

77－24区では複雑な重複関係のある10軒が検出された（第139・140図）。調査区が狭小な上、遺存状況は悪く、重複関係にも不明瞭な部分があるが、出土遺物も含めて判断すると、１号住居が５世紀後半、２号住居が５世紀末～６世紀初頭、３号住居が５世紀後葉、４号住居が６世紀初頭、５号住居が４世紀後葉、６号住居が６世紀前葉、７号住居が５世紀末葉、８号住居が５世紀前半にそれぞれ比定できると思われる。

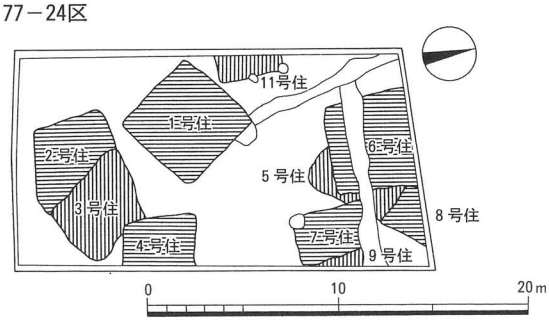
住居の主軸をみるとおよそ２分される。６・７・11号住居がほぼ北－南方向に近く、他は西に振っているが、中でも１・３・５・８号はＮ－35～50°－Ｗと振れが大きい。それぞれの住居の時期を考えると、北－南方向に近いものは５世紀末以降、主軸が大きく西に振るものは４世紀後半～５世紀後

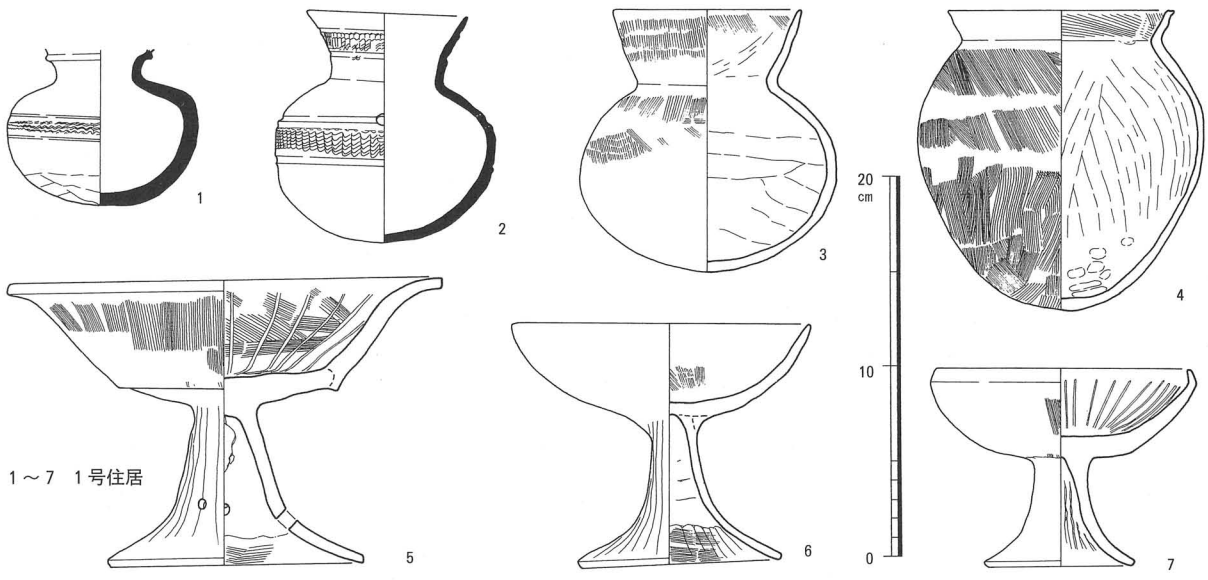
葉と明確に分かれる。つまり5世紀末を境に主軸は正方位に近くなるものと推測される。したがって遺物からは時期を決定できなかった9・11号住居のうち、11号住居については主軸の方向からみる限り、5世紀末以降に比定されよう。ただ9号住居は主軸も不明なため、判断する手掛かりがない。

79－15区では9軒が検出された（第143～148図）。調査区北半部の7軒は重複関係があるので、これを整理すると、3号住居が7号住居に、5号住居が4号住居に、10号住居が8号住居と9号住居にそれぞれ切られている。なお第143図では5号住居が4号住居を切っているように表現しているが、整理作業の結果、明かに出土遺物の時期と矛盾しており、調査時の誤認であることが判明しているので、ここで訂正しておく。また7号住居は調査時点では単独の住居と認識したが、その後に6号住居と同一であることが判明したため欠番となっている。それぞれの住居の時期については、1号住居が6世紀前葉、2号住居が5世紀末～6世紀初頭、3号住居が5世紀中葉、4号住居が7世紀中葉、5号住居が6世紀後葉、6号住居が5世紀末、8号

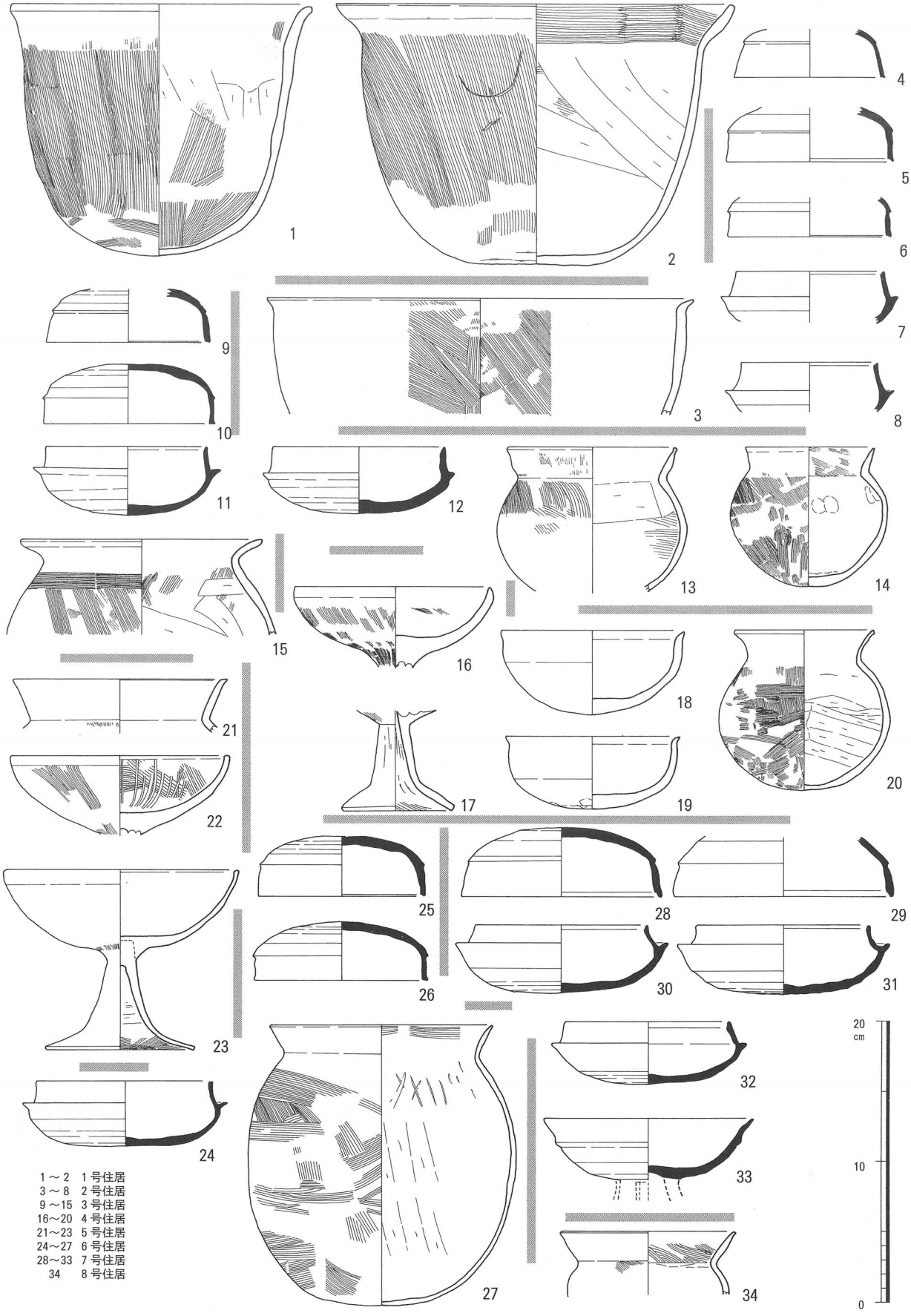


77－24区





第139図　古墳時代住居検出調査区、77－24区全体概念、住居出土遺物（1）

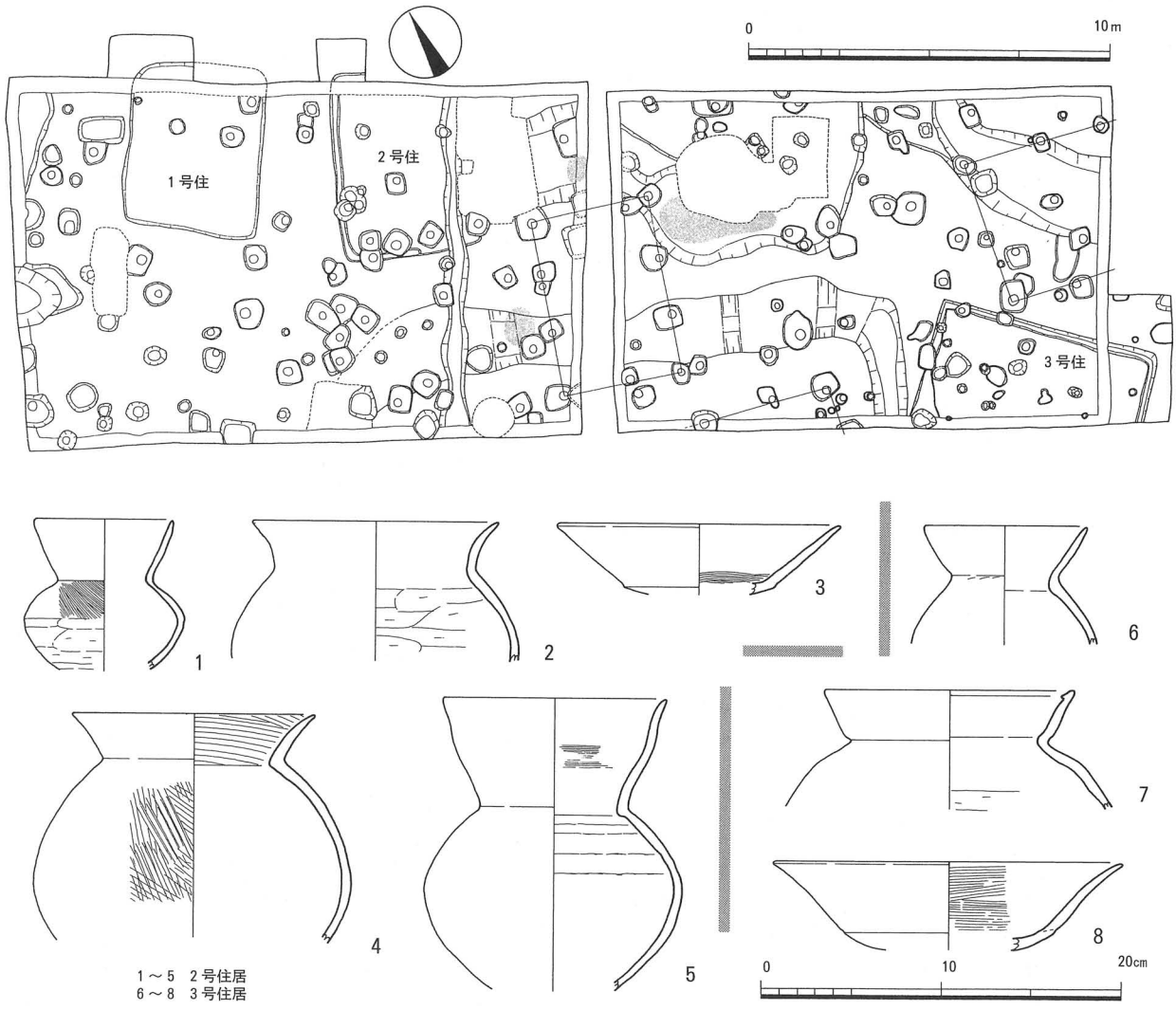


第140図　77－24区 住居出土遺物（２）

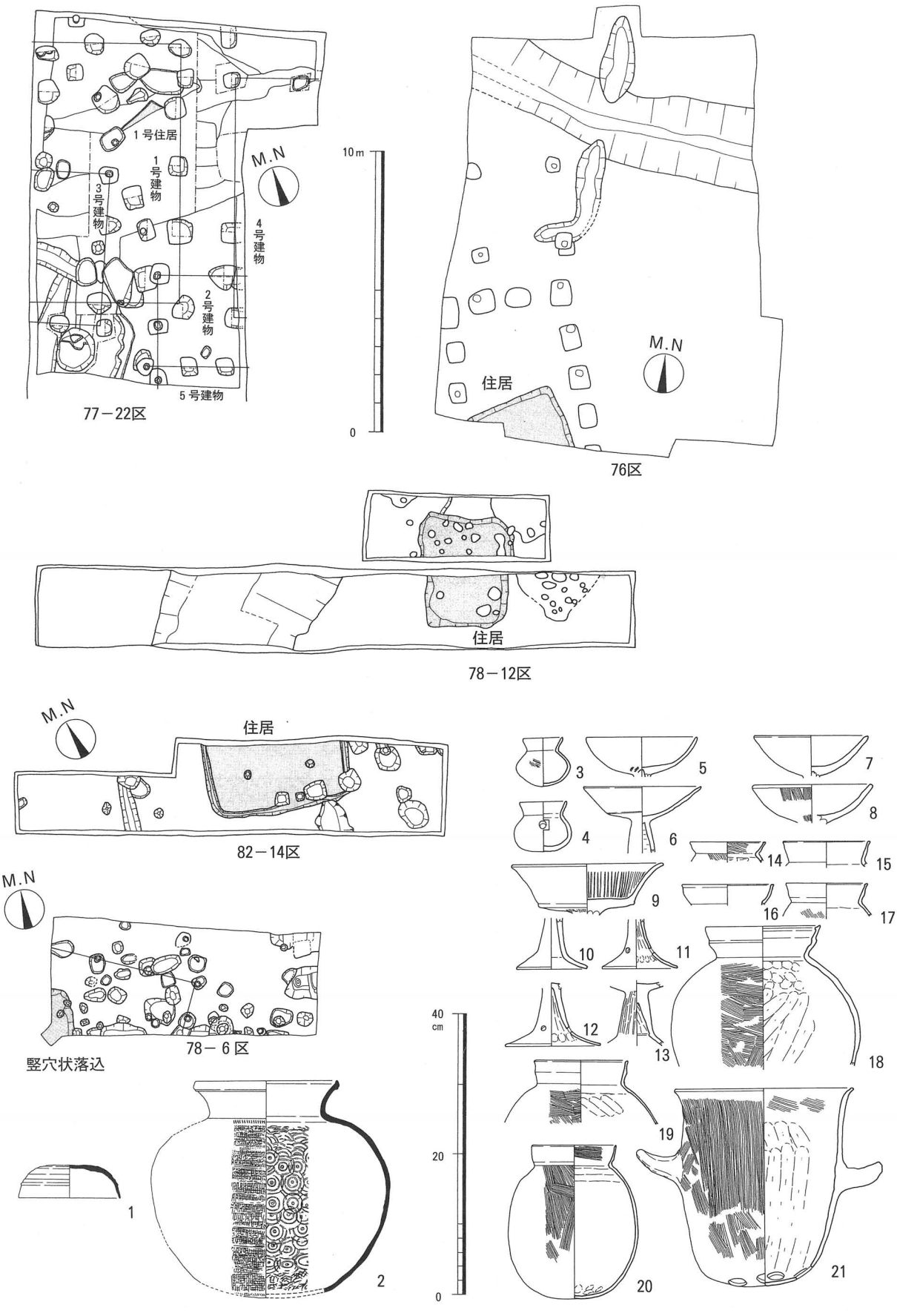
住居が6世紀後葉、9号住居が6世紀後葉、10号住居が5世紀後葉にそれぞれ比定される。10号住居を切っている8号と9号住居の間に重複関係がないので、両者の前後関係はわからず、遺物でも時期差は明瞭ではない。

住居の主軸をみると、北－南方向もしくはこれに近い1・4・5・6・8・9号住居（8号住居は僅かに東に主軸を振るが、この範疇に入れることが可能である）と、西に振る2・3・10号住居に2分することが可能である。2・3・10号住居の主軸の振れはN－15°－W程度である。そしてそれぞれの住居の時期と主軸方向を比較すると、5世紀後葉以前は主軸を西に振っており、5世紀後葉以降は正方位もしくはこれに近くなるということができよう。

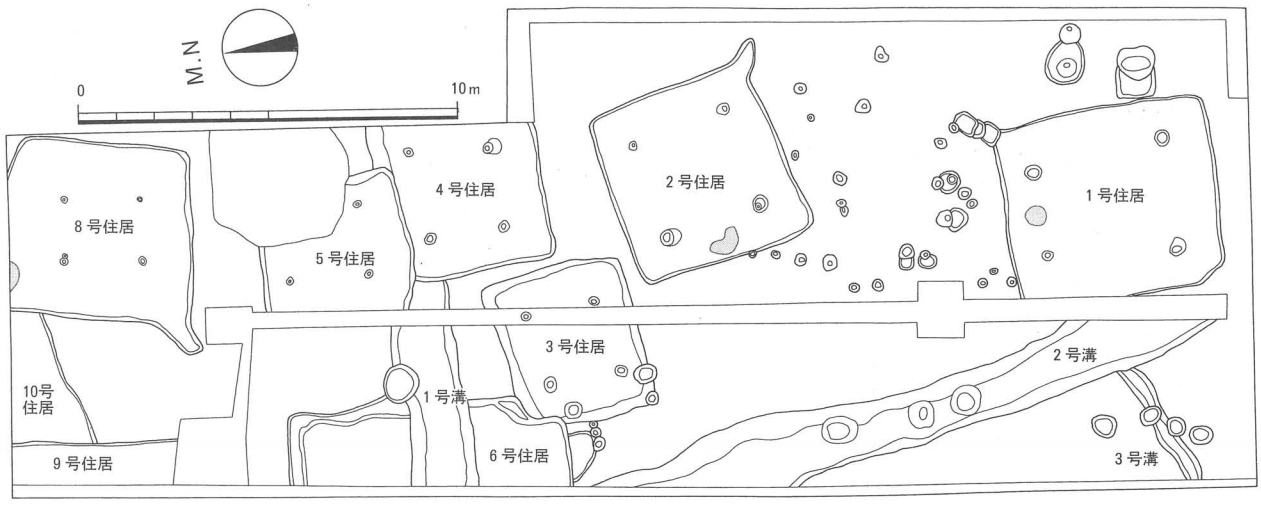
79－17区では重複関係をもたない3軒の竪穴住居が検出された(第141図)。出土遺物からみて、1号住居は6世紀代、2・3号住居は5世紀初頭にそれぞれ比定できよう。住居の主軸はいずれも東に振っているが、1・2号住居がおよそN－25°－Eであるのに対し、3号住居はN－45°－Eと大きく東に振っている。検出軒数が少ないので判然とはしないが、少なくとも調査区内の状況をみる限り、主軸と時期に相関性は認められず、さらに77－24区、79－15区の住居の主軸とも共通点はない。



第141図　79－17区 全体平面、出土遺物

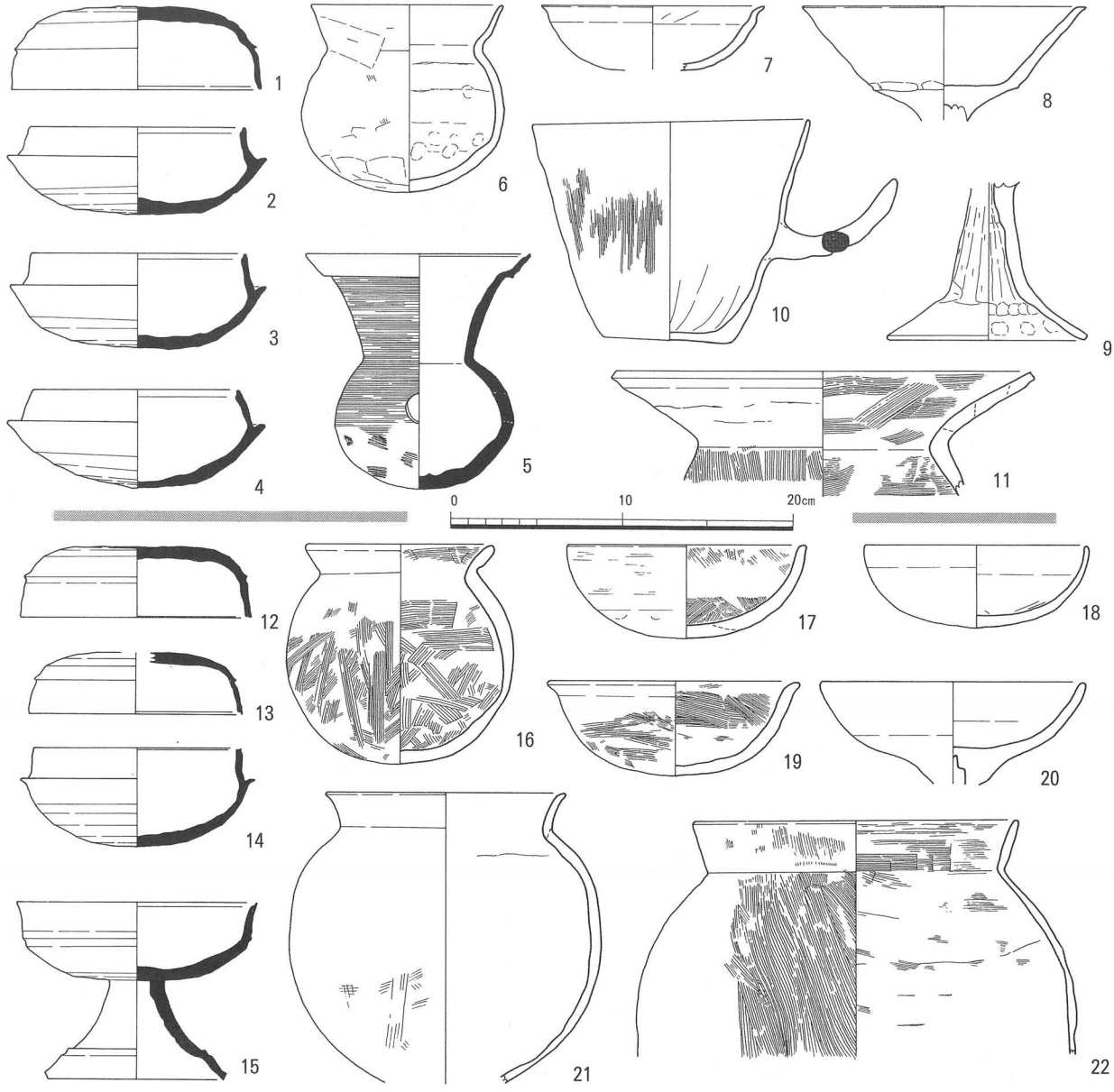


第142図　76・77－22・78－6・78－12・82－14区 全体平面、出土遺物



第143図　79－15区 全体平面

1～11　1号住居
12～22　2号住居

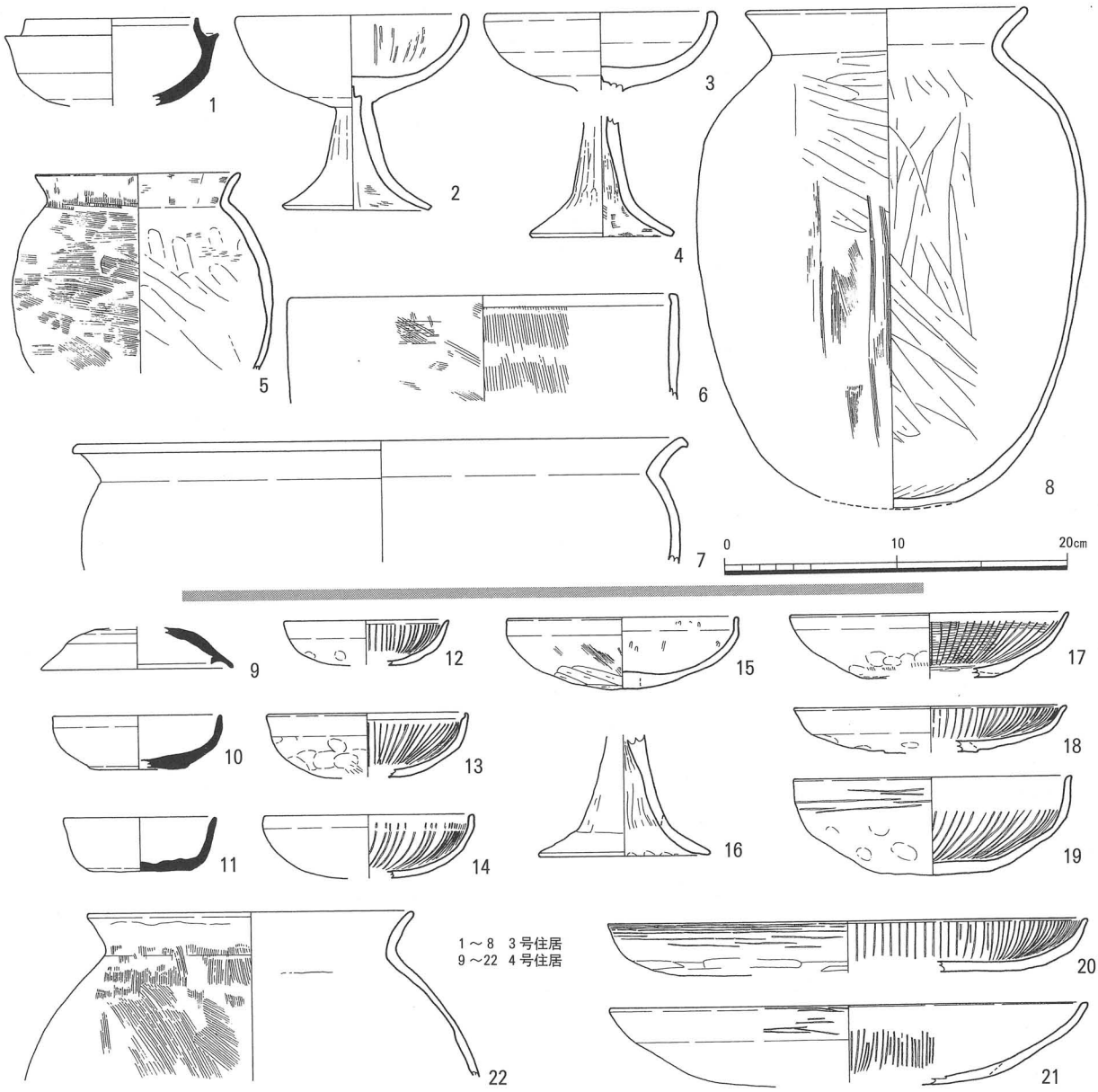


第144図　79－15区　1・2号住居出土遺物

以上、既往の調査で検出された確実な竪穴住居は27軒を数える。

また、藤井寺市教育委員会の調査成果についても触れておく。藤井寺市教育委員会の調査では古墳時代の住居は6地点で確認されている（HJ96－12区とHJ97－5区は同一地点として捉えた）。この市教委の調査により示される古墳時代の住居分布は、府教委の調査成果とほぼ一致している。ただ市立道明寺南小学校南側でのHJ92－10区で竈をもつ5世紀後葉～6世紀前葉の竪穴住居1軒を含めた竪穴住居2軒が検出され、住居分布が本府教育委員会の調査で想定された範囲から、より南方に広がることが判明した。しかし密集度合などから考えると、住居域の中心は市立第四保育所東側の府教委77－24区、79－15区、市教委HJ96－12区、HJ97－5区付近であったとみられ、その外周になるにつれ、住居は分散的に広がっていると考えられる。

以上の成果を簡単にまとめておく。本府教育委員会が調査した竪穴住居として確実なもの27軒のうち、時期が判明しているものは23軒である。このうち最も時期の遡るものは77－24区5号住居の4世紀後葉である。4世紀代の住居は現在のところ、この1軒だけである。さらに5世紀代（～6世紀初

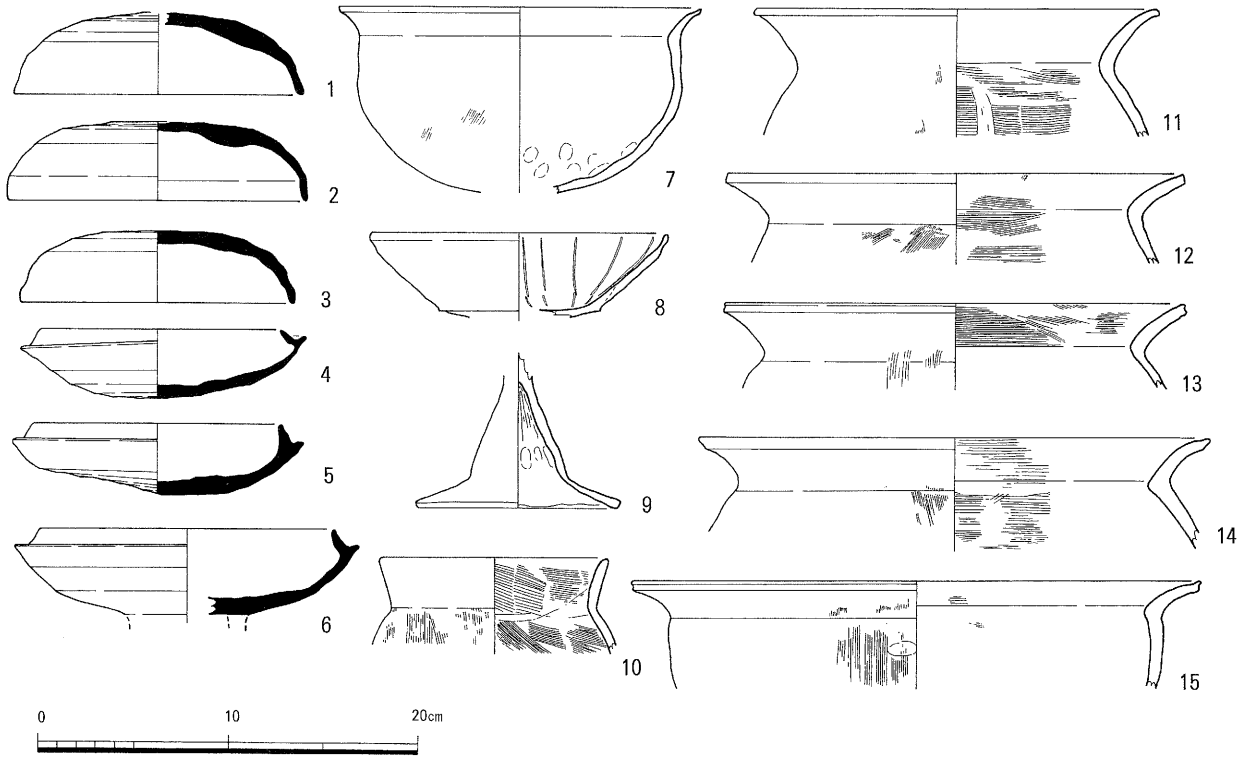


第145図　79－15区　3・4号住居出土遺物

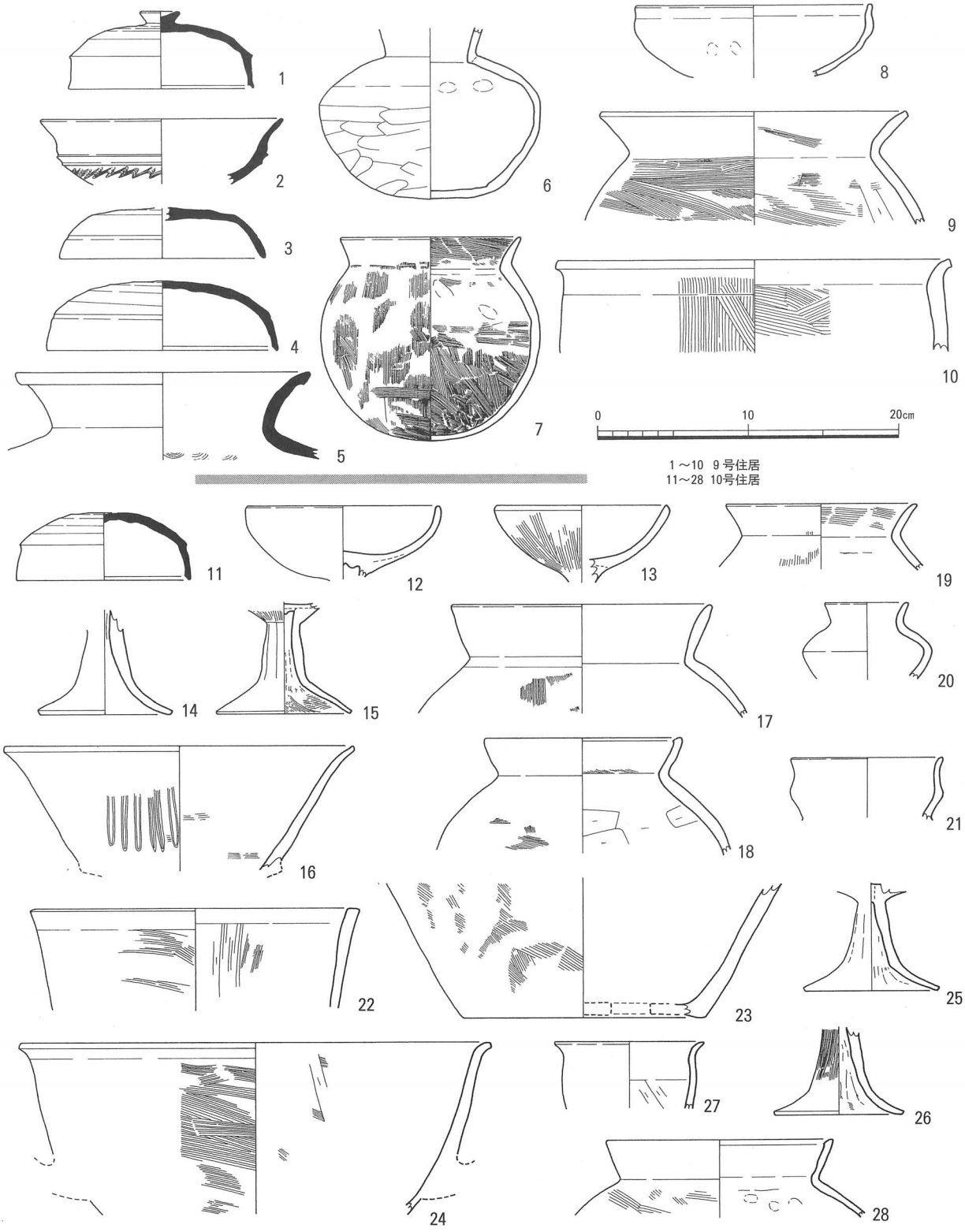
頭）は13軒、6世紀代（～7世紀初頭）は7軒、7世紀代は1軒となる。

注目されるのは4世紀代の住居がいまだ1軒に留まっていること、それに対して5世紀代の住居は全体の約半数を占める数が検出されていることである。既往の府営道明寺南住宅地区の調査では、Ⅲ区において弥生時代後期の住居やその他の遺構が検出されている。したがって今後の調査によって3～4世紀代の住居がさらに検出される可能性は充分考えられるものの、検出事例が急増するのは5世紀以降であるという現状の調査結果が覆されるとは考えにくい。こうした状況は古市古墳群の造営と軌を一にした動向であると考えざるを得ず、集落を営む主体の問題と切り離しては議論できない。

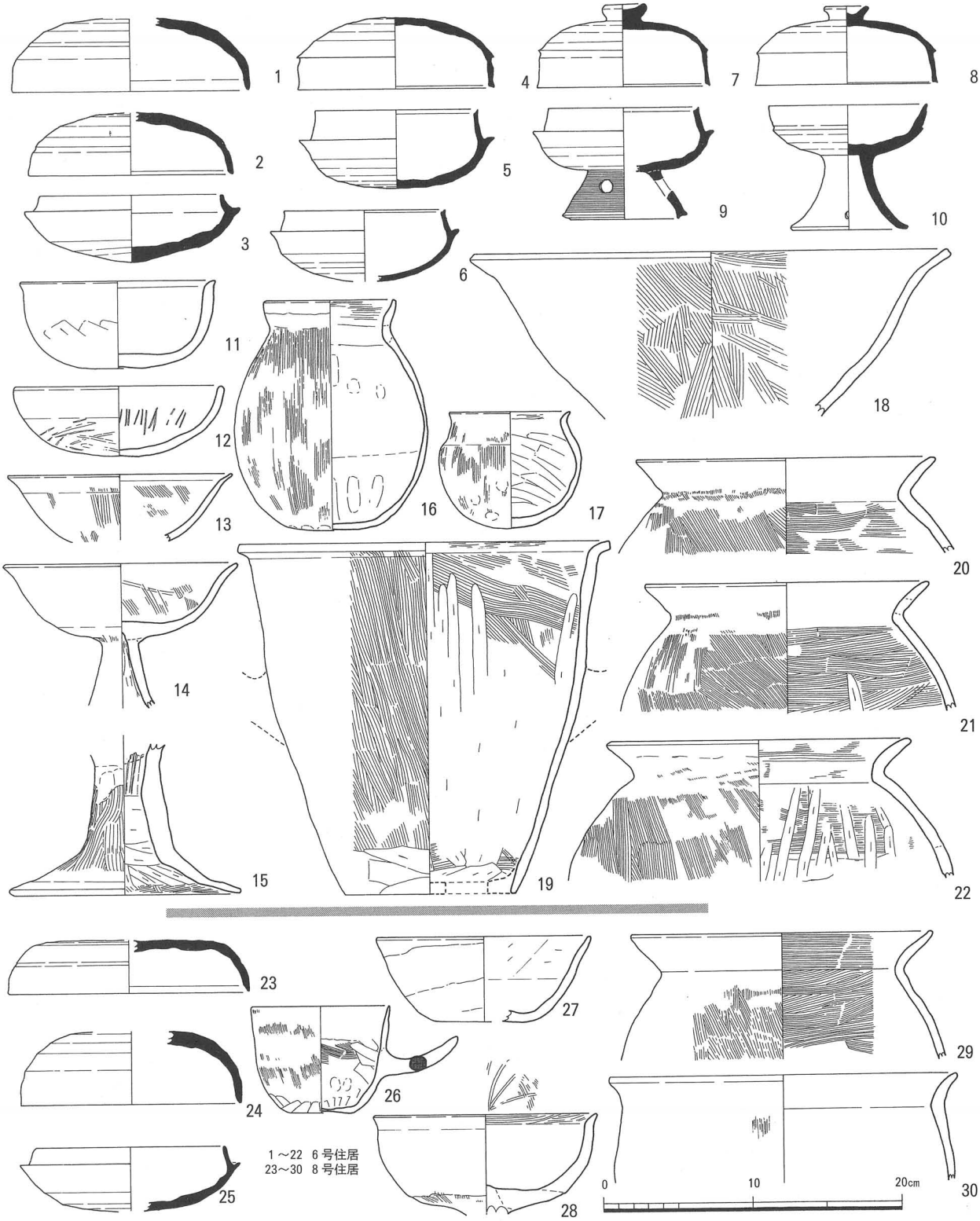
また住居の主軸の違いに着目すると、多くの住居を検出した77－24区と79－15区では、4世紀後葉～5世紀後葉までは主軸を西に振っており、5世紀末を境に正方位に移り変わる状況を看取することができる。両調査区は旧国道170号線を挟んだだけの非常に近接した地点にあり、変遷が一致するのは当然の帰結ともいえる。ゆえに他の調査区の住居にかならずしも当てはまるものではなく、集落の中心とみられる地点だけの現象であるのかも知れない。こうした問題を検討するには、集落の構造をさらに明かにする必要があるが、当面は資料の増加を待たざるを得ない。



第146図　79－15区　5号住居出土遺物

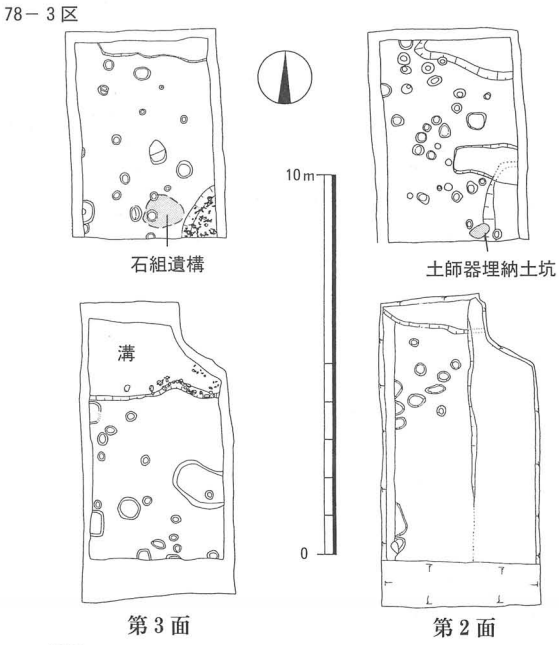


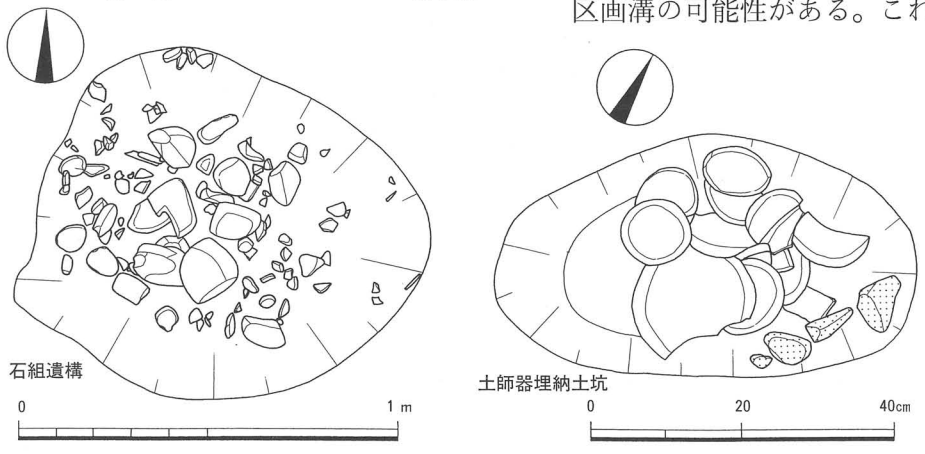
第147図　79－15区　9・10号住居出土遺物



第148図　79－15区　6・8号住居出土遺物

第5節　土師寺周辺の調査





第149図　土師寺関連遺構検出調査区、78－3区全体平面

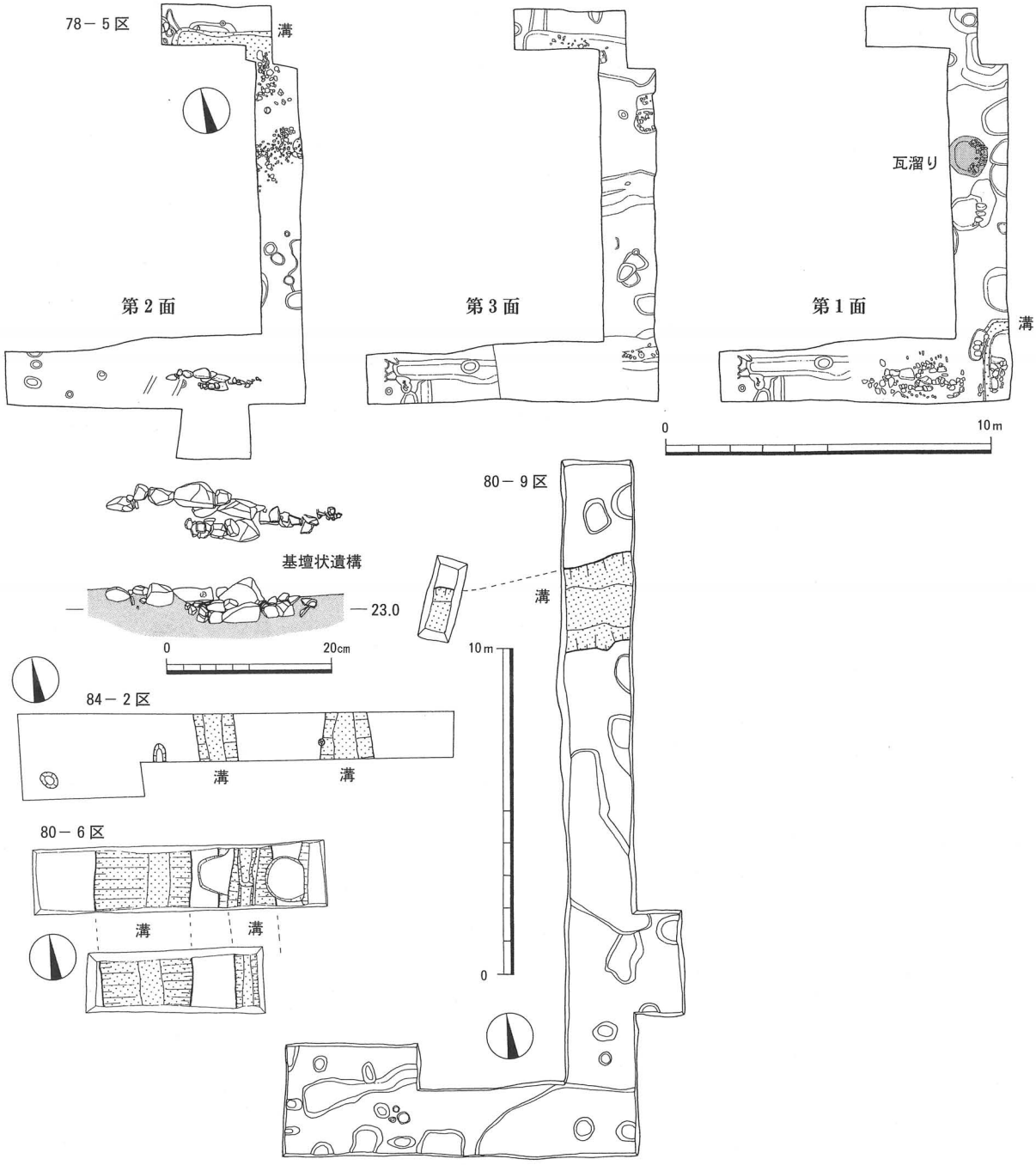
土師氏の氏寺と考えられる土師寺は、四天王寺式伽藍配置をとると推定される古代寺院である。その本来の寺域は現在の道明寺天満宮の南崖下にあったと考えられている。

寺域内にあたる大阪府教育委員会の調査についてみると、78－5区で奈良時代の溝と不整形小穴、奈良～平安時代の焼土層と整地層、平安～鎌倉時代の溝や土坑、小穴、室町時代の壇状遺構、瓦溜り、溝、土坑などが検出されている。また84－2区では南北に延びる幅1.2～1.5mの2条の溝が検出され、寺域の区画に関わるものとみられる。

また、これらの周辺の調査では78－3区で奈良時代の石組遺構、溝、柱穴、平安～室町時代の土師器埋納土坑、溝、小穴などが検出されている。土師器の埋納土坑は長径55cm、短径32cmの大きさで、平安時代後期の土師器皿が10枚以上埋置されていた。また奈良時代の幅2m以上の東西溝から墨書土器が20点近く出土し、「寺」、「土寺」と記されたものもある。80－6区では奈良時代の幅2.7～2.9mの南北溝1条と中世の南北溝2条、土塁状遺構が検出され、奈良時代の溝からは山田寺式系軒丸瓦などが出土した。この溝も寺域外に位置するが、土師寺にかかわるものとみられる。79－7区でも幅2m以上の奈良時代の南北溝が検出された。また推定寺域から北西約20mの80－9区では幅2.5mの奈良時代の東西溝と土坑3基が検出され、この溝も土師寺にかかわる区画溝の可能性がある。これらの溝の分布から考えると、北20m、西7mほどで寺域がさらに囲われていたとみられる。

一方、藤井寺市教育委員会の調査では、府教委79－7区東側のHJ87－4区で府教委80－6区の延長とみられる幅1.5～2.5m

の奈良時代の南北溝が検出され、土器が多量に出土した。推定寺域の南端中央に位置するHJ88－1区では創建時の塔跡推定地に近接した地点で瓦溜りが検出され、豊浦寺式軒丸瓦を含む7世紀前半の瓦が出土した。土師寺の創建年代を考える上で重要な資料である。さらに、府教委78－5区北西のHJ93－6区では土師寺の北を画すると考えられる地形の削り込みが、推定寺域の北西隅近くのHJT94－1区では南北溝が検出されている。また下水道工事に伴う試掘調査（HJ92－9区）でも古代の河川がみつかっている。



第150図　78－15・80－6・80－9・84－2区 全体平面

観　察　表

挿図番号	出土遺構	法量		外面1次調整	外面2次調整	内面調整
		口径	底径			
10－1	盾塚古墳埴輪列No.9		(底)19.5	タテハケ　8～9条/cm、ユビナデ・オサエ		ユビナデ・オサエ
10－2	盾塚古墳埴輪列No.3		(底)20.9	タテハケ　8条/cm、ユビナデ・オサエ		タテ・ナナメハケ、ユビナデ・オサエ
10－3	盾塚古墳埴輪列No.4		(底)22.2	タテハケ　7～9条/cm、ユビナデ		タテ・ナナメハケ、ユビナデ・オサエ
10－4	盾塚古墳埴輪列No.2		(底)21.6	タテハケ　7～8条/cm、ユビナデ・オサエ		ナナメハケ、ユビナテ・オサエ
10－5	盾塚古墳埴輪列No.6		(底)21.8	タテハケ　8～10条/cm、ヘラナデ、ユビナデ・オサエ		ユビナデ・オサエ
10－6	盾塚古墳埴輪列・撹乱		(底)18.6	タテハケ　8～9条/cm、ユビナデ・オサエ		ユビナデ・オサエ
10－7	盾塚古墳埴輪列No.15		(底)23.0	タテハケ　7～8条/cm、ユビナデ・オサエ		ユビナデ・オサエ
10－8	盾塚古墳埴輪列No.5		(底)18.8	タテハケ　7～8条/cm、ユビナデ		ユビナデ・オサエ
10－9	盾塚古墳埴輪列No.10		(底)22.8	タテハケ　8条/cm、ユビナデ・オサエ		タテハケ、ユビナデ・オサエ
10－10	盾塚古墳埴輪列No.8		(底)21.2	タテハケ　8～10条/cm、ユビナデ・オサエ		ナナメハケ、ユビナデ・オサエ
10－11	盾塚古墳埴輪列No.14		(底)19.8	タテハケ　8条/cm、ユビナデ・オサエ		ユビナデ・オサエ
10－12	盾塚古墳埴輪列No.1		(底)19.8	タテハケ　8条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
10－13	盾塚古墳埴輪列・撹乱		(底)18.2	タテハケ　8条/cm、ユビナデ・オサエ		ユビナデ・オサエ
11－1	盾塚古墳埴輪列No.14		(底)23.6	タテハケ　8条/cm		ユビナデ・オサエ
11－2	盾塚古墳埴輪列No.15		(底)21.0	タテハケ　7条/cm		ユビナデ・オサエ
12－1	盾塚古墳埴輪列No.1		(底)22.1	タテハケ　7～8条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
12－2	盾塚古墳埴輪列No.2		(底)18.3	タテハケ　7条/cm		ユビナデ・オサエ
12－3	盾塚古墳埴輪列No.3		(底)20.9	タテハケ　7～8条/cm		ユビナデ・オサエ
12－4	盾塚古墳埴輪列No.4		(底)21.0	タテハケ　9条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
12－5	盾塚古墳埴輪列No.5		(底)19.8	タテハケ　8～9条/cm		ユビナデ・オサエ
12－6	盾塚古墳埴輪列No.7		(底)21.6	タテハケ　9条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
12－7	盾塚古墳埴輪列No.8		(底)18.5	タテハケ　10条/cm		ユビナデ・オサエ
12－8	盾塚古墳埴輪列No.11		(底)21.2	タテハケ　7～8条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
12－9	盾塚古墳埴輪列No.12		(底)21.0	タテハケ　8～9条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
12－10	盾塚古墳埴輪列No.13		(底)22.8	タテハケ　7～8条/cm		タテハケ、ユビナデ
12－11	盾塚古墳埴輪列No.14		(底)15.8	タテハケ　7～8条/cm		ユビナデ・オサエ
13－1	盾塚古墳埴輪列No.16		(底)20.6	タテハケ　8条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
13－2	盾塚古墳埴輪列No.17		(底)22.5	タテハケ　7～9条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
14－1	盾塚古墳周濠	(口)28.8		タテハケ　8～9条/cm		ヨコハケ
14－2	盾塚古墳周濠	(口)28.8		タテハケ　8～10条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
14－3	盾塚古墳周濠	(口)31.1		タテハケ　8条/cm		ヨコハケ
14－4	盾塚古墳周濠		(底)23.2	タテハケ　8条/cm		ユビナデ・オサエ
14－5	盾塚古墳周濠		(底)23.4	タテハケ　8条/cm		タテハケ、ユビオサエ
14－6	盾塚古墳周濠		(底)19.7	タテハケ　8条/cm		ヘラナデ、ユビナデ・オサエ
14－7	盾塚古墳周濠		(底)21.4	タテハケ　8条/cm		ユビナデ・オサエ
14－8	盾塚古墳周濠		(底)22.9	タテハケ　8条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
14－9	盾塚古墳周濠		(底)28.8	タテハケ　8条/cm		タテハケ、ヘラナデ、ユビナデ・オサエ
15－1	盾塚古墳周濠			タテハケ　8条/cm		ユビナデ・オサエ
15－2	盾塚古墳周濠		(底)21.8	タテハケ　7条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
15－3	盾塚古墳周濠		(底)22.2	タテハケ　10条/cm		タテハケ、ユビナデ
15－4	盾塚古墳周濠		(底)19.0	タテハケ8条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
15－5	盾塚古墳周濠		(底)20.6	タテハケ7～9条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
15－6	盾塚古墳周濠		(底)27.6	タテハケ9条/cm		タテハケ、ユビナデ
15－7	盾塚古墳周濠		(底)22.3	タテハケ　10条/cm		タテハケ、ユビナデ
15－8	盾塚古墳周濠		(底)25.4	タテハケ　9～10条/cm		タテハケ、ユビナデ
15－9	盾塚古墳周濠		(底)21.8	タテハケ　8～9条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
15－10	盾塚古墳周濠		(底)22.3	タテハケ9条/cm		タテハケ、ユビナデ
15－11	盾塚古墳周濠		(底)18.0	タテハケ8条/cm		タテハケ、ユビナデ
15－12	盾塚古墳周濠		(底)22.2	タテハケ9～10条/cm		タテハケ、ユビナデ
17－1	盾塚古墳周濠				ヨコナデ	ヨコハケ
17－2	盾塚古墳周濠				ヨコナデ	不明
17－3	盾塚古墳周濠				ヨコナデ	ヨコハケ、ユビナデ
17－4	盾塚古墳周濠				ヨコナデ	ヨコハケ、ユビナデ
17－5	盾塚古墳周濠				ヨコナデ	ヨコハケ、ユビナデ
17－6	盾塚古墳周濠			タテハケ7条/cm	ヨコナデ	ヨコハケ、ユビナデ
17－7	盾塚古墳周濠			タテハケ9条/cm	ヨコナデ	ユビナデ・オサエ
17－8	盾塚古墳周濠			タテハケ8条/cm		ユビナデ
17－9	盾塚古墳周濠			タテハケ8条/cm	ヨコナデ	タテ・ナナメハケ
17－10	盾塚古墳周濠			タテハケ7～8条/cm		ユビナデ・オサエ
21－1	盾塚古墳周濠			ヘラナデ、綱代文		ユビナデ
21－2	盾塚古墳周濠			ハケ		ハケ
21－3	盾塚古墳周濠			ヘラナデ		ユビナデ
21－4	盾塚古墳周濠			ハケ、ヘラナデ		ユビナデ
21－5	盾塚古墳周濠			ユビナデ、綱代文		ユビナデ
21－6	盾塚古墳周濠			ユビナデ、綱代文		ユビナデ
21－7	盾塚古墳周濠			ユビナデ		
22－1	盾塚古墳周濠			ヘラナデ、綾杉文		ユビナデ
22－2	盾塚古墳周濠			ユビナデ、綾杉文		ユビナデ
22－3	盾塚古墳周濠			ハケメ、綾杉文		ハケ、ユビナデ
22－4	盾塚古墳周濠			ユビナデ		ユビナデ
22－5	盾塚古墳周濠			ユビナデ		ユビナデ
22－6	盾塚古墳周濠			ユビナデ		ユビナデ
22－7	盾塚古墳周濠			ユビナデ、綾杉文		ユビナデ
22－8	盾塚古墳周濠			ユビナデ、綱代文		ユビナデ
22－9	盾塚古墳周濠			ユビナデ、鋸歯文		ユビナデ
22－10	盾塚古墳周濠			ユビナデ、綾杉文		ユビナデ
22－11	盾塚古墳周濠			ユビナデ、鋸歯文		ユビナデ
22－12	盾塚古墳周濠			ユビナデ、綱代文		ユビナデ
22－13	盾塚古墳周濠			ヘラナデ？綾杉文		ユビナデ
23－1	盾塚古墳周濠			ユビ・ヘラナデ、綱代文		ユビナデ

第３表　埴輪観察表①

突帯	透孔	黒斑	胎土	長石	石英	チャート	金雲母	クサリ礫	色調	焼成	質	備　考	実測番号
台形	円	有	砂粒多	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		3
台形		有	砂粒多	○	○		○		赤褐色	良好	土師質		1
台形		有	砂粒多	○	○		○		赤褐色	良好	土師質		2
台形		有	砂粒多	○	○		○		赤褐色	良好	土師質		11
			砂粒多	○	○		○		赤褐色	良好	土師質		5
台形			砂粒多	○			○	○	赤褐色	良好	土師質		8
		有	砂粒多	○	○		○	○	赤褐色	良好	土師質		16
			砂粒多	○	○		○		赤褐色	良好	土師質		17
			砂粒多	○			○	○	赤褐色	良好	土師質		6
			砂粒多	○			○	○	赤褐色	良好	土師質		4
		有	砂粒多	○			○		赤褐色	良好	土師質		7
			砂粒多	○			○		赤褐色	良好	土師質		10
			砂粒多	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		9
		有	砂粒多	○	○	○		○	淡赤褐色	良好	土師質		P12
		有	砂粒多		○	○			淡茶褐色	良好	土師質		P10
台形			砂粒含	○		○	○	○	赤褐色	良好	土師質		P13
			砂粒含	○		○			燈褐色	良好	土師質		P6
台形		有	砂粒多	○		○	○	○	赤褐色	良好	土師質		P3
			砂粒多	○		○	○	○	赤褐色	良好	土師質		P5
台形			砂粒含	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		P8
台形			砂粒含	○		○	○		淡赤褐色	良好	土師質		P11
台形			砂粒含	○		○			淡燈褐色	良好	土師質		P14
台形			砂粒含	○			○	○	淡赤褐色	良好	土師質		P9
台形			砂粒含	○		○	○	○	赤褐色	良好	土師質		P7
			砂粒含	○		○	○	○	赤褐色	良好	土師質		P4
			砂粒多	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		P82
			砂粒含	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		P1
			砂粒含	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		P2
			砂粒多	○			○	○	赤褐色	良好	土師質		図377
			砂粒多	○		○			赤褐色	良好	土師質		図335
			砂粒多	○				○	赤褐色	良好	土師質		図336
台形	円		砂粒多	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		図343
台形	円		砂粒多	○			○	○	赤褐色	良好	土師質		図342
台形			砂粒多	○				○	淡赤褐色	良好	土師質		図338
台形			砂粒多	○				○	赤褐色	良好	土師質	磨耗著しい	図340
			砂粒多	○	○				赤褐色	良好	土師質		図339
台形	円	有	砂粒多	○	○		○		赤褐色	良好	土師質		図341
台形		有	砂粒多	○	○	○	○		赤褐色	良好	土師質		P32
			砂粒多	○	○	○	○		淡燈褐色	良好	土師質		P62
		有	砂粒含	○	○	○	○		淡燈褐色	良好	土師質		P24
			砂粒多	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		P64
			砂粒多	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		P18
			砂粒多	○		○	○		淡赤褐色	良好	土師質		P21
			砂粒含	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		P17
			砂粒多	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		P15
			砂粒多	○		○	○		赤褐色	良好	土師質		P20
台形			砂粒多	○	○	○	○		赤褐色	良好	土師質		P19
			砂粒多	○	○	○	○		赤褐色	良好	土師質		P22
			砂粒多	○	○	○	○	○	赤褐色	良好	土師質		P23
			砂粒含	○	○				赤褐色	良好	土師質		291
			砂粒含	○	○	○	○		赤褐色	良好	土師質		180
			砂粒含	○	○	○	○		赤褐色	良好	土師質		253
			砂粒含	○	○	○	○		赤褐色	良好	土師質		188
			砂粒含	○	○	○	○		赤褐色	良好	土師質		211
			砂粒含	○	○	○	○		赤褐色	良好	土師質		181
			砂粒多　小石含	○	○	○	○		赤褐色	良好	土師質		193
			砂粒含	○	○	○	○		赤褐色	良好	土師質		181
			砂粒含	○	○	○	○		赤褐色	良好	土師質		181
台形？		有	砂粒多	○		○	○		淡橙褐色	やや不良	土師質		346
			砂粒多	○		○		○	淡灰褐色	良好	須恵質	家形、屋根破風	実7
			砂粒多	○		○		○	淡灰褐色	良好	土師質	家形、屋根破風、外赤彩	実8
			砂粒多	○			○		淡灰白色	良好	土師質	衣蓋形	実9
			砂粒多	○		○	○		淡燈色	良好	須恵質	家形	実10
			砂粒多	○		○			赤褐色	良好	土師質	家形	154
			砂粒多	○		○			橙色	やや不良	土師質	家形	107
			砂粒多	○	○	○	○	○	橙褐色	良好	土師質	衣蓋形軸部	6
			砂粒多	○		○	○	○	赤褐色	良好	土師質	靱形、胎土、色調、焼成状況は盾塚円筒に似る	実12
			砂粒多	○		○			淡灰色	良好	須恵質	靱形	53
			砂粒多	○		○		○	淡燈褐色	良	須恵質	靱形	57
			砂粒含	○		○			淡赤褐色	良	土師質	盾形か靱形	153
			砂粒含	○		○			灰白色	良	土師質	盾形か靱形	152
			砂粒含	○		○			淡赤褐色	良	土師質	盾形か靱形	108
			砂粒多	○		○		○	赤褐色	やや不良	土師質	盾形か靱形	109
			砂粒多	○		○		○	淡赤褐色	良	土師質	盾形？	110
			砂粒多	○		○			淡赤褐色	良	土師質	盾形？	54
			砂粒多	○		○		○	赤褐色	良	土師質	盾形？	58
			砂粒含	○					淡燈褐色	良	土師質	盾形？	61
			砂粒多	○		○		○	赤褐色	良	土師質	盾形？	59
			砂粒多	○	○	○		○	赤褐色	やや不良	土師質	草摺形	11
			砂粒多	○		○			赤褐色	良	土師質	家形、屋根	433

挿図番号	出土遺構	法量		外面1次調整	外面2次調整	内面調整
		口径	底径			
23－2	盾塚古墳周濠			ヘラ・ユビナデ		ユビナデ
24－1	盾塚古墳周濠			ユビナデ		ユビナデ
24－2	盾塚古墳周濠			ユビナデ、直弧文、横線文		ユビナデ
24－3	盾塚古墳周濠			ユビナデ、直弧文		ユビナデ
24－4	盾塚古墳周濠			ユビナデ、綾杉文		ユビナデ
24－5	盾塚古墳周濠			ユビナデ		ユビナデ
24－6	盾塚古墳周濠			ユビナデ、綾杉文		ユビナデ
24－7	盾塚古墳周濠			ユビ・ヘラナデ		ユビ・ヘラナデ
24－8	盾塚古墳周濠			ユビナデ、綾杉文		ユビナデ
24－9	盾塚古墳周濠			ユビナデ		ユビナデ
24－10	盾塚古墳周濠			ユビナデ		ユビナデ
25－1	盾塚古墳周濠				ヨコハケ6条/cm	ユビナデ
25－2	盾塚古墳周濠				ヨコハケ（ナデ状）	ユビナデ
25－3	盾塚古墳周濠				B種？ヨコハケ7条/cm	ユビナデ
25－4	盾塚古墳周濠			タテハケ6条/cm		ユビナデ
25－5	盾塚古墳周濠			タテハケ		ユビナデ
25－6	盾塚古墳周濠				ヨコハケ	ユビナデ
25－7	盾塚古墳周濠				B種？ヨコハケ7～8条/cm	ユビナデ
25－8	盾塚古墳周濠				ヨコハケ6条/cm	ユビナデ
25－9	盾塚古墳周濠				ヨコハケ6条/cm	ユビナデ
28－1	鞍塚古墳周濠	(口)27.6			ヘラケズリ、ユビナデ	ナナメハケ、ユビナデ
28－2	鞍塚古墳周濠	(口)31.7		タテハケ7～8条/cm		ヨコハケ、ユビナデ
28－3	鞍塚古墳周濠	(口)29.2			ヘラケズリ	ヨコハケ
28－4	鞍塚古墳周濠	(口)27.2		タテ・ナナメハケ6～7条/cm		ナナメハケ、ユビナデ・オサエ
28－5	鞍塚古墳周濠				ヘラケズリ（ユビナデ）	ヨコハケ、ユビナデ
28－6	鞍塚古墳周濠	(口)23.5		タテハケ7～8条/cm		ヨコハケ、ユビナデ
28－7	鞍塚古墳周濠			タテハケ6～7条/cm		ユビナデ・オサエ
28－8	鞍塚古墳周濠	(口)23.8		タテハケ6～7条/cm		ヨコハケ、ユビナデ
28－9	鞍塚古墳周濠		(底)19.4	タテハケ6～7条/cm		ユビナデ・オサエ
28－10	鞍塚古墳周濠		(底)18.8	タテハケ6～7条/cm		ユビナデ・オサエ
29－1	鞍塚古墳周濠		(底)24.5	タテハケ7～8条/cm		ユビナデ・オサエ
29－2	鞍塚古墳周濠		(底)28.7		ヘラケズリ	
29－3	鞍塚古墳周濠		(底)17.3	タテハケ5～7条/cm		ユビナデ・オサエ
29－4	鞍塚古墳周濠		(底)18.7	タテハケ6～7条/cm		ユビナデ・オサエ
29－5	鞍塚古墳周濠	(口)42.6		ナナメハケ7～8条/cm		ヨコ・ナナメハケ
29－6	鞍塚古墳周濠			ヨコ・タテハケ6～7条/cm		ユビナデ・オサエ
29－7	鞍塚古墳周濠			タテ・ナナメハケ6～7条/cm		ヨコハケ、ユビナデ
29－8	鞍塚古墳周濠			タテハケ7条/cm		ナナメ・ヨコハケ、ユビナデ
30－1	鞍塚古墳周濠				ヘラナデ	ヨコハケ
30－2	鞍塚古墳周濠				ヘラナデ	ヨコハケ
30－3	鞍塚古墳周濠			タテ・ナナメハケ7条/cm		ヨコハケ
30－4	鞍塚古墳周濠			タテ・ナナメハケ6条/cm		ヨコハケ
30－5	鞍塚古墳周濠			タテハケ6条/cm		ヨコハケ
30－6	鞍塚古墳周濠				ナデ	ユビナデ
31－1	鞍塚古墳周濠				ユビナデ	ユビナデ・オサエ
31－2	鞍塚古墳周濠			タテハケ6条/cm		ユビナデ・オサエ
31－3	鞍塚古墳周濠			タテハケ6条/cm		ユビナデ・オサエ
31－4	鞍塚古墳周濠			タテハケ6条/cm		ユビナデ
34－1	鞍塚古墳周濠			ハケメ、沈線		ユビナデ
34－2	鞍塚古墳周濠			ユビナデ、鋸歯文		ユビナデ
34－3	鞍塚古墳周濠			ユビナデ、沈線		ユビナデ
34－4	鞍塚古墳周濠			ハケメ、綾杉文		ユビナデ
34－5	鞍塚古墳周濠			ハケ		ユビナデ
34－6	鞍塚古墳周濠			ユビナデ、鋸歯文		ユビナデ
34－7	鞍塚古墳周濠			ユビナデ、沈線		ユビナデ
34－8	鞍塚古墳周濠			ユビナデ		ユビナデ
34－9	鞍塚古墳周濠			ユビナデ、沈線		ユビナデ
34－10	鞍塚古墳周濠			ハケ		ハケ
34－11	鞍塚古墳周濠			ヘラナデ、綱代文		ユビナデ
37－3	助太山古墳周濠			ナナメハケ		ユビナデ
37－4	助太山古墳周濠			タテハケ		ユビナデ
39－1	小型方墳出土			タテハケ10～11条/cm	B種ヨコハケ13条/cm	ユビナデ
39－2	小型方墳出土			タテハケ9～12条/cm	B種ヨコハケ9～12条/cm	ユビナデ
39－3	小型方墳出土			タテハケ9条/cm	B種ヨコハケ13条/cm	ユビナデ
82－2	Ⅴ区・土壙墓1				B種ヨコハケ9～10条/cm	ユビナデ・オサエ
82－3	Ⅴ区・土壙墓1		(底)33.8		B種ヨコハケ	ユビナデ・オサエ
82－4	Ⅴ区・土壙墓1				ヨコハケ	ヨコハケ、ユビナデ・オサエ
82－5	Ⅴ区・土壙墓1			タテハケ9条/cm	B種ヨコハケ10条/cm	ユビナデ・オサエ
114－1	仲津山古墳			タテハケ9条/cm	B種ヨコハケ8～9条/cm	ユビナデ・オサエ
114－2	仲津山古墳			タテハケ8～9条/cm	B種ヨコハケ10～11条/cm	ユビナデ
114－3	仲津山古墳		(底)26.8	タテハケ7～9条/cm	B種ヨコハケ8～9条/cm	タテハケ、ユビナデ・オサエ
114－4	仲津山古墳		(底)26.1	タテハケ6～8条/cm		タテハケ、ユビナデ
114－5	仲津山古墳		(底)28.4	タテハケ6～7条/cm	B種ヨコハケ6条/cm	タテハケ、ユビナデ・オサエ
114－6	仲津山古墳			タテハケ8条/cm		ナナメハケ、ユビナデ・オサエ
114－7	仲津山古墳			タテハケ8～9条/cm	B種ヨコハケ9条/cm	ユビナデ・オサエ
114－8	仲津山古墳			タテハケ	B種ヨコハケ	
114－9	仲津山古墳			タテハケ8条/cm	B種ヨコハケ7条/cm	ナナメハケ、ユビナデ
114－10	仲津山古墳			タテハケ10条/cm	B種ヨコハケ8条/cm	ナデ
115－1	仲津山古墳				B種ヨコハケ	
115－2	仲津山古墳		(底)26.8	タテハケ	B種ヨコハケ	タテハケ、ユビナデ・オサエ

第３表　埴輪観察表②

突帯	透孔	黒斑	胎土	長石	石英	チャート	金雲母	クサリ礫	色調	焼成	質	備　考	実測番号
			砂粒多	○	○				赤褐色	良	土師質	家形	425
			砂粒含	○	○				淡灰褐色	良	須恵質	家形、屋根	71
			砂粒多	○		○	○		燈褐色	良	土師質	盾形	74
			砂粒多	○			○		淡燈褐色	良	土師質	盾形か靱形	75
			砂粒多	○	○	○		○	黄灰色	やや不良	土師質	靱形	401
			砂粒多	○					赤褐色	良	土師質	三角板革綴短甲	415
			砂粒多	○	○				赤褐色	良	土師質	草摺形	70
			砂粒多	○			○		赤褐色	良	須恵質	靱形、表裏面赤彩（？）	72
			砂粒多	○		○			赤褐色	良	土師質	草摺形	69
			砂粒含	○					淡灰白色	良	須恵質	衣蓋立飾り	90
			砂粒多	○			○		赤褐色	良	土師質	蓋立飾り	403
			砂粒多	○	○				赤褐色	良	須恵質	ヘラ描牡鹿	A
			砂粒多	○				○	淡灰褐色	良	須恵質	ヘラ描馬？	B
台形			砂粒多	○		○			灰褐色	良	須恵質	ヘラ描	E
			砂粒多	○				○	淡灰褐色	良	須恵質	ヘラ描	C
台形			砂粒多	○		○		○	赤褐色	良	土師質	ヘラ描	F
台形			砂粒多	○				○	燈色	良	土師質	ヘラ描	D
			砂粒多	○		○		○	暗茶褐色	良	須恵質	ヘラ描	J
台形			砂粒多	○		○		○	淡燈色	良	須恵質	ヘラ描	I
			砂粒多	○			○		淡燈色	良	土師質	ヘラ描盾？	H
台形	円		砂粒多	○		○			燈褐色	良	須恵質		206
台形			砂粒多	○		○			淡茶褐色	良	須恵質	外面赤彩	134
			砂粒多	○	○			○	淡灰白色	良	須恵質		158
台形			砂粒含	○		○			淡燈褐色	良	須恵質		130
台形			砂粒多	○		○		○	淡赤褐色	良	須恵質		127
			砂粒多	○		○			淡赤褐色	良	須恵質		133
台形			砂粒多	○	○	○			灰白色	良	須恵質		116
			砂粒多	○		○			淡燈褐色	良	須恵質	外面赤彩	135
台形			砂粒多	○	○	○			淡黄灰色	良	須恵質		161
台形			砂粒多	○	○	○			灰白色	良	須恵質		117
台形			砂粒多	○		○			淡灰褐色	良	須恵質		114
			砂粒多	○		○			淡褐灰色	良	須恵質		128
台形			砂粒多	○	○	○			淡褐灰色	良	須恵質		187
			砂粒含	○		○			灰白色	良	須恵質		118
			砂粒多	○		○		○	淡褐灰色	良	須恵質	内外面赤彩、朝顔形	143
台形	円		砂粒多	○		○			淡褐灰色	良	須恵質	朝顔形	141
三角形			砂粒含	○	○				淡褐灰色	良	須恵質	朝顔形	145
			砂粒含	○		○			灰白色	良	須恵質		142
			砂粒含	○	○				淡燈褐色	良	須恵質		2
			砂粒含	○	○				淡燈褐色	良	須恵質		4
			砂粒含	○	○	○			淡燈褐色	良	須恵質		5
			砂粒含	○	○				淡燈褐色	良	須恵質		3
			砂粒多	○	○	○			淡赤褐色	良	須恵質		1
台形			砂粒含	○	○	○			淡茶褐色	良	須恵質		7
			砂粒多	○		○			淡燈褐色	良	土師質		14
台形			砂粒含	○	○	○	○	○	淡燈褐色	良	土師質		11
			砂粒多	○		○	○		淡燈褐色	良	土師質		12
			砂粒多	○		○			淡茶褐色	良	須恵質		15
			砂粒多	○					淡灰褐色	良	土師質	鶏形	179
			砂粒多	○		○			淡灰褐色	良	須恵質	盾形	174
			砂粒多	○			○		淡灰褐色	良	須恵質	肩甲	185
			砂粒多	○		○	○		淡赤褐色	良	須恵質	草摺形	181
			砂粒多	○			○		淡灰白色	良	須恵質	草摺形	182
			砂粒多	○	○		○		淡灰白色	良	土師質	盾形	169
			砂粒含	○			○		淡赤褐色	良	須恵質	衣蓋形（外面赤彩）	211
			砂粒多	○		○			淡灰白色	良	土師質	衣蓋形（頂部）	177
			砂粒多	○	○				淡灰白色	良	土師質	家形、裾辺	180
			砂粒多	○			○		燈褐色	良	須恵質	家形	183
			砂粒多	○	○			○	淡褐色	良	土師質	家形	171
台形（低）			砂粒多	○			○		暗灰色	不良	土師質		1上
台形（低）			砂粒多	○	○		○		褐灰色	やや不良	土師質		2下
台形	円		砂粒多	○	○			○	淡黄褐色	良	須恵質		311
台形			砂粒多	○	○				淡燈色	良	須恵質		314
台形			砂粒多	○				○	淡燈褐色	良	須恵質		312
台形			砂粒多	○		○			淡燈褐色	良	須恵質		301
台形			砂粒含	○		○			淡燈褐色	良	須恵質		304
台形			砂粒多	○					淡灰白色	やや不良	土師質	裏面摩滅著しい	302
台形	円		砂粒含	○		○		○	淡燈褐色	良	須恵質	外面赤彩	303
台形		有	砂粒多	○			○		赤褐色	良	土師質		107
台形		有	砂粒多	○			○	○	赤褐色	良	土師質		106
台形			砂粒多	○	○		○		淡赤褐色	良	土師質		105
	円	有	砂粒含	○	○		○		淡燈褐色	良	土師質	外面板ナデ状	108
台形	円	有	砂粒多	○			○		淡赤褐色	良	土師質		104
台形		有	砂粒多	○	○	○	○		赤褐色	良	土師質		
台形		有	砂粒含	○	○		○		淡橙褐色	良	土師質		
台形				○	○				淡橙褐色	良	土師質		
台形	円		砂粒多	○	○	○			淡橙褐色	良	土師質		
台形			砂粒多	○	○		○		淡橙褐色	良	土師質		
台形	逆三角			○	○				淡橙褐色	良	土師質		
				○	○				淡橙褐色	良	土師質		

挿図番号	出土遺構	法量		外面1次調整	外面2次調整	内面調整
		口径	底径			
115－3	仲津山古墳				B種ヨコハケ	ナデ
115－4	仲津山古墳		(底)25.8	タテハケ7条/cm	B種ヨコハケ8条/cm	ユビナデ
115－5	仲津山古墳		(底)27.0		B種ヨコハケ8条/cm	タテ・ナナメハケ、ユビナデ
115－6	仲津山古墳		(底)25.8		ナデ	ユビナデ、ヘラケズリ
115－7	仲津山古墳		(底)26.0	タテハケ6条/cm		タテハケ
115－8	仲津山古墳		(底)29.0	タテハケ14条/cm		ユビナデ
115－9	仲津山古墳		(底)23.0	タテハケ8条/cm		ユビナデ
115－10	仲津山古墳		(底)32.4	タテハケ9条/cm	B種ヨコハケ13条/cm	タテハケ、ユビナデ
115－11	仲津山古墳		(底)30.0	タテハケ		
115－12	仲津山古墳		(底)26.0		ナデ	ユビナデ
115－13	仲津山古墳		(底)25.8	タテハケ5条/cm		タテ・ナナメハケ
115－14	仲津山古墳		(底)41.4	タテハケ12条/cm	ヨコハケ5条/cm	ヨコハケ、ナデ
115－15	仲津山古墳		(底)24.8	タテハケ9条/cm		タテ・ナナメハケ
115－16	仲津山古墳		(底)32.8	タテハケ10条/cm		ユビナデ
115－17	仲津山古墳		(底)27.4	タテハケ8条/cm		ナデ・オサエ
115－18	仲津山古墳		(底)27.0	タテハケ10条/cm		ユビナデ
115－19	仲津山古墳		(底)26.6	タテハケ11条/cm		ユビナデ
115－20	仲津山古墳		(底)25.6	タテハケ8条/cm		ユビナデ・オサエ
115－21	仲津山古墳		(底)26.8	タテハケ9条/cm		ユビナデ・オサエ
115－22	仲津山古墳		(底)24.0	タテハケ8条/cm		ユビナデ・オサエ
115－23	仲津山古墳		(底)20.9	タテハケ6条/cm		タテ・ナナメハケ
115－24	仲津山古墳		(底)28.6	タテハケ、粗い		ヘラナデ
115－25	仲津山古墳		(底)35.2	タテハケ8条/cm	B種ヨコハケ8条/cm	ナナメハケ
115－26	仲津山古墳		(底)28.6	タテハケ12条/cm	ヨコハケ12条/cm	タテハケ
115－27	仲津山古墳			タテハケ7条/cm	B種ヨコハケ10条/cm	タテハケ
115－28	仲津山古墳			タテハケ		ヨコハケ
115－29	仲津山古墳			タテハケ		タテハケ
115－30	仲津山古墳				B種ヨコハケ	
115－31	仲津山古墳		(底)25.0	タテハケ	B種ヨコハケ	タテハケ
115－32	仲津山古墳			タテハケ	B種ヨコハケ	
115－33	仲津山古墳		(底)30.4	タテハケ	B種ヨコハケ	タテハケ
117－1	仲津山古墳			タテハケ	ユビナデ	ユビナデ
117－2	仲津山古墳			タテハケ7～8条/cm		ユビナデ
117－3	仲津山古墳			タテハケ5条/cm	B種ヨコハケ5～6条/cm	タテ・ナナメハケ
117－4	仲津山古墳				ユビナデ	ユビナデ
120－1	御曹司塚古墳	(口)42.0		タテハケ9～10条/cm		ヨコハケ、ユビナデ
120－2	御曹司塚古墳			タテハケ8条/cm		ユビナデ
120－3	御曹司塚古墳			タテハケ9～10条/cm		ユビナデ
120－4	御曹司塚古墳		(底)33.9	タテハケ7～8条/cm		ユビナデ
121－1	御曹司塚古墳			タテハケ5条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
121－2	御曹司塚古墳			タテハケ5条/cm		タテハケ、ユビナデ・オサエ
121－3	御曹司塚古墳			タテハケ7条/cm		ユビナデ・オサエ
121－4	御曹司塚古墳			タテハケ8～9条/cm		ユビナデ
122－1	御曹司塚古墳			タテハケ8条/cm		ユビナデ
122－2	御曹司塚古墳			タテハケ5条/cm		ユビナデ
122－3	御曹司塚古墳			タテハケ6条/cm		タテハケ・ユビナデ
122－4	御曹司塚古墳			タテハケ6～7条/cm		ユビナデ
122－5	御曹司塚古墳			タテハケ5条/cm		ユビナデ
123－1	御曹司塚古墳				ヨコハケ7～8条/cm	タテハケ、ユビナデ・オサエ
123－2	御曹司塚古墳				ヨコハケ6～9条/cm	ユビナデ・オサエ
123－3	御曹司塚古墳				ヨコハケ8～9条/cm	ユビナデ・オサエ
123－4	御曹司塚古墳				ヨコハケ5条/cm	タテハケ、ユビナデ・オサエ
126－1	土師の里3号墳・2号	(口)52.4		ナナメハケ		ヨコ・ナナメハケ、ユビオサエ
126－2	土師の里3号墳・1号	(口)51.0		盾面:タテハケ、ユビナデ、円筒部:タテハケ8cm条/cm		ユビ・ヘラナデ
127－1	土師の里3号墳・1号			盾面:タテ・ナナメハケメ、円筒部:ナナメハケ		盾面：ユビナデ・オサエ、円筒部：ユビナデ・オサエ
127－2	土師の里3号墳・1号	(口)20.6		ナナメハケ5条/cm		ナナメハケ、ユビナデ・オサエ
127－3	土師の里3号墳・1号	(口)55.3		タテハケ	B種ヨコハケ8～11条/cm	ヨコハケ、ユビナデ・オサエ
128－1	土師の里3号墳・2号			ヨコ・タテハケ		ユビナデ・オサエ
128－2	土師の里3号墳・2号	(口)39.4			B種ヨコハケ6～9条/cm	ヨコハケ、ユビナデ・オサエ
128－3	土師の里3号墳・2号		(底)15.9	タテヘラナデ		ユビナデ・オサエ
128－4	土師の里3号墳・2号	(口)45.3		タテ・ナナメハケ	B種ヨコハケ10条/cm	タテ・ナナメハケ、ユビナデ・オサエ
128－5	土師の里3号墳・3号	(口)40.6	(底)29.5	タテハケ	B種ヨコハケ5条/cm	ユビナデ・オサエ
129－1	土師の里3号墳・3号			盾面：タテハケ、円筒部：タテハケ		盾面：ユビナデ・オサエ
129－2	土師の里3号墳・3号	(口)36.4			B種ヨコハケ8～9条/cm	タテハケ、ユビナデ
129－3	土師の里3号墳・3号	(口)40.8	(底)30.2	タテハケ	B種ヨコハケ8～9条/cm	ユビ・ヘラナデ
130－1	土師の里6号墳			ハケ、ヘラナデ		ユビナデ
130－2	土師の里6号墳			ハケ、ヘラナデ		ユビナデ
131－1	土師の里6号墳			ユビナデ、直弧文		ユビナデ・オサエ
131－2	土師の里6号墳			ユビナデ		ユビナデ
131－3	土師の里6号墳			ハケ、網代文		ハケ、ユビナデ
131－4	土師の里6号墳			ハケ、ユビナデ、直弧文、綾杉文		ユビナデ
133－1	土師の里1号墳		(底)29.0	ナナメハケ10条/cm		ユビナデ

第3表　埴輪観察表③

突帯	透孔	黒斑	胎土	長石	石英	チャート	金雲母	クサリ礫	色調	焼成	質	備　　考	実測番号
			砂粒含	○		○		○	淡橙褐色	やや不良	土師質	衣蓋笠部　外面赤彩	
			砂粒多	○	○		○	○	淡橙褐色	良	土師質		
			砂粒多	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
台形			砂粒多	○	○		○	○	淡橙褐色	やや不良	土師質		
			砂粒多	○	○		○	○	淡茶褐色	良	土師質		
台形			砂粒多	○	○		○		淡橙褐色	良	土師質		
台形		有	砂粒多	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
台形		有	砂粒多	○	○			○	淡赤褐色	良	土師質		
				○	○		○		淡橙褐色	良	土師質		
台形		有	砂粒多	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
			砂粒多	○	○	○	○	○	淡赤褐色	良	土師質		
台形	円		砂粒含	○	○		○	○	淡橙褐色	やや不良	土師質		
			砂粒多	○	○	○	○		橙褐色	良	土師質		
		有	砂粒多	○	○		○		淡橙褐色	良	土師質		
			砂粒多	○	○		○		淡橙褐色	良	土師質		
		有	砂粒多	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
台形			砂粒含	○	○		○		淡橙褐色	良	土師質		
		有	砂粒多	○	○	○	○		橙褐色	良	土師質		
			砂粒含	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
		有	砂粒多	○	○		○	○	橙褐色	良	土師質		
		有	砂粒多、小石含	○		○	○		橙褐色	やや不良	土師質		
台形			砂粒多	○	○			○	淡橙褐色	やや不良	土師質		
			砂粒多	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
			砂粒含	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
台形	長方		砂粒含	○	○		○		淡橙褐色	良	土師質	外面赤彩	
			砂粒含	○	○		○		橙褐色	良	土師質	朝顔形	
台形			砂粒含	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
			砂粒含	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
			砂粒含	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
台形			砂粒含	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
台形			砂粒含	○	○		○		橙褐色	良	土師質		
			砂粒含	○	○		○		橙褐色	良	土師質	外面赤彩	4
			砂粒含	○	○		○		橙褐色	良	土師質	外面赤彩	3
			砂粒含	○	○		○	○	橙褐色	良	土師質	有黒斑	1
			砂粒含	○	○		○		橙褐色	良	土師質	朝顔形、外面赤彩	2
台形	円		砂粒多	○		○	○		灰白色	良	須恵質		3
台形			砂粒多	○		○	○		灰白色	良	須恵質		4
台形			砂粒多	○	○	○	○		灰白色	良	須恵質		5
台形			砂粒多	○		○	○		灰白色	良	須恵質		209
台形			砂粒含	○	○		○		灰白色	良	須恵質		7
台形			砂粒含	○	○				灰白色	良	須恵質		9
台形			砂粒含	○	○	○		○	灰白色	良	須恵質		2
台形			砂粒多	○		○	○		灰白色	良	須恵質		4
台形			砂粒多	○	○	○			灰白色	良	須恵質		5
台形			砂粒含	○	○				灰白色	良	須恵質		6
三角形			砂粒含	○	○		○		灰白色	良	須恵質		10
台形			砂粒含	○		○		○	灰白色	良	須恵質		11
三角形			砂粒含	○	○				灰白色	良	須恵質		1
台形			砂粒含	○	○	○		○	灰白色	良	須恵質		8
台形			砂粒含	○	○	○	○		灰白色	良	須恵質		12
台形			砂粒含	○	○				灰白色	良	須恵質		3
			砂粒含	○	○				灰白色	良	須恵質		13
			砂粒多	○		○	○	○	淡燈色	良	土師質	朝顔形	202
台形	円		砂粒	○			○	○	赤褐色	良	土師質	盾形	1
			砂粒多	○			○	○	橙色	良	土師質	盾形（石見型）	208
台形	円		砂粒含	○					橙色	良	土師質		203
台形	円		砂粒多	○		○			淡茶褐色	良	須恵質	口縁部下ヘラ描	101
			砂粒多	○			○	○	淡燈褐色	良	須恵質	衣蓋形、衣蓋部内面赤彩	204
台形	円		砂粒多	○				○	淡灰褐色	不良	土師質		206
	円		砂粒多、礫	○				○	橙褐色	良	土師質	形象基部	205
台形	円		砂粒多	○		○	○		橙褐色	良	土師質		103
台形	長円		砂粒含	○				○	淡赤褐色	良	須恵質		207
	円		砂粒多	○	○			○	燈褐色	良	土師質	盾形（石見型）	201
台形	円		砂粒含	○		○			橙色	良	須恵質		102
台形	長円		砂粒多、小石含	○		○		○	淡燈褐色	良	土師質	底部ユビオサエ痕（1/2径で2箇所）	2
			砂粒多	○	○				赤褐色	良	土師質	外面赤彩、鶏胴部	
			砂粒多	○	○				赤褐色	良	土師質	鶏形	
			砂粒含	○	○			○	淡赤褐色	良	土師質	太刀把頭	
		有	砂粒多	○	○				淡赤褐色	良	土師質	鶏頭部	
			砂粒多	○				○	暗茶褐色	良	土師質	家形屋根・破風	
			砂粒含	○	○				淡赤褐色	良	土師質	鞍形	
台形			砂粒多	○	○				淡赤褐色	やや不良	須恵質		

挿図番号	遺構	棺構成部位	法量	外面調整	
				1次	2次
41—1	Ⅰ区・墓4	棺身	(高)50.0	タテハケ	B種ヨコハケ
41—2	Ⅰ区・墓5	南小口部		タテハケ	B種ヨコハケ
41—3	Ⅰ区・墓5	南小口部	(底)16.8	タテハケ	B種ヨコハケ
41—4	Ⅰ区・墓5	南小口部		タテハケ	B種ヨコハケ
41—5	Ⅰ区・墓5	棺身	(口)22.5(底)18.5(高)47.0	タテハケ	B種ヨコハケ
42—1	Ⅰ区・墓2	棺身	(口)57.5(底)62.5(高)162.0	タテハケ	B種ヨコハケ
42—2	Ⅰ区・墓2	西小口部	(口)65.0	タテハケ	
42—3	Ⅰ区・墓2	棺身透孔閉塞		タテハケ	B種(?)ヨコハケ
43—1	Ⅰ区・墓23	掘方底上	(口)53.0	タテハケ	B種ヨコハケ
43—2	Ⅰ区・墓23	掘方内	(口)47.0	タテハケ	B種ヨコハケ
43—3	Ⅰ区・墓23	南小口部	(口)52.6(高)16.4	ハケ	
43—4	Ⅰ区・墓23	北小口部	(口)54.6	ハケ、ユビナデ	
43—5	Ⅰ区・墓23	掘方内	(底)47.0	タテハケ	B種ヨコハケ
44—1	Ⅰ区・墓27	棺身	円筒部：(口)25.0(底)32.0(高)114.0	タテハケ	B種ヨコハケ
			盾面：(最大幅)53.0(長)63～	ハケ、鋸歯文	
44—2	Ⅰ区・墓27	西小口部			B種ヨコハケ
45—1	Ⅱ区・墓28	西小口部	(口)49.0	ハケ	
45—2	Ⅱ区・墓28	東小口部	(口)46.7	ハケ	
45—3	Ⅱ区・墓28	東棺身透孔閉塞	(口)26.0	タテハケ	
45—4	Ⅱ区・墓28	東小口部	(底)17.7	タテハケ	
46—1	Ⅱ区・墓28	西棺身	円筒部：(口)46.0	タテハケ	ヨコハケ
			盾面：(最大幅)44.5(長)63.7		ハケ、鋸歯・菱形繋文
46—2	Ⅱ区・墓28	東棺身	円筒部：(口)46.0	タテハケ	ヨコハケ
			盾面：(最大幅)39.5(長)64.0		ハケ、鋸歯・菱形繋文
47—1	Ⅱ区・墓30	棺身	(口)61.5(底)62.0(高)122.0	タテハケ	B種ヨコハケ
47—2	Ⅱ区・墓30	棺内東側	(口)29.4	タテハケ	B種ヨコハケ
47—3	Ⅱ区・墓30	棺内東側		タテハケ	B種ヨコハケ
48—1	Ⅱ区・墓31	棺身	(口)28.2(底)26.2(高)47.5	タテハケ	B種ヨコハケ、ヘラナデ
48—2	Ⅱ区・墓34	北棺身	(底)38.5	タテハケ	ヨコハケ
48—3	Ⅱ区・墓34	南棺身		タテハケ	ユビナデ
49—1	Ⅱ区・墓35	棺身	(底)27.7	タテハケ	B種ヨコハケ
51—1	Ⅱ区・墓36	東棺身		タテハケ	B種ヨコハケ
51—2	Ⅱ区・墓36	西棺身	(口)62.8	タテハケ	B種ヨコハケ
51—3	Ⅱ区・墓36	東棺身	(口)60.0	タテハケ	B種ヨコハケ
52—1	Ⅱ区・墓29	西小口部	基部：(底)43.0	ハケ	
52—2	Ⅱ区・墓29	西小口部	(底)46.0	タテハケ	B種ヨコハケ
52—3	Ⅱ区・墓29	棺身	(底)50.0	タテハケ	B種ヨコハケ
53—1	Ⅲ区・円筒棺1	棺身	(口)67.0(底)42.8(高)141.0	タテハケ	B種ヨコハケ
53—2	Ⅲ区・円筒棺1	(棺上副葬品)		ユビナデ	
54—1	Ⅲ区・円筒棺2	北西小口部	(口)52.7	タテハケ	A種ヨコハケ
54—2	Ⅲ区・円筒棺2	北西小口部		タテハケ	ヨコハケ
54—3	Ⅲ区・円筒棺2	南東小口部	(口)28.7	タテハケ	
55—1	Ⅲ区・円筒棺2	北西棺身		ナナメハケ	B種ヨコハケ
55—2	Ⅲ区・円筒棺2	南東棺身	(口)65.5	タテハケ	A種ヨコハケ
57—1	Ⅲ区・円筒棺3	北・南小口部	(口)60.5	タテハケ	B種ヨコハケ
57—2	Ⅲ区・円筒棺3	南棺身	(口)51.5(底)44.3(高)151.8	タテハケ	B種ヨコハケ
58—1	Ⅲ区・円筒棺4	棺身	(口)46.3	タテハケ	B種ヨコハケ
58—2	Ⅲ区・円筒棺4	南西小口部	(口)47.3	タテハケ	B種ヨコハケ
58—3	Ⅲ区・円筒棺4	北東小口部		タテハケ	B種ヨコハケ
58—4	Ⅲ区・円筒棺4	南西小口部		タテハケ	B種ヨコハケ
59—1	Ⅲ区・円筒棺5	南小口部		ヨコハケ	
59—2	Ⅲ区・円筒棺5	棺身隙間下		タテハケ	B種ヨコハケ
59—3	Ⅲ区・円筒棺5	南棺身	(口)41.9(底)25.2(高)67.6	タテハケ	B種ヨコハケ
59—4	Ⅲ区・円筒棺5	棺身隙間下	(口)37.4	タテハケ	ヘラナデ
59—5	Ⅲ区・円筒棺5	棺身隙間下		タテハケ	B種(?)ヨコハケ
59—6	Ⅲ区・円筒棺5	棺身隙間下		タテハケ	ヘラナデ

第4表　埴輪棺墓構成埴輪観察表①

内面調整	突帯	透孔	焼成	色調	備　　考
ヨコハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	灰白色	ヘラ描、有黒斑
タテ・ヨコハケ	台形	円形	やや不良	黄橙色	
タテハケ、ユビナデ	台形		良好	橙色	
タテハケ	台形	円形	良好	淡赤褐色	
ヨコハケ	台形	円形	良好	淡赤褐色	
タテハケ、ヨコナデ	台形	円形	良好	褐灰色	
(剥離のため不明)			良好	赤褐色	朝顔形
(剥離のため不明)	台形	円形	良好	黄橙色	
ナナメハケ	台形	円形	良好	淡黄橙色	
ユビナデ	台形		良好	淡褐灰色	
ユビナデ			良好	橙色	笠形(専用棺)
ハケ、ユビナデ			良好	橙色	笠形(専用棺)
ユビナデ	台形	円形	良好	淡橙色	
	台形	円形	良好	黄橙色	盾形
ユビナデ					
ユビナデ	台形	円形	良好	黄橙色	ヘラ描
ハケ、ユビナデ			良好	橙色	朝顔形
ハケ、ユビナデ			良好	橙色	朝顔形
ユビナデ	台形		やや不良	橙色	ヘラ描
ユビナデ	台形(低)	円形	やや不良	淡黄色	
ヨコハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	黄橙色	盾形
ヨコハケ、ユビナデ					
ヨコハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	黄橙色	盾形
ヨコハケ、ユビナデ					
ヨコハケ、ユビナデ	台形		良好	橙色	専用棺
タテハケ	台形		やや不良	橙色	枕？
タテハケ	台形	円形	やや不良	橙色	枕？
ヘラナデ、ユビナデ	台形	円形	良好	赤褐色	ヘラ描、有黒斑
タテハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	橙色	有黒斑
ナナメハケ、ユビナデ	台形	長方形	良好	橙色	有黒斑
ユビナデ	台・三角形	円形	良好	橙色	有黒斑
ユビナデ	台形	円形	良好	橙色	
ナナメハケ、ユビナデ	台形	長円形	良好	黄橙色	
ユビナデ	台形		良好	橙色	ヘラ描
ハケ、ユビナデ			良好	橙色	衣蓋形、外面赤彩
ユビナデ	台形	円形	良好	橙色	
ナナメハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	橙色	
ヘラナデ、ユビナデ・オサエ	M字・台形	円形	良好	灰黄色	
ユビナデ			良好	淡褐色	鶏形(頭部)、副葬品
ヨコハケ			良好	赤褐色	朝顔形
ヨコハケ、ユビナデ	台形		良好	赤褐色	朝顔形、有黒斑
ヨコハケ、ユビナデ・オサエ	台形	円形	良好	赤褐色	有黒斑
ヨコハケ	台形		良好	淡赤褐色	有黒斑
ヨコハケ、ユビナデ	台形		良好	淡黄褐色	有黒斑
ヨコハケ、ユビナデ	M字形		良好	淡褐色	
ヨコハケ、ユビナデ・オサエ	M字形	長円形	良好	褐灰色	
ヨコハケ、ユビナデ	M字形	円形	良好	淡灰黄色	
ヨコハケ、ユビナデ	台形		良好	淡灰黄色	
ヨコハケ、ユビナデ	M字形	円形	良好	淡灰黄色	
ヨコハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	淡灰黄色	
ユビナデ・オサエ			良好	淡黄褐色	衣蓋形
ヨコハケ、ユビナデ・オサエ	M字形	円形	良好	淡灰褐色	有黒斑
ヨコハケ、ユビナデ・オサエ	台形	円形	良好	淡灰黄色	有黒斑
タテ・ヨコハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	淡灰黄色	有黒斑
ヨコハケ、ヘラ・ユビナデ	M字形	円形	良好	淡黄褐色	有黒斑
ヨコハケ	M字形	円形	良好	淡灰褐色	有黒斑

挿図番号	遺構	棺構成部位	法量	外面調整	
				1次	2次
59—7	Ⅲ区・円筒棺5	北棺身	(底)23.7	タテハケ	
59—8	Ⅲ区・円筒棺5	北棺身		タテハケ	ヘラナデ
61—1	Ⅲ区・円筒棺6	棺身	(底)43.0	タテハケ	B種ヨコハケ
61—2	Ⅲ区・円筒棺6	北小口部	(口)50.3	ヨコ・ナナメハケ	
62—1	Ⅲ区・円筒棺7	北棺身	(口)30.5	タテハケ	B種ヨコハケ
62—2	Ⅲ区・円筒棺7	南棺身		タテハケ	ヨコハケ
62—3	Ⅲ区・円筒棺7	北棺身下		タテハケ	B種ヨコハケ
63—1	Ⅲ区・円筒棺8	棺身		タテハケ	B種ヨコハケ
64—1	Ⅲ区・円筒棺9	中央棺身	(口)42.7(底)43.3(高)92.4	タテハケ	B種ヨコハケ
64—2	Ⅲ区・円筒棺9	北棺身	(口)42.8(底)26.3(高)64.3	タテハケ	B種ヨコハケ
64—3	Ⅲ区・円筒棺9	南棺身	(口)41.1	タテハケ	B種ヨコハケ
65—1	Ⅲ区・円筒棺10	中央棺身	(底)31.1	タテハケ	B種ヨコハケ
65—2	Ⅲ区・円筒棺10	南棺身	(底)37.1	タテハケ	B(C)種ヨコハケ
67－1	Ⅳ区・円筒棺1	棺身透孔閉塞？		タテハケ	B種ヨコハケ
67－2	Ⅳ区・円筒棺1	棺身透孔閉塞？			B種ヨコハケ
67－3	Ⅳ区・円筒棺1	棺身透孔閉塞？	(底)31.3	タテハケ	B種ヨコハケ
67－4	Ⅳ区・円筒棺1	棺身透孔閉塞？		タテハケ	B種ヨコハケ
67－5	Ⅳ区・円筒棺1	南小口部		タテハケ	A種ヨコハケ
68－1	Ⅳ区・円筒棺1	棺身	(口)59.4	ナナメハケ	B種ヨコハケ
69－1	Ⅳ区・円筒棺2	西小口部	(口)62.5	タテハケ	B種ヨコハケ
69－2	Ⅳ区・円筒棺2	棺身透孔閉塞？		タテハケ	ヨコハケ
69－3	Ⅳ区・円筒棺2	棺身透孔閉塞？	(口)45.2		B種ヨコハケ
70－1	Ⅳ区・円筒棺2	東小口部	(口)91.0	ナナメハケ	ヨコハケ
70－2	Ⅳ区・円筒棺2	東棺身	(底)50.0	タテハケ	B種ヨコハケ
70－3	Ⅳ区・円筒棺2	西棺身	(口)58.6	タテハケ	B種ヨコハケ
71－1	Ⅳ区・円筒棺3	棺身		タテハケ	B種ヨコハケ
71－2	Ⅳ区・円筒棺3	棺身透孔閉塞？			B種ヨコハケ
71－3	Ⅳ区・円筒棺3	棺身透孔閉塞？	(底)41.3	タテハケ	B種ヨコハケ
72－1	Ⅳ区・円筒棺4	棺身透孔閉塞？		タテハケ	B種ヨコハケ
72－2	Ⅳ区・円筒棺4	西棺身			B種ヨコハケ
72－3	Ⅳ区・円筒棺4	東棺身	(口)42.6		B種ヨコハケ
72－4	Ⅳ区・円筒棺4	中央棺身(あるいは棺身透孔閉塞)		タテハケ	B種ヨコハケ
74－1	Ⅳ区・円筒棺5	西小口部	(口)40.6	タテハケ	B種ヨコハケ
74－2	Ⅳ区・円筒棺5	棺身	(底)39.4	タテハケ	B種ヨコハケ
75－1	Ⅴ区・埴輪棺墓1	北棺身	(底)38.8	タテハケ	ヨコハケ
75－2	Ⅴ区・埴輪棺墓1	南棺身	(口)56.8	タテハケ	B種ヨコハケ
75－3	Ⅴ区・埴輪棺墓1	南棺身		タテハケ	B種ヨコハケ
75－4	Ⅴ区・埴輪棺墓1	北棺身	(底)45.6	タテハケ	B種ヨコハケ
76－1	Ⅴ区・埴輪棺墓1	北棺身透孔閉塞？		タテハケ	B種ヨコハケ
76－2	Ⅴ区・埴輪棺墓1	北棺身		タテハケ	B種ヨコハケ
76－3	Ⅴ区・埴輪棺墓1	北棺身透孔閉塞？		タテハケ	B種ヨコハケ
76－4	Ⅴ区・埴輪棺墓1	南小口部		タテハケ	B種ヨコハケ
76－5	Ⅴ区・埴輪棺墓1	南小口部			ユビナデ
76－6	Ⅴ区・埴輪棺墓1	南棺身		タテハケ	B種ヨコハケ
77－1	Ⅴ区・埴輪棺墓2	南西側辺		ユビナデ	
77－2	Ⅴ区・埴輪棺墓2	南東小口部		ハケ	
77－3	Ⅴ区・埴輪棺墓2	北東側辺		ハケ	
77－4	Ⅴ区・埴輪棺墓2	北東側辺		ハケ	
77－5	Ⅴ区・埴輪棺墓2	北東側辺		ユビナデ	
77－6	Ⅴ区・埴輪棺墓2			ユビナデ	
77－7	Ⅴ区・埴輪棺墓2			ハケ	
78－1	Ⅴ区・埴輪棺墓2	北東側辺		ハケ	
78－2	Ⅴ区・埴輪棺墓2	北西小口部		ハケ	
78－3	Ⅴ区・埴輪棺墓2	北東側辺		ハケ	
78－4	Ⅴ区・埴輪棺墓2	北東側辺		ユビナデ	
78－5	Ⅴ区・埴輪棺墓2	北東側辺		ユビナデ	
78－6	Ⅴ区・埴輪棺墓2	北東側辺		ハケ、ナデ	

第４表　埴輪棺墓構成埴輪観察表②

内面調整	突帯	透孔	焼成	色調	備　　考
タテハケ、ユビナデ	M字形		良好	淡黄褐色	有黒斑
タテ・ヨコハケ、ユビナデ	台形		良好	淡灰黄色	有黒斑
タテハケ、ユビナデ	台形	円形	やや不良	淡黄灰色	
タテ・ヨコハケ			良好	淡黄灰色	笠形(専用棺)
ヨコハケ、ユビナデ	M字形		良好	淡赤褐色	
ヨコハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	淡黄灰色	
ユビナデ	台形	円形	良好	淡黄灰色	朝顔形
ヨコハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	淡赤褐色	朝顔形、有黒斑、ヘラ描
タテ・ヨコハケ、ユビナデ・オサエ	台形	円形	良好	淡黄灰色	
ヨコ・ナナメハケ、ユビナデ・オサエ	M字・台形	円形	良好	淡黄灰色	
ユビナデ・オサエ	M字形	円形	良好	淡灰黄色	ヘラ描
タテハケ、ユビナデ・オサエ	台形	半円形	良好	淡褐色	有黒斑
ヘラナデ、ユビナデ・オサエ	台形	半円形	良好	淡灰黄色	外面赤彩
ヨコハケ、ユビナデ・オサエ	M字形		良好	淡橙褐色	
ヨコハケ、ユビナデ・オサエ	台形		やや不良	淡黄褐色	
ヨコ・ナナメハケ、ユビオサエ	M字形		良好	淡橙褐色	
ヨコハケ、ユビナデ・オサエ	M字形	円形	良好	淡橙褐色	
ナナメハケ、ユビナデ	M字形		良好	橙褐色	
ユビナデ	M字・台形		良好	淡橙褐色	ヘラ描
タテハケ、ユビ・ヘラナデ	台形	円形	やや不良	黄褐色	ヘラ描
タテハケ、ユビナデ			良好	暗褐色	朝顔形
ユビナデ・オサエ	M字・台形		良好	橙褐色	
ナナメハケ、ユビナデ			良好	暗褐色	朝顔形
タテハケ、ユビナデ	M字形	円形	やや不良	淡黄褐色	
ユビナデ	M字形	円形	良好	淡橙褐色	ヘラ描
ヨコ・ナナメハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	淡灰褐色	ヘラ描(乗馬人物)
ユビナデ	M字形		良好	灰色	内外面赤彩(？)
ユビナデ・オサエ	M字形	円形	良好	橙褐色	
ヨコハケ、ユビオサエ・ナデ	M字形		良好	橙褐色	外面赤彩
ユビナデ	M字形	円形	良好	淡橙褐色	ヘラ描
ユビナデ	台形		良好	淡赤褐色	
ヨコハケ、ユビナデ・オサエ	M字形		良好	橙褐色	
ナナメハケ、ユビナデ・オサエ	M字形	円形	良好	淡橙褐色	外面赤彩
ユビナデ	M字形	円形	良好	淡橙褐色	
ヨコ・タテハケ、ユビナデ	台形		良好	淡黄褐色	ヨコハケ不明瞭、ヘラ描
タテ・ナナメハケ、ユビナデ・オサエ	M字形		良好	淡赤褐色	須恵質
ナナメハケ、ユビナデ・オサエ	台形	円形	やや不良	淡黄褐色	
ナナメハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	茶褐色	須恵質
ヨコハケ、ヘラ・ユビナデ	台形	円形	良好	淡橙褐色	
ユビナデ	台形		良好	淡橙褐色	
ユビナデ	台形		良好	淡赤褐色	須恵質
ユビナデ	M字形		良好	淡橙褐色	須恵質
ヨコハケ、ユビナデ	台形		良好	淡橙褐色	須恵質
ナナメハケ、ユビナデ	台形	円形	良好	淡赤褐色	須恵質
ユビナデ			良好	赤褐色	囲形
ユビナデ			良好	淡橙褐色	囲形
ユビナデ			良好	赤褐色	囲形
ユビナデ			良好	赤褐色	囲形
ユビナデ			良好	淡赤褐色	囲形
ユビナデ			良好	淡赤褐色	囲形
ユビナデ			良好	淡赤褐色	囲形
ユビナデ			良好	赤褐色	囲形
ユビナデ			良好	淡赤褐色	囲形
ユビナデ			良好	淡赤褐色	囲形
ユビナデ			良好	淡赤褐色	囲形
ユビナデ			良好	淡赤褐色	囲形
ユビナデ			良好	淡赤褐色	囲形

付　盾塚、鞍塚古墳ほか出土埴輪の胎土分析

－Ｘ線回析試験及び化学分析試験－

(株)第四紀　地質研究所　井上　巖

1　実験条件

1－1　試料

分析に供した試料は第５表に示す通りである。Ｘ線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちにメノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。化学分析は埴輪をダイヤモンドカッターで小片に切断し、表面を洗浄し、乾燥後、試料表面をコーテングしないで、直接電子顕微鏡の鏡筒内に挿入し、分析した。

1－2　Ｘ線回析試験

埴輪胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はＸ線回析試験によった。測定には日本電子製ＪＤＸ－8020Ｘ線回析装置を用い、次ぎの実験条件で実験した。

Target:Cu,Filter:Ni,Voltage:40kV,Current:30ｍＡ,ステップ角度：0.02°　計数時間：0.5秒

1－3　化学分析

元素分析は日本電子製5300ＬＶ型電子顕微鏡に2001型エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置をセットし、実験条件は加速電圧：15ｋＶ、分析法：スプリント法、分析倍率：200倍、分析有効時間：100秒、分析指数10元素で行った。

2　Ｘ線回析試験結果の取扱い

実験結果は第５表に示す通りである。第5表右側にはＸ線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。Ｘ線回析試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。電子顕微鏡によって得られたガラス量とＸ線回析試験で得られたムライト（Mullite)、クリストバライト（Cristobalite）等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2－1　組成分析

1）　Mont-Mica-Hb三角ダイアグラム

第151図に示すように三角ダイアグラムを１～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mont、Mica、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれて、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト（Mont)、雲母類（Mika)、角閃石（Ｈｂ）のＸ線回析試験におけるチャートのピーク強度をパーセント（％）で表示する。モンモリロナイトはMont／ｍont＋Mica＋Hb＊100でパーセントとして求め、同様にMika,Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。三角ダイヤグラム内の１～４はMont、Mika、Hbの３成分を含み、各辺は２成分、各頂点は１成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第151図に示す通りである。

2）　Mont-Ch,Mika-Hb菱形ダイアグラム

第152図に示すように菱形ダイヤグラムを１～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能

は20として別に検討した。モンモリロナイト（Mont)、雲母類（Mika)、角閃石（Hb)、緑泥石（Ch）の内、a） 3成分以上含まれない、b）Mont、Chの2成分が含まれない、c）Mica、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。菱形ダイヤグラムはMont-Ch、Mika-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch、Mika-HbのそれぞれのX線回析試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mont／Mont＋Ch＊100と計算し、Mica、Hb、Ch各々同様に計算し、記載する。菱形ダイヤグラム内にある1～7はMont、Mika、Hb、Chの4成分を含み、各辺はMont、Mika-Hb、Chにうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第152図に示す通りである。

3） 化学分析結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物としてノーマル法（10元素全体で100%になる）で計算し、化学分析表を作成した。これに基づいて第153～155図の各図を作成し、埴輪を元素の面から分類した。

3 X線回析試験結果

3－1 タイプ分類

第5表には盾塚古墳、仲津山古墳、鞍塚古墳、誉田御廟山古墳から出土した埴輪が記載してある。

第7表に示すように埴輪胎土はA～Fの6タイプに分類された。

Aタイプ：Mont,Mika,Hb,Chの4成分を含む。

Bタイプ：Hb1成分を含み、Mont,Mika,Chの3成分に欠ける。

Cタイプ：Hb, Chの2成分を含み、Mont,Mikaの2成分に欠ける。

Dタイプ：Mika, Hb, Chの3成分を含み、Mont1成分に欠ける。

Eタイプ：Mika, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分に欠ける。組成的にはCタイプと同じであるが、検出強度が異なる為に、タイプが異なる。

Fタイプ：Mont,Mika,Hb,Chの4成分に欠ける。高温で焼成されているために粘土鉱物は分解してガラスに変質している。

最も多いタイプはFタイプで、9個の埴輪が該当する。この9個の埴輪は鞍塚古墳と誉田御廟山古墳から出土したもので、焼成温度が高い。仲津山古墳の埴輪はDとEタイプに集中し、盾塚古墳の埴輪はA～Dタイプに分散する。

3－2 石英（Qt）―斜長石（P1）の相関について

埴輪胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、埴輪の焼成温度と大きな関わりがある。埴輪を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ埴輪製作上の固有の技術であると考えられる。自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。第156図に示すように石英（Qt）の強度が低い領域から高い領域に向かって4グループに分類された。

誉田御廟山古墳：Qtの強度が1500～2500、P1の強度が100～400の領域にあり、5個の埴輪は集中する。

鞍塚古墳：Qtの強度が2000～3200、P1の強度が100～500の領域にあり、5個の埴輪は集中する。

仲津山古墳：Qtの強度が2800～4000、P1の強度が200～700の領域にあり、5個の埴輪は集中する。

盾塚古墳：Qtの強度が3500～5000、P1の強度が500～800の領域にあり、4個の埴輪は集中する。

“その他”：盾塚古墳—1は盾塚古墳のグループに入らず、P1の強度が高く、異質である。

以上の結果から明らかなように各古墳から出土した埴輪は明瞭に異なるグループを形成し、相互の関連性は薄い。鞍塚古墳と誉田御廟山古墳の埴輪は誉田白鳥窯の須恵質の埴輪の領域に近い。仲津山古墳と盾塚古墳の埴輪は土師の里窯と誉田白鳥窯の焼成温度の低いタイプの領域にあり、両者がどちらのものか判然としない。

4　化学分析結果

第6表には、盾塚古墳、仲津山古墳、鞍塚古墳、誉田御廟山古墳から出土した埴輪が記載してある。分析結果に基づいて第153～155図を作成した。

4－1　SiO2-Al2O3の相関について

第153図に示すようにA-A’線より左側のSiO2の値の低い領域には誉田御廟山古墳と盾塚古墳の埴輪が集中し、右側SiO2の値の高い領域には仲津山古墳と鞍塚古墳が集中する。左側のSiO2の値の低い領域には鞍塚古墳—1と誉田御廟山古墳—19の2個の埴輪があり、異質である。

4－2　Fe2O3—MgOの相関について

第154図に示すように、A—A’線を境としてMgOの値が低い領域には仲津山古墳と盾塚古墳の埴輪が集中し、MgOの値が高い領域には鞍塚古墳と誉田御廟山古墳の埴輪が集中する。MgOの値が低い領域ではさらにFe2O3の値の高低で仲津山古墳と鞍塚古墳に、MgOの高い領域でもFe2O3の高低で盾塚古墳と誉田御廟山古墳とに明瞭にわかれる。盾塚古墳—1と誉田御廟山古墳—19はFe2O3の値が高い領域にあり、異質である。

4－3　K2O—CaOの相関について

第155図に示すように、A-A’線を境としてCaOの値が低い領域には仲津山古墳と鞍塚古墳、CaOの値が高い領域には盾塚古墳と誉田御廟山古墳の埴輪が分布する。CaOの値が低い領域の仲津山古墳と鞍塚古墳の埴輪はさらにK2Oの値が低い領域の仲津山古墳とK2Oの値が高い領域の鞍塚古墳の埴輪に分かれる。CaOの値が高い領域の盾塚古墳と誉田御廟山古墳の埴輪はK2Oの値が低い領域の盾塚古墳とK2Oの値が高い領域の誉田御廟山古墳の埴輪に分かれる。誉田御廟山古墳—16と19、仲津山古墳—8はこれらのグループからはなれ、いくぶん異質である。

5　まとめ

1）埴輪胎土はA～Fの6タイプに分類され、Fタイプの9個は誉田御廟山古墳と鞍塚古墳の高温焼成の埴輪。仲津山古墳の埴輪はDとEの2タイプ、盾塚古墳の埴輪はA～Dの4タイプに分散する。土師の里窯と誉田白鳥窯の酸化焔焼成の埴輪はともに類似しており、そのタイプは盾塚古墳と仲津山古墳のタイプに類似し、分類は難しい。土師の里窯と誉田白鳥窯の埴輪は組成的に類似しているためである。

2）X線回析試験に基づくQt-P1相関Qtの強度が低い領域から誉田御廟山古墳、鞍塚古墳、仲津山古墳、盾塚古墳の各埴輪が明瞭にグループを形成し、明らかに異なる。盾塚古墳—1は異質である。誉田御廟山古墳と鞍塚古墳の埴輪は誉田白鳥窯の埴輪に近く、仲津山古墳と盾塚古墳は土師の里窯の埴輪に近いように見受けられるが判然としない。

3）化学分析結果でも誉田御廟山古墳、鞍塚古墳、仲津山古墳、盾塚古墳の各埴輪は化学組成が異なり、明瞭に分類される。盾塚古墳—1と誉田御廟山古墳—19の2個は前記の4グループとは異なる組成をしており、異質である。

試料	タイプ	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物													備		
No.	分類	Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite	Au			
古市古墳群-1	A	1	1	135	86	107	141	57	3200	1018	183							盾塚-1	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-2	B	5	20			199			3834	495								盾塚-2	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-3	C	6	20		92	133			4219	686								盾塚-3	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-4	D	7	9		99	96	143		3801	510				60				盾塚-4	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-5	C	6	20		108	124			4436	764								盾塚-5	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-6	E	7	20		126	99			3381	374								仲津山-6	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-7	D	7	9		145	99	193		3715	648								仲津山-7	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-8	D	7	9		140	95	190		3499	487								仲津山-8	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-9	E	7	20		82	80			3235	333								仲津山-9	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-10	E	7	20		108	102			2869	561								仲津山-10	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-11	F	14	20						2207	145	112	92						鞍塚-11	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-12	B	5	20			50			3092	340	120	64						鞍塚-12	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-13	F	14	20						2825	313	110	73						鞍塚-13	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-14	F	14	20						2115	247	117	84						鞍塚-14	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-15	F	14	20						2304	262	137	115						鞍塚-15	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-16	F	14	20						1683	236	129	114	119					誉田御廟山-16	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-17	F	14	20						1944	235	117	70						誉田御廟山-17	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-18	F	14	20						1740	209	136	105						誉田御廟山-18	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-19	F	14	20						2085	246	150	136						誉田御廟山-19	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-20	F	14	20						2294	163	157	110						誉田御廟山-20	5C•3/4	窖窯以後

Mont：モンモリロナイト　Mica：雲母類　Hb：角閃石 Ch：緑泥石（Ch:Fe　一次反射、Ch:Mg　二次反射）　Qt：石英　Pl：斜長石　Crist：クリストバライト
Mullite：ムライト　K-fels：カリ長石　Halloy：ハロイサイト　Kaol：カオリナイト　Pyrite:黄鉄鉱 Au：普通輝石　Py:紫蘇輝石

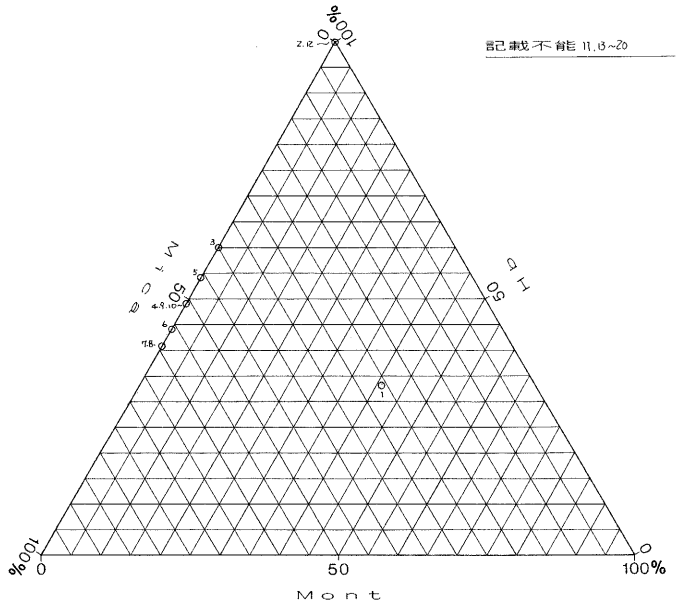
第5表　胎土性状表

試料No.	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	NiO	Total	備		
古市古墳群-1	1.14	0.13	21.78	55.21	2.17	0.64	1.41	0.36	16.61	0.54	99.99	盾塚-1	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-2	1.37	0.00	19.80	67.33	2.27	0.77	0.68	0.55	7.22	0.00	99.99	盾塚-2	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-3	1.19	0.00	22.28	63.17	1.15	0.36	0.83	0.81	10.13	0.08	100.00	盾塚-3	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-4	1.30	0.00	21.00	63.79	2.29	0.71	0.68	0.70	9.41	0.12	100.00	盾塚-4	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-5	0.88	0.00	23.33	60.36	1.66	0.68	0.85	1.04	11.19	0.01	100.00	盾塚-5	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-6	0.90	0.00	25.45	64.36	2.05	0.45	0.71	0.51	5.50	0.08	100.01	仲津山-6	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-7	0.72	0.00	24.40	65.02	2.24	0.25	1.05	0.48	5.65	0.19	100.00	仲津山-7	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-8	1.98	0.00	28.46	59.71	1.88	1.35	0.86	0.53	5.14	0.09	100.00	仲津山-8	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-9	0.48	0.04	28.43	58.75	1.96	0.54	1.22	0.45	7.93	0.21	100.01	仲津山-9	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-10	1.07	0.00	23.27	66.67	1.95	0.30	0.89	0.24	5.39	0.20	99.98	仲津山-10	5C•2/4	窖窯以前
古市古墳群-11	0.78	0.25	28.34	60.54	2.29	0.38	1.12	0.45	5.70	0.15	100.00	鞍塚-11	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-12	0.96	0.25	26.54	63.15	2.49	0.54	1.08	0.51	4.47	0.00	99.99	鞍塚-12	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-13	0.73	0.41	27.54	60.33	2.97	0.58	1.12	0.71	5.61	0.00	100.00	鞍塚-13	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-14	1.37	0.09	23.14	67.72	2.72	0.38	1.37	0.29	2.68	0.23	99.99	鞍塚-14	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-15	0.86	0.32	27.40	61.75	2.25	0.60	1.06	0.57	5.01	0.18	100.00	鞍塚-15	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-16	2.59	0.00	20.03	67.70	5.08	0.72	0.42	0.30	2.98	0.18	100.00	誉田御廟山-16	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-17	2.79	0.39	25.05	59.36	2.45	0.80	0.98	0.64	7.49	0.06	100.01	誉田御廟山-17	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-18	1.50	0.43	24.91	61.56	2.42	0.79	1.05	0.48	6.68	0.18	100.00	誉田御廟山-18	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-19	1.34	0.51	23.08	56.80	1.93	1.10	0.86	1.57	12.80	0.00	99.99	誉田御廟山-19	5C•3/4	窖窯以後
古市古墳群-20	1.26	0.62	25.12	59.76	2.31	0.62	0.77	0.68	8.76	0.11	100.01	誉田御廟山-20	5C•3/4	窖窯以後

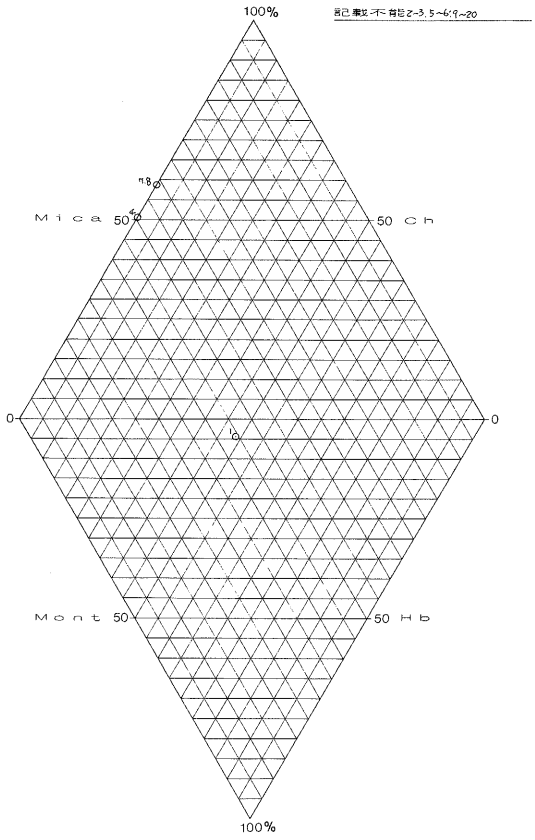
第6表　化学分析表

試料 No.	タイプ 分類	備			
古市古墳群-1	A	盾塚-1	5C•2/4	窖窯以前	中型古墳
古市古墳群-2	B	盾塚-2	5C•2/4	窖窯以前	中型古墳
古市古墳群-12	B	鞍塚-12	5C•3/4	窖窯以後	中型古墳
古市古墳群-3	C	盾塚-3	5C•2/4	窖窯以前	中型古墳
古市古墳群-5	C	盾塚-5	5C•2/4	窖窯以前	中型古墳
古市古墳群-4	D	盾塚-4	5C•2/4	窖窯以前	中型古墳
古市古墳群-7	D	仲津山-7	5C•2/4	窖窯以前	大型古墳
古市古墳群-8	D	仲津山-8	5C•2/4	窖窯以前	大型古墳
古市古墳群-6	E	仲津山-6	5C•2/4	窖窯以前	大型古墳
古市古墳群-9	E	仲津山-9	5C•2/4	窖窯以前	大型古墳
古市古墳群-10	E	仲津山-10	5C•2/4	窖窯以前	大型古墳
古市古墳群-11	F	鞍塚-11	5C•3/4	窖窯以後	中型古墳
古市古墳群-13	F	鞍塚-13	5C•3/4	窖窯以後	中型古墳
古市古墳群-14	F	鞍塚-14	5C•3/4	窖窯以後	中型古墳
古市古墳群-15	F	鞍塚-15	5C•3/4	窖窯以後	中型古墳
古市古墳群-16	F	誉田御廟山-16	5C•3/4	窖窯以後	大型古墳
古市古墳群-17	F	誉田御廟山-17	5C•3/4	窖窯以後	大型古墳
古市古墳群-18	F	誉田御廟山-18	5C•3/4	窖窯以後	大型古墳
古市古墳群-19	F	誉田御廟山-19	5C•3/4	窖窯以後	大型古墳
古市古墳群-20	F	誉田御廟山-20	5C•3/4	窖窯以後	大型古墳

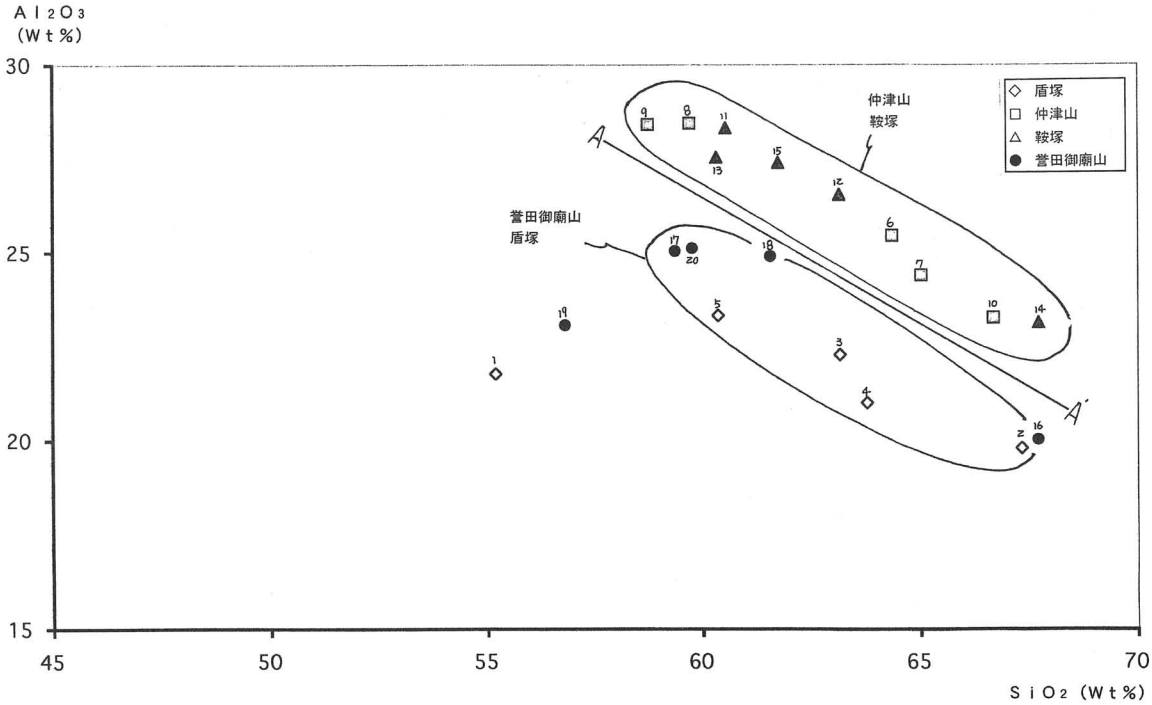
第7表　タイプ分類一覧表



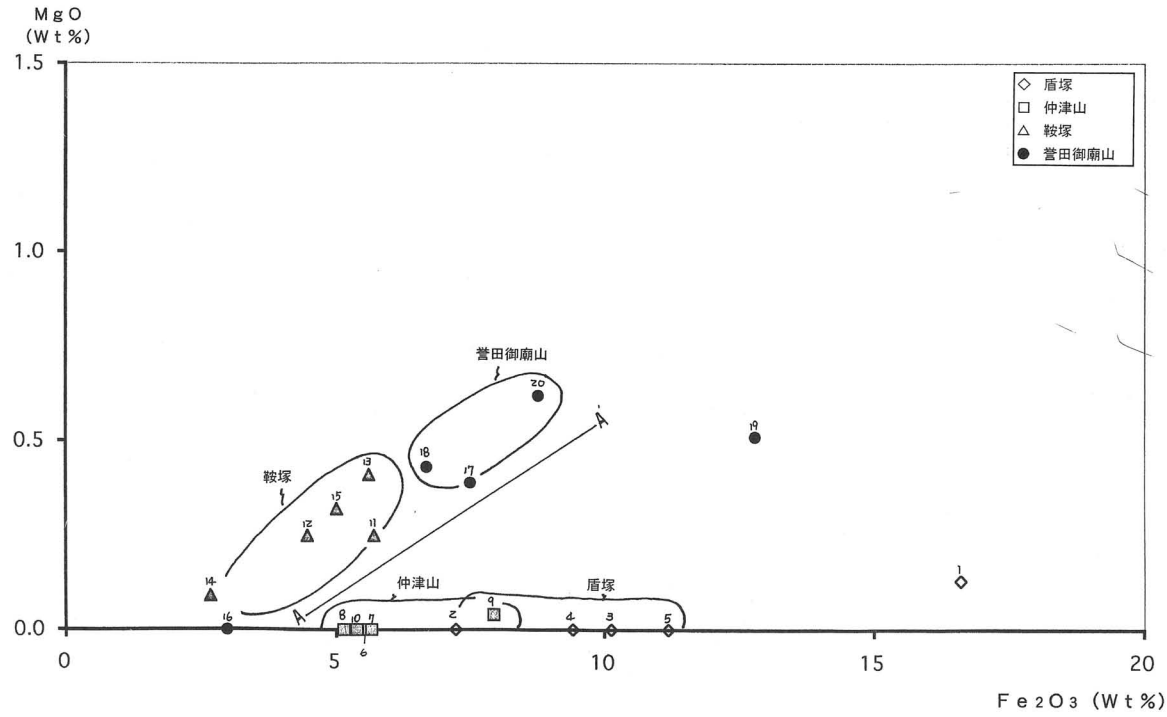
第151図　Mo－Mi－Hb 三角ダイヤグラム



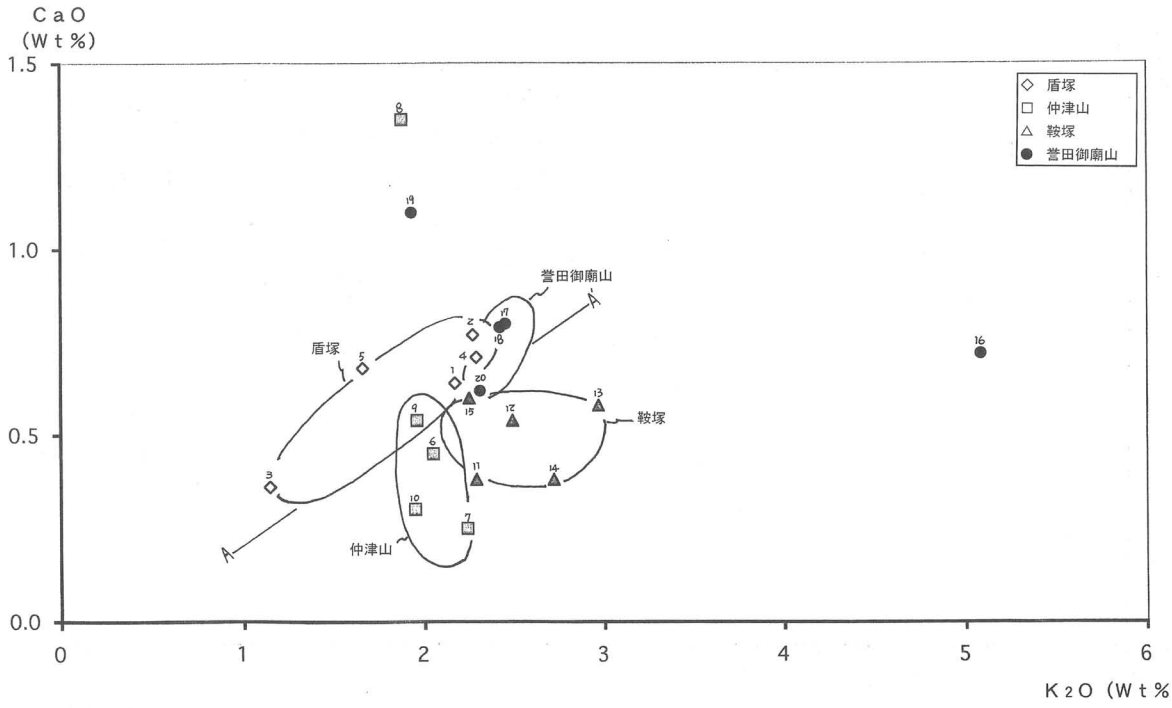
第152図　Mo－Ch、Mi－Hb 菱形ダイヤグラム



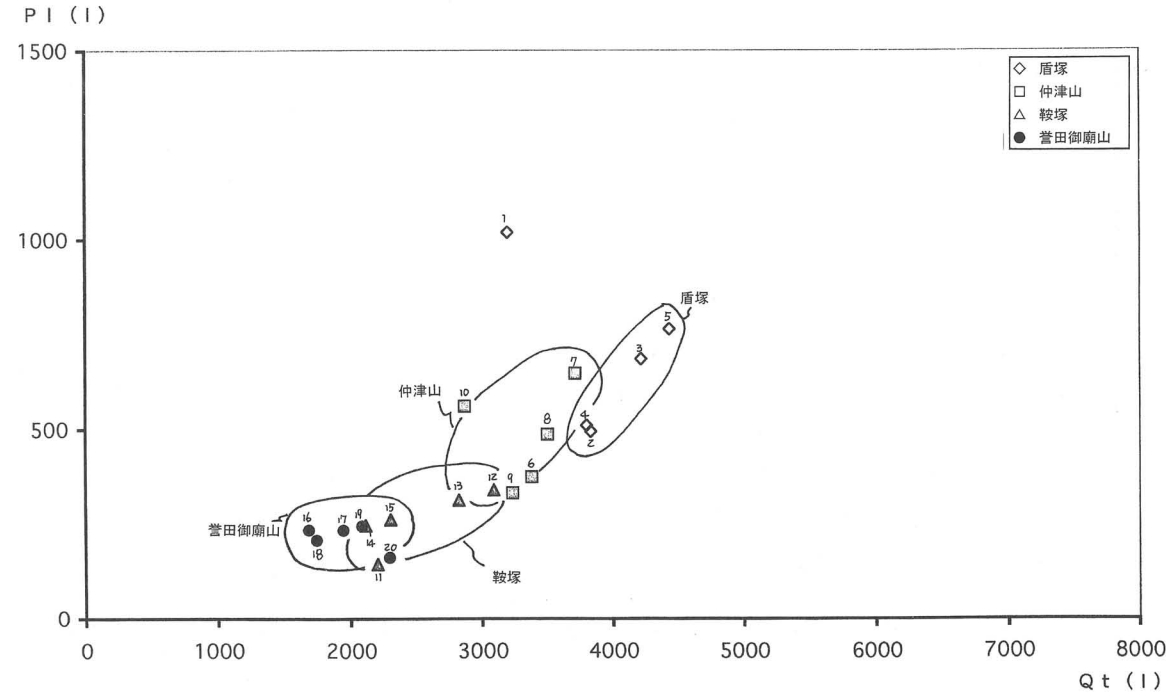
第153図　$SiO_2-Al_2O_3$ 図



第154図　Fe_2O_3-MgO 図



第155図　K_2O-CaO 図



第156図　Qt－PI 図

まとめ

——土師の里遺跡・府営道明寺南住宅地区の古墳時代の調査成果を中心として——

1　墓域の形成と展開

府営道明寺南住宅地区において埴輪棺墓をはじめ各種の埋葬施設が形成されたことは既に述べている通りである。まずその全容をまとめると、

- 埴輪棺墓31基（Ⅰ区５基、Ⅱ区７基、Ⅲ区11基、Ⅳ区５基、Ⅴ区２基、９０－⑤区１基）
- 土壙墓９基（Ⅰ区２基、Ⅱ区２基、Ⅲ区４基、Ⅴ区１基、）
- 木棺墓３基（Ⅰ区２基、Ⅴ区１基）
- 土器棺墓７基（Ⅰ区４基、Ⅲ区２基、Ⅳ区１基）
- 火葬墓16基（Ⅰ区14基、Ⅲ区１基、Ⅳ区１基）

となる。そしてこの66基を数える埋葬施設は、Ⅰ区・墓29の１基を除いて古墳の周濠などに付随して形成されたものでないこと、そしてその形成時期が古墳時代～平安時代前半にまで及んでいることも既述した。

まずこれらの埋葬施設のうち、構築年代の明らかなものを再確認すると、埴輪棺墓については31基中４基で年代を求めることができ、Ⅲ区・円筒棺５（７世紀）、Ⅲ区・円筒棺６（５世紀後葉）、Ⅲ区・円筒棺７（７世紀）、Ⅳ区・円筒棺４（５世紀末）となる。埴輪棺墓中の13％で年代比定できたにすぎないが、構築時期に幅のあることは確認される。

次いで土壙墓については９基中４基で年代比定が可能であり、Ⅰ区・墓３（９世紀後葉）、Ⅰ区・墓６（７世紀後葉）、Ⅲ区・土壙墓３（７世紀前半）、Ⅴ区・土壙墓（５世紀中葉）となる。土壙墓についても古墳時代～平安時代まで継続していることが知られる。

木棺墓については２基で年代比定が可能であり、Ⅰ区・墓１（８世紀後葉～９世紀前葉）、Ⅰ区・墓９（８世紀中葉～後葉）である。またⅤ区・木棺墓は古墳時代のものとみられる。このように木棺墓にも時期幅が認められるが、その構造自体においても、炭の敷設の有無などから、構築年代による差異が認められる。

土器棺墓については、７基すべてで年代比定が可能である。Ⅰ区・墓７（８世紀後葉）、Ⅰ区・墓20（８世紀後葉）、Ⅰ区・墓14（８世紀中葉～後葉）、Ⅱ区・墓25（８世紀中葉～後葉）、Ⅲ区・土器棺１（８世紀前葉）、Ⅲ区・土器棺墓２（８世紀中葉）、Ⅳ区・土器棺（９世紀後葉～10世紀初頭）である。いずれも奈良時代～平安時代にかけて構築されている。

火葬墓については、16基中３基で年代比定が可能であるに過ぎない。Ⅰ区・墓24（８世紀後葉）、Ⅲ区・火葬墓（９世紀末～10世紀前葉）、Ⅳ区・火葬墓（８世紀後葉）である。さらに和同開珎の副葬されたⅠ区・墓17も８世紀代に収まるとみられる。したがって火葬墓についても、土器棺墓と同様、奈良時代～平安時代にかけて構築されたとみられる。

これらの埋葬施設以外、土師の里８号墳を含めた４基の小型方墳もさらに存在する。土師の里８号墳は副葬品から５世紀後半の築造と考えられている。Ⅴ区の方墳は、新相の布留式土器を埋置した土壙墓に切られていることから５世紀中葉以前の構築と考えらる。また溝３を周濠とするⅠ区の方墳も出土埴輪から５世紀後葉に年代比定することができよう。Ⅳ区の方墳については築造年代を示す遺物は明確ではないが、他の３基の状況から少なくとも６世紀前葉以前に収まることは確実といえよう。

よって小型方墳は5世紀後半を中心に、遅くとも6世紀代前葉までに築造されたとみられる。

以上のように、構築年代の明らかな埋葬施設のうちの多くが8世紀以降のものであり、埴輪棺墓と土壙墓および木棺墓に5世紀代と7世紀代のものが認められるという状況である。よって、5世紀中葉以降に小型方墳を始めとして埴輪棺墓および多くはないとみられる土壙墓と木棺墓が構築され始め、7世紀代に引き続いて土壙墓が形成され、8世紀代以降になると土器棺墓と火葬墓が主流を占めるという墓域における展開が考えられる。

さらにⅠ区西半を中心に密集する土坑群が7世紀以降の土壙墓である可能性が指摘されている。このことからも墓域は古代以降に急速に拡充したとみられる。

このように埋葬施設の種類には時代による変遷がみられる。すなわち、

5世紀中葉～6世紀代　　小型方墳＋埴輪棺墓（＋若干の土壙墓・木棺墓）

7世紀代　　埴輪棺墓＋土壙墓＋密集土坑群

8世紀～10世紀初頭　　土器棺墓＋火葬墓＋木棺墓（＋密集土坑群）

というおおまかな変遷図式を示すことができよう。この埋葬施設の種類の変遷は、当該地区あるいは土師の里遺跡固有の状況ではなく、広範に認められる在り方でもあろう。

このように墓域の形成は古墳時代中期から平安時代前半まで継続されており、さらに同一集団により固定的・継続的になされたものと想定することができるのである。

すなわちこれらの埋葬施設の中には、石銙帯の副葬がみられたⅠ区・墓1のように一定の階層性を有した被葬者の墓も含まれている。律令期の官人においても当該地区を墓域とする意識が存在しており、継承された集団内の紐帯関係をそこに看取することができよう。つまり個別的かつ無秩序に埋葬施設が集積されたのではないといえるのである。

また、Ⅱ区・墓30で棺身に使用された埴輪は埋葬施設のための専用棺と考えられる。口縁部下5㎝ほどの高い位置に突帯が巡り、さらに最下段の突帯も通例より低い位置にある。透孔も認められない。外面2次調整はB種ヨコハケで、突帯間に2段施されている。また無黒斑である。この埴輪と類似したものが昭和30年の盾塚古墳などの発掘調査時にも検出されている。口縁部下の突帯や底部上の突帯の位置、さらに透孔が現状でみられないなどの形状はほぼ同じである。ただしこの資料は有黒斑の土師質であり、外面調整はヨコ・ナナメハケである。したがってⅡ区・墓30の棺身の埴輪より遡るとみられる。このように少なくとも専用埴輪を用いた5世紀代の埴輪棺墓の形成にあっては、一貫した製作技法が採られていた埴輪製作集団から等しく供給を受けていたことが窺われ、埋葬施設の構築における継続的な関連性を多少とも反映している状況のひとつといえよう。

2　埴輪棺墓形成の契機

いま、当該地区の墓域が古墳時代中期～平安時代前半まで約500年にわたって展開すること、そして埋葬施設の中でも小型方墳と埴輪棺墓が墓域形成当初にまで遡るであろうことを確認した。ことに埴輪棺墓は、墓域の形成を密接に反映しているといえる。そこで埴輪棺墓形成の契機について若干の検討を加えておきたい。

墓域の端緒ともなる埴輪棺墓形成の契機については、以下の点から盾塚古墳の出現によって開始されたと考える。それは、

① 5世紀前葉の築造とみられる盾塚古墳より先行する埴輪棺墓は認められない

② 盾塚古墳および鞍塚古墳を囲むように埴輪棺墓が分布し、その状況はⅠ区東側を除いて土壙墓・

木棺墓・土器棺墓・火葬墓の分布より概して両墳に近接している

③ 墓域が形成された地点は下位段丘面の中でもやや比高があり、占地場所としては好位置にあたる

という根拠が挙げられる。

まず第1の点についてみる。副葬品から構築時期の判明した4基の埴輪棺墓のうち、最も遡るのはⅢ区・円筒棺6の5世紀後葉である。さらに、棺身を構成する埴輪をみると、Ⅰ区・墓34でⅡ期の円筒埴輪が使用されているが、同時に棺身に使用された円筒埴輪にはⅢ期のものも認められる。さらに、この埴輪棺墓を除くと棺身に使用された埴輪はいずれもⅢ期以降のものであることから、現状において盾塚古墳より先行する埴輪棺墓は認められない。したがって、この第1の点は埴輪棺墓の形成に先行する盾塚古墳の築造が、その形成の契機となった可能性を否定できない状況を示しているといえる。

第2の点については、厳密な根拠とはいいがたいが、埴輪棺墓より後出する土器棺墓や火葬墓が各調査区内にあっても埴輪棺墓の広がりより相対的に盾塚古墳や鞍塚古墳から離れた位置に分布している。よって埴輪棺墓の形成が本来的に両墳に近接したものであったことを示す状況といえよう。

そして第3の点である。仲津山古墳や古室山古墳などの古墳が中位段丘面に築造されていることを考えれば、下位段丘面にあっても比較的高所の当該地区に盾塚古墳や鞍塚古墳が築造されたことは理解でき、盾塚古墳の占地により本格的な当該地区の利用が始まったといえる。したがって盾塚古墳や鞍塚古墳との関連をもたずにこの良好な古墳の占地場所が墓域として利用されたとは考えがたいのである。

このように、古墳が存在し、古墳より僅かに、そして継続的に後出する埋葬施設がその周辺を取り囲むように分布していれば、その埋葬施設が古墳と関わりをもって形成されたとみるのが現状では率直な理解の仕方であろう。

さらに別の角度から検討を加えておく。各調査区ごとの埋葬施設の主軸方向についてみると、調査区や埋葬施設の種類によって違いが比較的顕著に認められる。東—西方向と北－南方向に大別し、調査区ごとおよび埋葬施設の種類ごとにみると、

Ⅰ区　東—西　埴輪棺墓4基、
　　北—南　埴輪棺墓1基、土壙墓1基、木棺墓2基、土器棺墓1基
Ⅱ区　東—西　埴輪棺墓5基、土壙墓1基
Ⅲ区　東—西　埴輪棺墓2基
　　北－南　埴輪棺墓6基、土壙墓5基、土器棺墓2基
Ⅳ区　東－西　埴輪棺墓3基
　　北—南　埴輪棺墓2基、土器棺墓1基
Ⅴ区　北－南　埴輪棺墓1基、土壙墓1基

となり、Ⅰ・Ⅱ区では東—西方向が、Ⅲ・Ⅴ区では北—南方向が優位であるが、その背景には埴輪棺墓においては東－西方向、その他の埋葬施設にあっては北—南方向が優位であることがあろう。ただし埴輪棺墓にあってもⅢ区では北－南方向多く、Ⅳ・Ⅴ区でもその傾向がみられる。よって、埋葬施設の種類と方位は厳密に対応するものではない。

相対的に埴輪棺墓の形成は土器棺墓や土壙墓などより先行することは先にも述べた。とすれば、埋葬施設の主軸の違いは東－西方向から北—南方向に変遷したためであるとみることもできる。しかしながら5世紀代に比定されるⅢ区・円筒棺6やⅤ区・土壙墓は北—南方向をとっていることから、必

ずしも主軸方向が埋葬施設の新・古の違いを示すことにはならない。これには近接する盾塚古墳あるいは鞍塚古墳との位置関係が反映されている可能性も充分に考えられる。ただ、主軸方向の変化と時期差の関係について大略的な傾向が存在する可能性が高い。

なお7世紀代の埴輪棺墓であるⅢ区・円筒棺5とⅢ区・円筒棺7はともに北―南方向に主軸をとっており、傾向性と一致している。

このように、各調査区とも同一の原理下で各埋葬施設が構築され続けたとみられ、当該地区における墓域が同一集団によって固定的に形成されたことを改めて確認できる状況といえよう。

そして、墳丘の主軸を北―南方向にとる盾塚古墳、東－西方向にとる鞍塚古墳ともに被葬者の推定頭位は東である。このことと墓域の中でも相対的に遡るとみられる埴輪棺墓の多くの主軸が東－西方向であることとは果たして無関係であろうか。むしろこの点からも両墳と墓域との形成に関わる結び付きが想定されるのではあるまいか。

3　盾塚古墳と鞍塚古墳

Ⅳ・Ⅴ区において盾塚古墳、Ⅴ区において鞍塚古墳の発掘調査がなされ、昭和30年の調査結果に新たな成果を幾つか加えることができた。それは主に、

① 両墳とも帆立貝式前方後円墳である
② 両墳とも造出部を有する
③ 両墳とも卵玉形の周濠を有する
④ 周濠の一部が接するとみられるほど両墳は近接して築造されている

という点である。この中で最も留意すべきは第1の点であろう。

まず古市古墳群にあって帆立貝式前方後円墳（造出部付円墳とされたものを含む）を挙げると、青山1号墳［全長70m、後円部径60m］、蕃上山古墳［全長53m、後円部径40m］、唐櫃山古墳［全長53m、後円部径38m］、青山2号墳［全長33m、後円部径27m］、矢倉古墳［全長33m、後円部径28m］、沢田古墳（林2号墳）［全長23m］、赤子山古墳［全長20m］などがある。

これらに対し盾塚古墳は全長73m、後円部径49m、鞍塚古墳は全長51m、後円部径40mであり、盾塚古墳は青山1号墳と、鞍塚古墳は蕃上山古墳や唐櫃山古墳とほぼ同規模である。このように帆立貝式前方後円形は古市古墳群にあっては100m以下の小型墳を中心に採られた墳形とみられる。

また築造年代については、青山1号墳が5世紀中頃、唐櫃山古墳が5世紀後半、蕃上山古墳・青山2号墳・沢田古墳が5世紀末葉、矢倉古墳が6世紀前半と考えられる。よって5世紀前葉とみられる盾塚古墳が同形態墳の中では最も先行する。

盾塚古墳と鞍塚古墳を含めても帆立貝式前方後円墳とされるものは9基であり、今後新たに追加されるものがあったとしても古市古墳群内には10数基程度であろう。また築造年代については5世紀代～6世紀前半であり、5世紀後半のものが多い。

このように、大～小規模の古墳が混在する古市古墳群にあって、帆立貝式前方後円墳の存在は決して多いとはいえない。しかも築造時期もやや限られており、古墳群形成期間より短い。だがしかし、帆立貝式前方後円形という墳形をもった古墳が極めて例外的なものではなく、小型墳を中心に一定の存在として認められるのも事実である。

帆立貝式前方後円墳についての、ことに墳形に対しての評価はおくとしても、古墳の各種墳形の中に被葬者あるいは集団に対する身分表象の意味合いが付与されているとすれば、帆立貝式前方後円形

はその一系的な身分序列から若干外れているといえるかも知れない。そうした想定の一方で、盾塚古墳や鞍塚古墳などの帆立貝式前方後円墳は先述のように古市古墳群内において一定数が一定期間に厳然と存在している。

そして盾塚古墳や鞍塚古墳の副葬品をみると、古市古墳群や百舌鳥古墳群以外の地域における同規模程度の前方後円墳のそれと遜色のない、あるいはむしろ優越的な質・量といえる。このことは、帆立貝式前方後円形という墳形を採りつつ、古市古墳群内に存在する意味を暗示する状況といえまいか。すなわち、古墳群を形成した王権組織の内にあって、副葬品に反映される世俗的な力量が付与されている一方、その組織内においては独自的な存在ではなく、組織内に規定された従属的な存在であるとみることができるのではなかろうか。

4　土師の里遺跡における古墳時代墓群の構造

当該地区において検出された古墳および埋葬施設は、帆立貝式前方後円墳である盾塚古墳、鞍塚古墳を始め、小型方墳4基（土師の里8号墳を含む）、埴輪棺墓36基（ＨＪ91－3区含む）、土壙墓9基、木棺墓3基、土器棺墓8基（ＨＪ91－3区含む）、火葬墓18基（ＨＪ91－3区含む）および密集土坑約200基である。

これらのうち埴輪棺墓、土壙墓、木棺墓、土器棺墓、火葬墓の変遷については既述した通りであり、墓域継続期間中につねにすべての種類の埋葬施設が構築されていたのではない。そこで古墳時代に限って当該地区の墓群の構造についてみることにする。

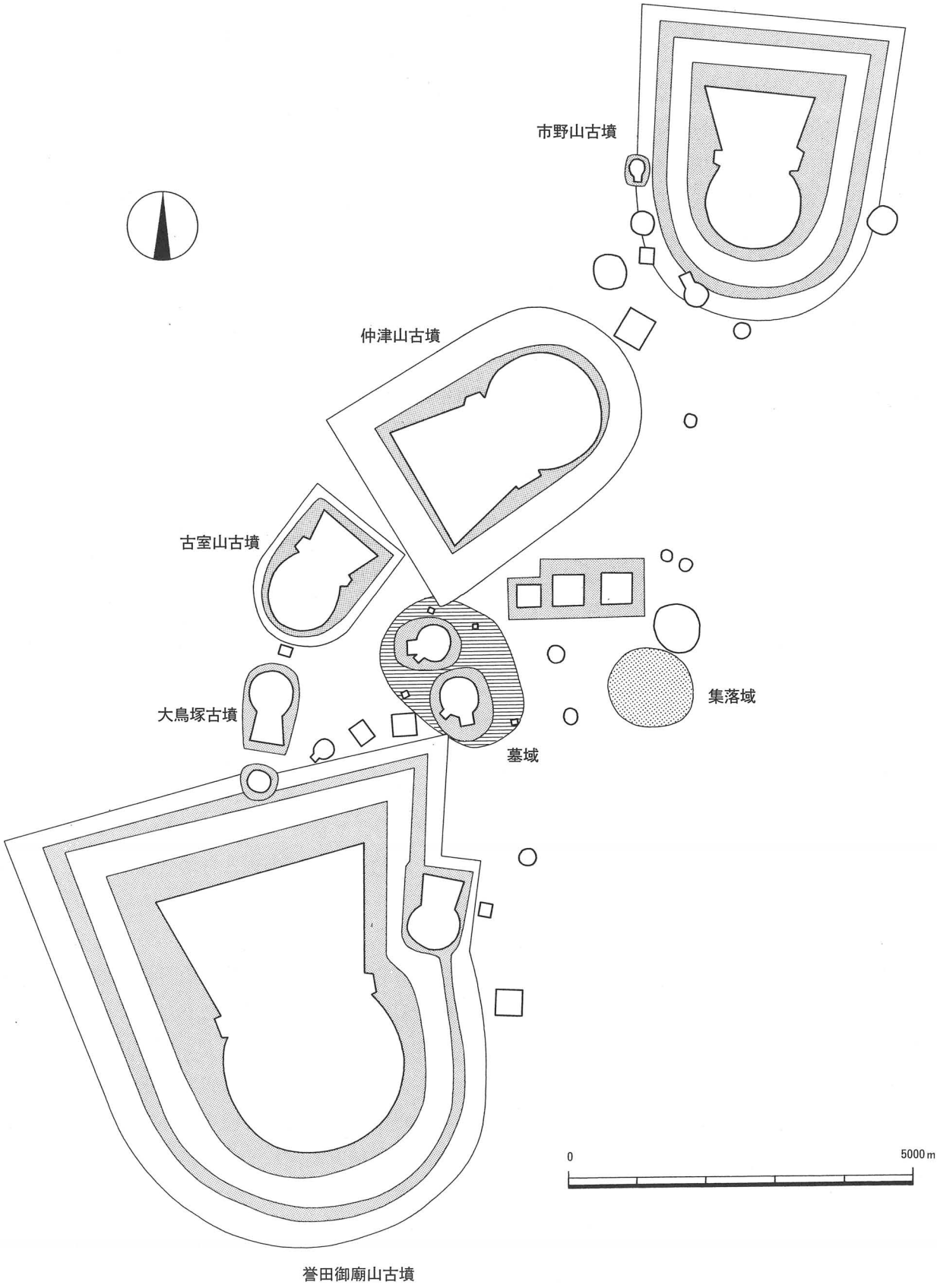
当該地内の墓域における検出状況をみるだけでも、古墳や埋葬施設の違いから被葬者間に格差のあることが充分に予測されるが、遺跡の周辺にまで視点を広げるとその傾向はさらに顕著となる。

まず大王や妃の墓と想定される大型前方後円墳として、誉田御廟山古墳や仲津山古墳が存在する。これらが最も階層上位に位置するものといえる。

次いで、中型前方後円墳として古室山古墳や大鳥塚古墳が存在する。小型前方後円墳や円墳には盾塚古墳、鞍塚古墳、土師の里6号墳（塚穴古墳）などがある。さらに1辺10m前後～20mほどのより小型の方墳に当該地区で検出された上記の4基があり、円墳には土師の里3号墳（道端古墳）などがある。そしてその下の階層を占めるものとして埴輪棺墓などの埋葬施設があり、さらに下位には密集する土坑がある。

このように顕著な階層性を呈して各古墳・埋葬施設は存在しているが、大型前方後円墳と中型前方後円墳は古市古墳群を具現させる王権組織全体の要件として築造されたものであり、それに対し盾塚古墳や鞍塚古墳など小型墳以下は土師の里遺跡を具現させる集団組織の要件として築造されたと概念化できまいか。この見方が妥当とすれば、遺跡における古墳・埋葬施設の形成は二重構造的であったことになる。さらに、遺跡内に構築要件をもつ墓のうち盾塚古墳と鞍塚古墳はその中核を占めているといえるが、その墳形が繰り返し述べているように帆立貝式前方後円形である点は留意する必要があろう。

また土師の里遺跡全域における埴輪棺墓についてみると、古墳の周濠内あるいは縁辺に配されたものを除くと、ごく一部の例外はあるものの大半が当該地区に位置している。土師の里遺跡全域に存在が分散しているのではなく、限定された地点に集中して構築されている点は、先にみたように盾塚古墳・鞍塚古墳の築造を契機とした形成によるためとみられる。それは盾塚古墳・鞍塚古墳を中核とする集団によってその地点が墓域として選定されたことを反映しているといえよう。



第157図　土師の里遺跡・古墳時代遺構分布概念

その集団の集落域については、現状では当該地区の東100～250ｍほどの地点において直径200ｍほどの範囲で広がる住居群が該当しよう。この範囲は遺跡の範囲と比べて極めて限定的である。しかもこの範囲を除くと住居の分布はほとんど認められない。

この住居域について、誉田御廟山古墳を始めとする大～小型古墳の築造にあたって直接労働を行った人間の集落域とする見方がひとつにはできるかも知れないが、それにしては規模が小さすぎよう。住居の重複関係については77－24区と77－15区で認められるが、それ以外ではみられず、集落域の中でも極小地点を除くと概ね分散的である。このように恒常的に建替えが行われた状況は認められない。したがって一時期に存在した住居数は限られたものであったと予測される。こうしたことからも、古墳築造に直接関わった人間の集落域ではなく、定住していた集団の集落域と考える方が適当であろう。そして西方に位置する墓域もまた遺跡内あるいは周辺に生活基盤を有したこうした定住者集団のものであったと考えられるのである。

なお墓域における階層差は既述のように一定度明瞭に認められたが、居住域において階層差を示す状況は見出しがたい。

5　埴輪の胎土分析から

盾塚古墳、鞍塚古墳、誉田御廟山古墳および仲津山古墳の円筒埴輪の胎土分析を（株）第四紀地質研究所に業務委託した。その結果については付章として掲載したが、分析資料提出時の当方の結果予測と実際の分析結果の内容とが異なっていた。そして分析結果が重要な意味をもっていると考えられることから、ここで若干の検討を加えることにする。

まず分析資料提出時の予測について述べると、胎土はおそらくは大型古墳（誉田御廟山古墳・仲津山古墳）と小型古墳（盾塚古墳・鞍塚古墳）で区分されるか、あるいは窖窯焼成以前（仲津山古墳・盾塚古墳）と窖窯焼成以降（誉田御廟山古墳・鞍塚古墳）で区分されるものと想定した。

しかし分析結果は、古墳の規模あるいは窖窯焼成の有無を基準に大別されるのではなく、古墳ごとに分離された。しかも同一古墳の資料間では分析結果はまとまりをもっているので、提出資料の安定性は保証されているとみられる。

そこで４古墳の埴輪の胎土が各古墳それぞれで異なっていた理由については、次のように理解されるのではないかと考える。

窖窯焼成に耐える材土を確保する必要性を考慮すると、その可否でまず２分されよう。無論、窖窯焼成される埴輪にはより良質の胎土が求められたのであろう。さらに、古墳規模に応じて材土の確保場所が異なっていたか、あるいは埴輪の大きさにより材土が異なっていた可能性が考えられるが、これによりさらに２分され古墳ごとに胎土が異なることとなる。

材土の違いについては、前者の場合なら、供給先に応じて材土の確保から製作・供給まで埴輪製作集団内における個別単位集団(群)が一貫して関わっていた可能性は否定できない。また後者の場合では、大型品、小型品あるいは形象埴輪など製作目的に応じて材土の確保から製作まで同一の個別単位集団(群)が一貫して行い、その供給については埴輪製作集団における上位階層者（群）の指示に拠ったとみられる。

この２つの可能性のどちらかであるか、あるいはまた他の可能性があるのかについては、今後より多くの資料に対して胎土分析を実施することにより解決する公算が高いが、現時点においては少なく

とも埴輪製作にあたって個別単位集団の役割が明瞭に設定され、それが厳密に遵守されていたとみられる。そしてこのことは、埴輪製作集団全体の統制の強さを示しているといえよう。

6　土師の里遺跡と土師氏

土師の里遺跡およびその周辺が土師氏の本貫地のひとつである河内志紀郡土師郷であろうとの見解は、広く受け入れられているといって過言ではあるまい。よってこれまで検討してきた内容は、土師氏、あるいは消極的にいえば後に土師氏と呼ばれた氏族集団に関わるものということができる。

そこでまず古墳時代の墓群にみられる集団内の階層差について改めてみると、以下のような対応関係が想定できる。すなわち、

盾塚古墳・鞍塚古墳・土師の里６号墳（塚穴古墳）	氏族の族長
土師の里８号墳・Ⅱ区方墳・Ⅳ区方墳・Ⅴ区方墳	氏族内の有力者
埴輪棺墓などの埋葬施設	氏族内の高位成員
土坑群	氏族内の一般成員

と図式化することができるのではないか。なおこの場合、土坑の一部に古墳時代に遡るものが存在するとの前提にある。

そして古代以降、埋葬施設は土器棺墓や火葬墓が主流となるが、石銙帯を副葬した木棺墓の存在や、対極的な位置を占める密集した土坑群の存在から、階層格差はなお埋葬施設に顕在化され、継続されていたとみることができる。

ところで氏族長の墓と想定した盾塚古墳と鞍塚古墳については、その墳丘形態から王権組織内に規定された従属的な存在であると先に捉えた。大王あるいはそれを支える有力者への属人的な従属を意味しているのではなく、職掌を介しての王権組織との関係を念頭に置きたい。

盾塚古墳には三角板革綴衝角付冑と三角板革綴短甲および付属武具のセット１式が、鞍塚古墳には三角板鋲留衝角付冑と三角板革綴短甲および付属武具のセット１式が副葬されており、それぞれ最新の武具を保有していたことが明らかとなった。

既述のように、この武具の副葬から両墳の被葬者は鉄製武器や武具の生産組織と密接な関係にあったとする見解もある。確かに最新の武具の保有・副葬は王権組織内での被葬者の占める一定の位置を示しているといえる。ただ、被葬者およびその氏族集団が権力機構の一端を担っていることによって、最新の武具の１セットを族長が拝受あるいは所持できたとみるのが率直といえよう。そうした状況の一方で、被葬者の微妙な立場を示す状況に、繰り返しになるが墳形の事実もある。

この副葬品あるいは墳丘規模にみられる優位的な状況と、墳丘形態における劣位的な状況の不整合さから、単純化すれば、土師氏と想定されるこの氏族は有力ではあるが権威のある集団ではなかったということができるのではなかろうか。

ただしその内部における規範の強さは既にみたように、墓群形成において如実に示されているといえる。しかも、変様しながらも墓域が平安時代前半まで維持されており、その恒常性も窺うことができる。さらに土師氏の職掌のひとつである埴輪製作における統制の強さについては既述した通りである。

このように土師氏は職掌集団として内的紐帯を強く保持し、王権内においてもその職掌を通じて重要な役割を果たしていたが、しかし王権内での高い地位を占めることができなかったのはその職性によるためではなかろうかと推測する。

引用・参考文献

土師の里遺跡

【大阪府教育委員会】
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡発掘調査概要』　1979
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡発掘調査概要・Ⅱ－藤井寺市道明寺、国府３丁目所在－』　1980
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡発掘調査概要・Ⅲ－藤井寺市道明寺、国府３丁目所在－』　1981
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡発掘調査概要・Ⅳ』　1982
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡発掘調査概要・Ⅴ』　1983
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡発掘調査概要・Ⅵ』　1984
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡発掘調査概要・Ⅶ』　1985
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡　盾塚・珠金塚・鞍塚古墳他発掘調査概要Ⅰ－府営道明寺南住宅建設に伴う発掘調査　1987・88年度調査区－』　1990
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡他発掘調査概要・Ⅱ』　1992
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡他発掘調査概要・Ⅲ』　1993
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡他発掘調査概要・Ⅳ』　1996
大阪府教育委員会　『はさみ山・土師の里遺跡他発掘調査概要・昭和61年度』　1987
大阪府教育委員会　『国府遺跡発掘調査概要・Ⅷ』　1978
大阪府教育委員会　『昭和60年度国府遺跡発掘調査概要』　1986
大阪府教育委員会　『石川左岸幹線管渠築造遺跡群他発掘調査概要・Ⅲ』　1988
大阪府教育委員会　『石川左岸幹線管渠築造遺跡群他発掘調査概要・Ⅴ』　1990
大阪府教育委員会　『南河内遺跡群発掘調査概要・Ⅱ』　1989
【藤井寺市教育委員会・藤井寺市】
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅱ』　1987
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅲ』　1988
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅳ』　1989
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅴ』　1990
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅵ』　1991
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅶ』　1992
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅷ』　1993
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅹ』　19
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅸ』　1994
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群発掘調査報告　ⅩⅢ』　1998
藤井寺市教育委員会　『土師の里８号墳』　1994
『藤井寺市市史　第三巻　資料編Ⅰ』　1986

土師氏

小出義治「大和・河内・和泉の土師氏」『国史学』54　1951
小出義治「土師雑考」『國學院雑誌』60-11　1959
直木孝次郎「土師氏の研究」『人文研究』11-9　1960
丸山竜平「土師氏の基礎的研究」『日本史論叢』2　1973
小出義治「土師氏の伝承成立とその歴史的背景」『國學院高等学校紀要』16　1976
古代を考える会『古代を考える18　河内土師の里遺跡の検討』　1979
門脇禎二「古代氏族と土師氏の活動」『修羅とその周辺』（藤井寺市の遺跡ガイドブックNo.5）　1992
中西康裕「土師氏と古墳」『倭の五王の時代』　1996
中西康宏「資料にみる国府遺跡」『国府遺跡の謎を解く』　1997

古墳・遺跡

（１）仲津山古墳
藤井寺市『藤井寺市市史　第三巻　資料編Ⅰ』　1986
藤井寺市教育委員会『新版　古市古墳群』（藤井寺市ガイドブックNo.6）1993
古市古墳群研究会（編）『古市古墳群とその周辺』　1985
大阪府教育委員会『土師の里遺跡発掘調査概要　Ⅱ』　1980
大阪府教育委員会『土師の里遺跡発掘調査概要　Ⅲ』　1981

大阪府教育委員会『土師の里遺跡発掘調査概要　Ⅳ』　1982
大阪府教育委員会『土師の里遺跡発掘調査概要　Ⅶ』　1985
大阪府教育委員会『昭和60年度国府遺跡発掘調査概要』　1986
大阪府教育委員会『大水川改修に伴う発掘調査概要　Ⅴ』　1988
藤井寺市教育委員会『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅱ』　1987
藤井寺市教育委員会『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅲ』　1988
藤井寺市教育委員会『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅳ』　1989
藤井寺市教育委員会『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅴ』　1990
藤井寺市教育委員会『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅷ』　1993
宮内庁書陵部『書陵部紀要　32』　1981
宮内庁書陵部『書陵部紀要　44』　1993
田中和弘「古市古墳群における小古墳の検討」『考古学研究』34-2　1987
一瀬和夫「古市古墳群における埴輪群の変遷」『究班』　1992
（２）盾塚古墳
藤井寺市教育委員会『新版　古市古墳群』（藤井寺市ガイドブックNo.6）1993
藤井寺市『藤井寺市市史　第三巻　資料編Ⅰ』　1986
古市古墳群研究会（編）『古市古墳群とその周辺』　1985
大阪府教育委員会　『南河内遺跡群発掘調査概要・Ⅱ』　1989
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡　盾塚・珠金塚・鞍塚古墳他発掘調査概要Ⅰ』　1990
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡他発掘調査概要・Ⅳ』　1996
大阪大学文学部国史教室『河内野中古墳の研究』　1976
末永雅雄ほか『盾塚　鞍塚　珠金塚古墳』　1991
（３）鞍塚古墳
藤井寺市『藤井寺市市史　第三巻　資料編Ⅰ』　1986
藤井寺市教育委員会『新版　古市古墳群』（藤井寺市ガイドブックNo.6）1993
古市古墳群研究会（編）『古市古墳群とその周辺』　1985
大阪府教育委員会　『南河内遺跡群発掘調査概要・Ⅱ』　1989
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡　盾塚・珠金塚・鞍塚古墳他発掘調査概要Ⅰ』　1990
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡他発掘調査概要・Ⅳ』　1996
大阪大学文学部国史教室『河内野中古墳の研究』　1976
伊藤雅文ほか「大阪府藤井寺市鞍塚西方出土の形象埴輪」『関西大学考古学研究紀要４』　1984
末永雅雄ほか『盾塚　鞍塚　珠金塚古墳』　1991
（４）珠金塚古墳
藤井寺市『藤井寺市市史　第三巻　資料編Ⅰ』　1986
藤井寺市教育委員会『新版　古市古墳群』（藤井寺市ガイドブックNo.6）1993
古市古墳群研究会（編）『古市古墳群とその周辺』　1985
大阪府教育委員会　『南河内遺跡群発掘調査概要・Ⅱ』　1989
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡　盾塚・珠金塚・鞍塚古墳他発掘調査概要Ⅰ』　1990
田中和弘「古市古墳群における小古墳の検討」『考古学研究』34-2　1987
末永雅雄ほか『盾塚　鞍塚　珠金塚古墳』　1991
（５）三ツ塚古墳（含　修羅）
藤井寺市『藤井寺市市史　第三巻　資料編Ⅰ』　1986
藤井寺市教育委員会『新版　古市古墳群』（藤井寺市ガイドブックNo.6）1993
藤井寺市教育委員会『修羅とその周辺』（藤井寺市の遺跡ガイドブックNo.5）　1992
古市古墳群研究会（編）『古市古墳群とその周辺』　1985
大阪府教育委員会　『石川左岸幹線管渠築造遺跡群他発掘調査概要・Ⅲ』　1988
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡　盾塚・珠金塚・鞍塚古墳他発掘調査概要Ⅰ』　1990
朝日新聞大阪本社社会部（編）『修羅』　1979
（６）御曹司塚古墳
古市古墳群研究会（編）『古市古墳群とその周辺』　1985
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡発掘調査概要・Ⅶ』　1985
大阪府教育委員会　『はさみ山・土師の里遺跡他発掘調査概要・昭和61年度』　1987
田中和弘「古市古墳群における小古墳の検討」『考古学研究』34-2　1987

（7）助太山古墳
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡　盾塚・珠金塚・鞍塚古墳他発掘調査概要Ⅰ』　1990
古市古墳群研究会（編）『古市古墳群とその周辺』　1985
（8）土師の里1号墳
古市古墳群研究会（編）『古市古墳群とその周辺』　1985
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡発掘調査概要』　1979
田中和弘「古市古墳群における小古墳の検討」『考古学研究』34-2　1987
（9）土師の里2号墳
古市古墳群研究会（編）『古市古墳群とその周辺』　1985
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡発掘調査概要』　1979
田中和弘「古市古墳群における小古墳の検討」『考古学研究』34-2　1987
（10）土師の里3号墳（道端古墳）
古市古墳群研究会（編）『古市古墳群とその周辺』　1985
大阪府教育委員会　『土師の里遺跡発掘調査概要』　1979
田中和弘「古市古墳群における小古墳の検討」『考古学研究』34-2　1987
（11）土師の里6号墳（塚穴古墳）
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅲ』　1988
大阪府教育委員会　『石川左岸幹線管渠築造遺跡群他発掘調査概要・Ⅲ』　1988
（12）土師の里7号墳（珠金塚西古墳）
大阪府教育委員会　『南河内遺跡群発掘調査概要・Ⅱ』　1989
藤井寺市教育委員会『石川流域遺跡群発掘調査報告　Ⅹ』　1995
（13）土師の里8号墳
藤井寺市教育委員会『新版　古市古墳群』（藤井寺市ガイドブックNo.6）1993
藤井寺市教育委員会　『土師の里8号墳』　1994
（14）土師の里窯跡群
藤井寺市教育委員会　『石川流域遺跡群調査報告　Ⅵ』　1991
三辻利一『古代土器の産地推定法』（考古学ライブラリー14）　1983
野上丈助「埴輪生産をめぐる諸問題」『考古学雑誌』61-3　1976
（15）遺跡全般
川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－2　1978
橋本博文「円筒棺と埴輪棺」『古代探叢』　1980
田辺昭三『須恵器大成』　1981
川西宏幸『古墳時代政治史研究序説』　1988
天野末喜「地域の古墳・近畿中部・大阪」『古墳時代の研究』10　1990

報　告　書　抄　録

ふりがな	はじのさといせき
書名	土師の里遺跡
副書名	土師氏の墓域と集落の調査
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	1998-2
編著者名	三木弘
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目　TEL　06-6941-0351
発行年月日	1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
はじのさといせき 土師の里遺跡	ふじいでらしどうみょうじろくちょうめ 藤井寺市道明寺6丁目	27226	20	34° 33′ 50″	135° 26′ 3″	87年8月～89年3月（Ⅰ・Ⅱ区） 91年9月～92年2月（Ⅲ区） 92年8月～93年3月（Ⅳ区） 95年8月～96年3月（Ⅴ区）	5,753 1,783 4,470 5,264	府営道明寺南住宅建替え

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
土師の里遺跡（Ⅰ区）	古墳、墓	弥生時代 古墳時代	土壙墓、助太山古墳周濠、埴輪棺墓、木棺墓、土器棺墓、火葬墓他	弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、石カ帯他	
土師の里遺跡（Ⅱ区）	古墳、墓	弥生時代 古墳時代	溝、鞍塚古墳周濠、埴輪棺墓、土壙墓、方墳の周濠、谷状地形	旧石器、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、陶器、和同開珎	
土師の里遺跡（Ⅲ区）	集落、古墳、墓	弥生時代 古墳時代 奈良時代	竪穴住居、埴輪棺墓、土器棺墓、土壙墓	弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、陶器、鉄鎌、刀子	
土師の里遺跡（Ⅳ区）	古墳、墓	古墳～中世	盾塚古墳後円部・前方部・周濠、埴輪棺墓、火葬墓、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、黒色土器、瓦器、陶器、陶棺、土馬、鉄鏃	
土師の里遺跡（Ⅴ区）	古墳、墓	古墳	盾塚古墳後円部・前方部・周濠・造出部、鞍塚古墳前方部・造出部、埴輪棺墓、方墳、土壙墓、木棺墓	土師器、須恵器、埴輪、土馬、鉄剣	土壙墓からベンガラを納めた土師器甕出土

大阪府埋蔵文化財調査報告1998-2

土師の里遺跡 ――土師氏の墓域と集落の調査――

発　行　大阪府教育委員会
〒540-8571　大阪市中央区大手前２丁目
ＴＥＬ．06-6941-0351㈹

発行日　1999年３月

印　刷　ダイコウ印刷株式会社
〒544-0034　大阪市生野区桃谷５丁目３番３号
ＴＥＬ．06-6712-6709㈹

図　　版

乗馬人物（Ⅳ区・円筒棺3　71—1）

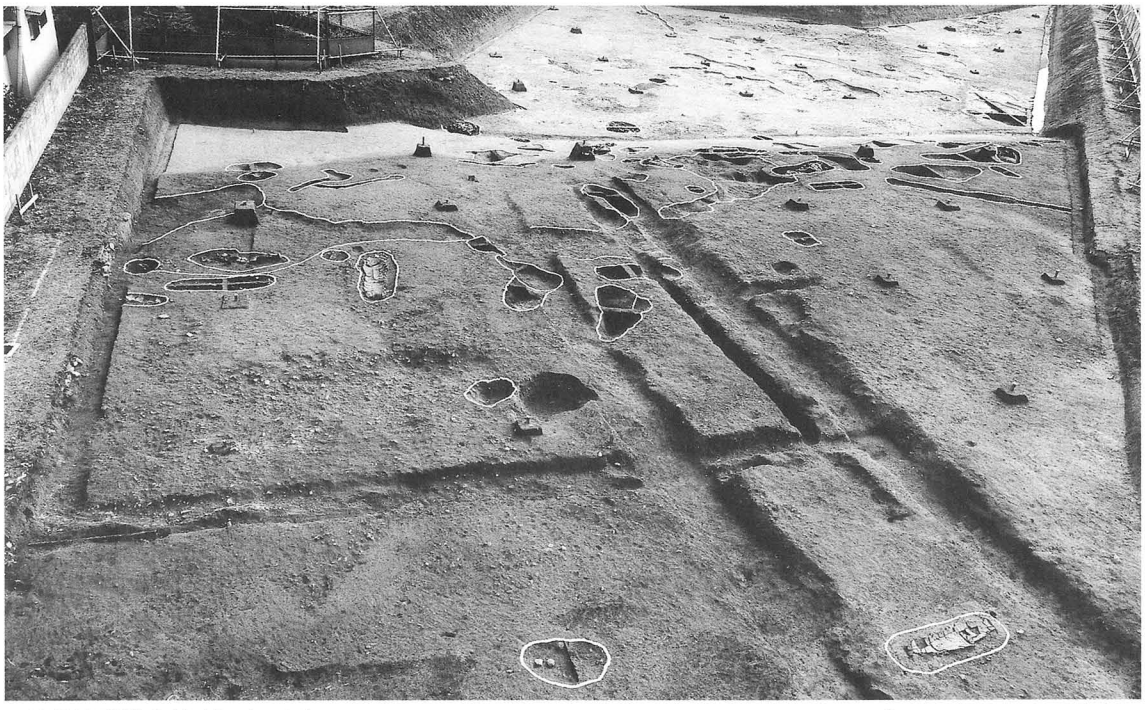
図版1　87・88年度調査区（Ⅰ・Ⅱ区）

1 87・88年度調査区（Ⅰ区）全景（東から）

2 87・89年度調査区（Ⅱ区）全景（東から）

図版2　91年度調査区（Ⅲ区）

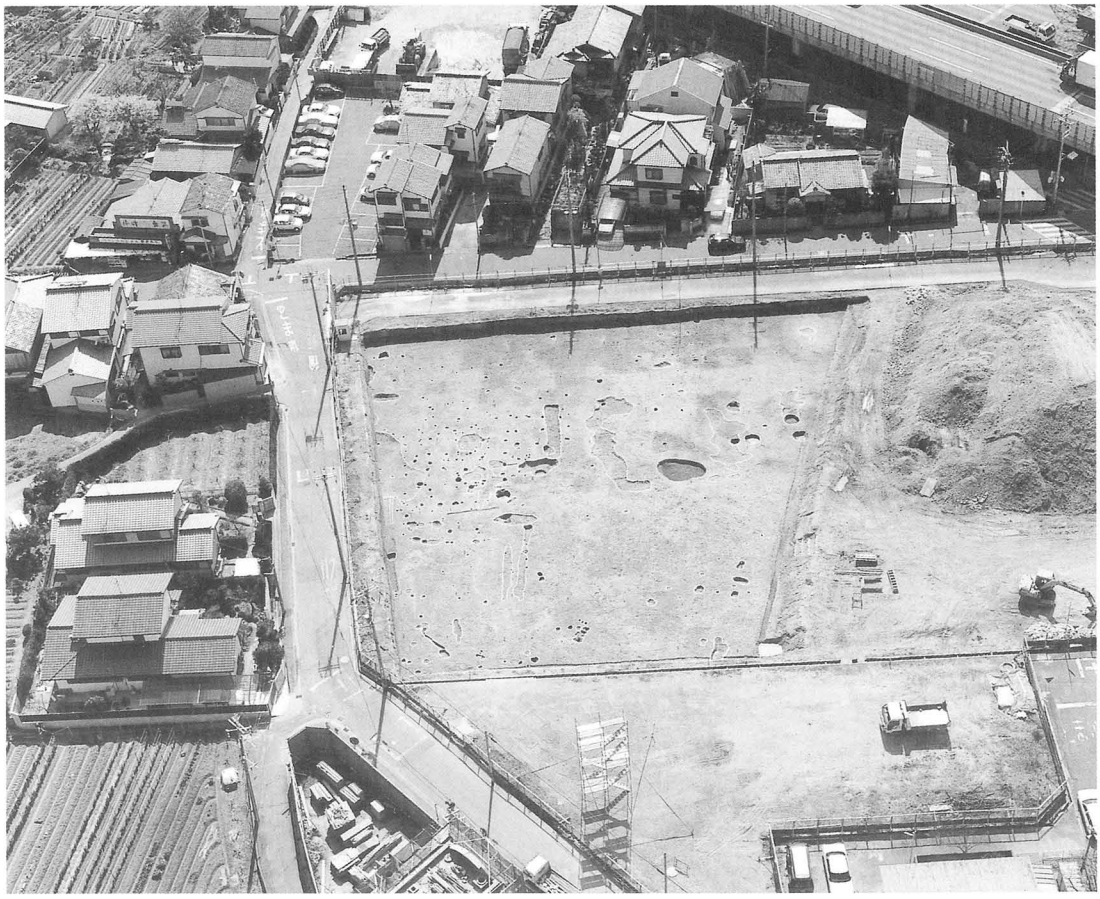
1 調査区全景（垂直）



2 埴輪棺墓群全景（北西から）

図版3　92年度調査区（Ⅳ区）

1 調査区全景（東から）



2 調査区全景（北から）

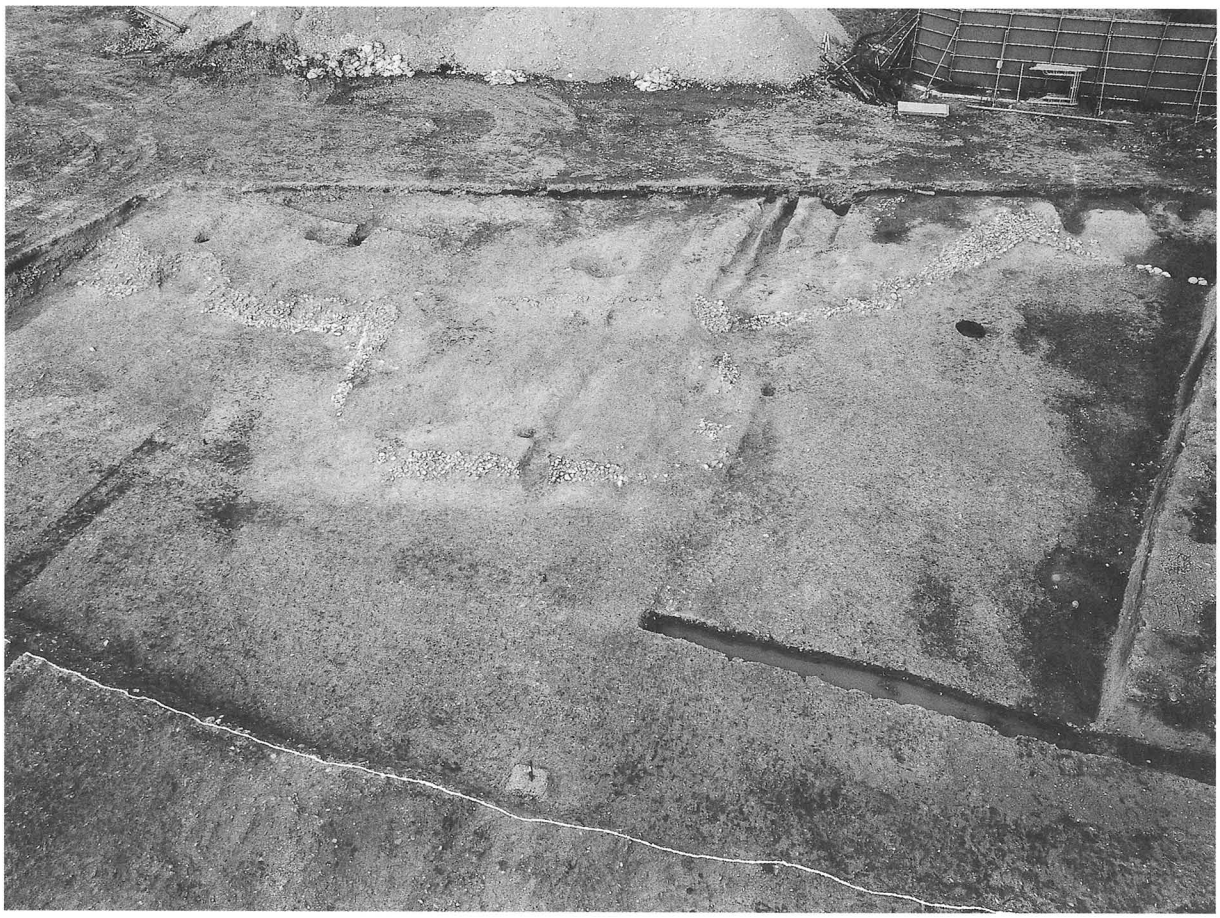
1 調査区全景（垂直）

2 調査区全景（北から）

図版5　盾塚古墳と円筒埴輪列・葺石

1 検出状況（東から）

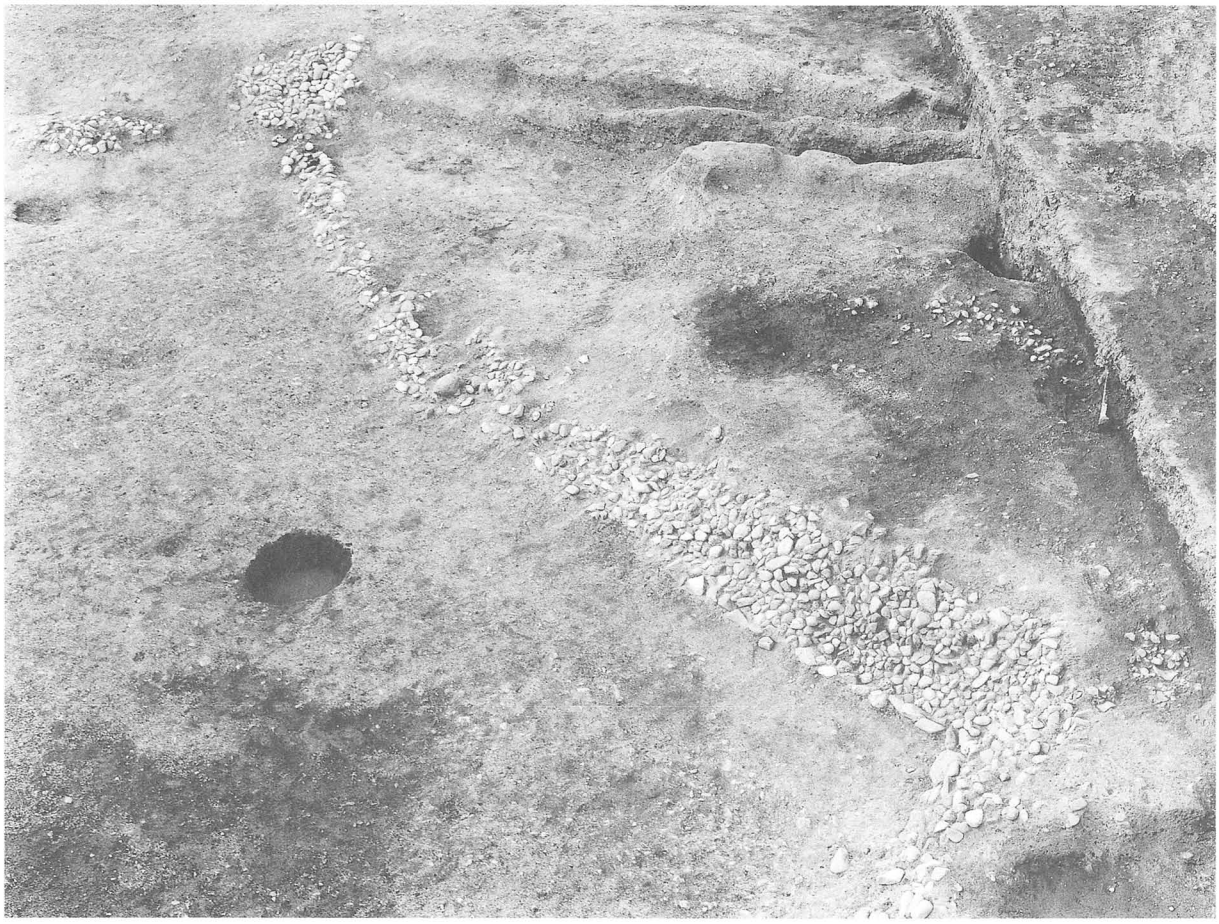
2 円筒埴輪列と葺石（南から）



1 造出部全景（西から）

2 造出部、葺石（西から）

1 検出状況（西から）

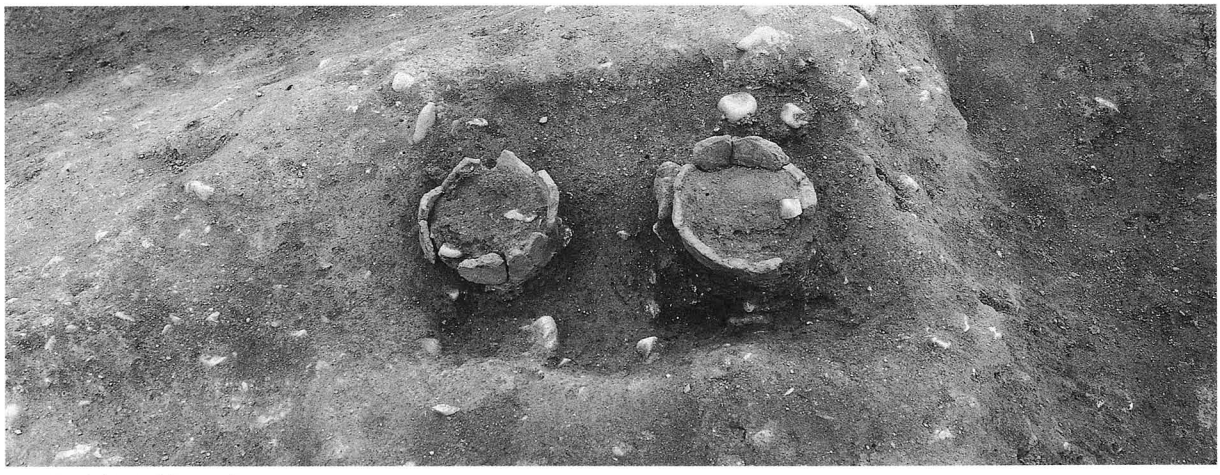


2 検出状況（南から）

図版8　盾塚古墳円筒埴輪列

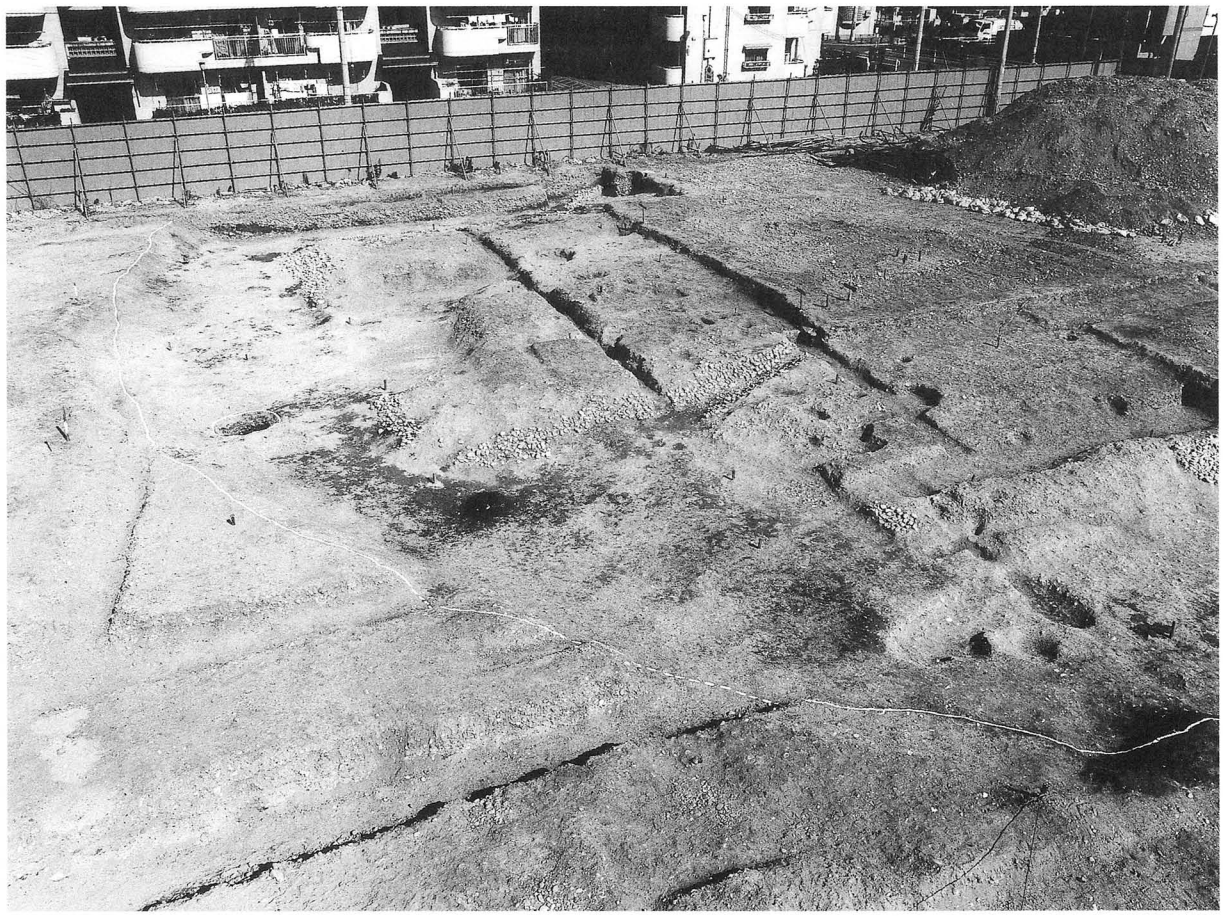
1 円筒埴輪列（西から）

2 円筒埴輪列（北から）

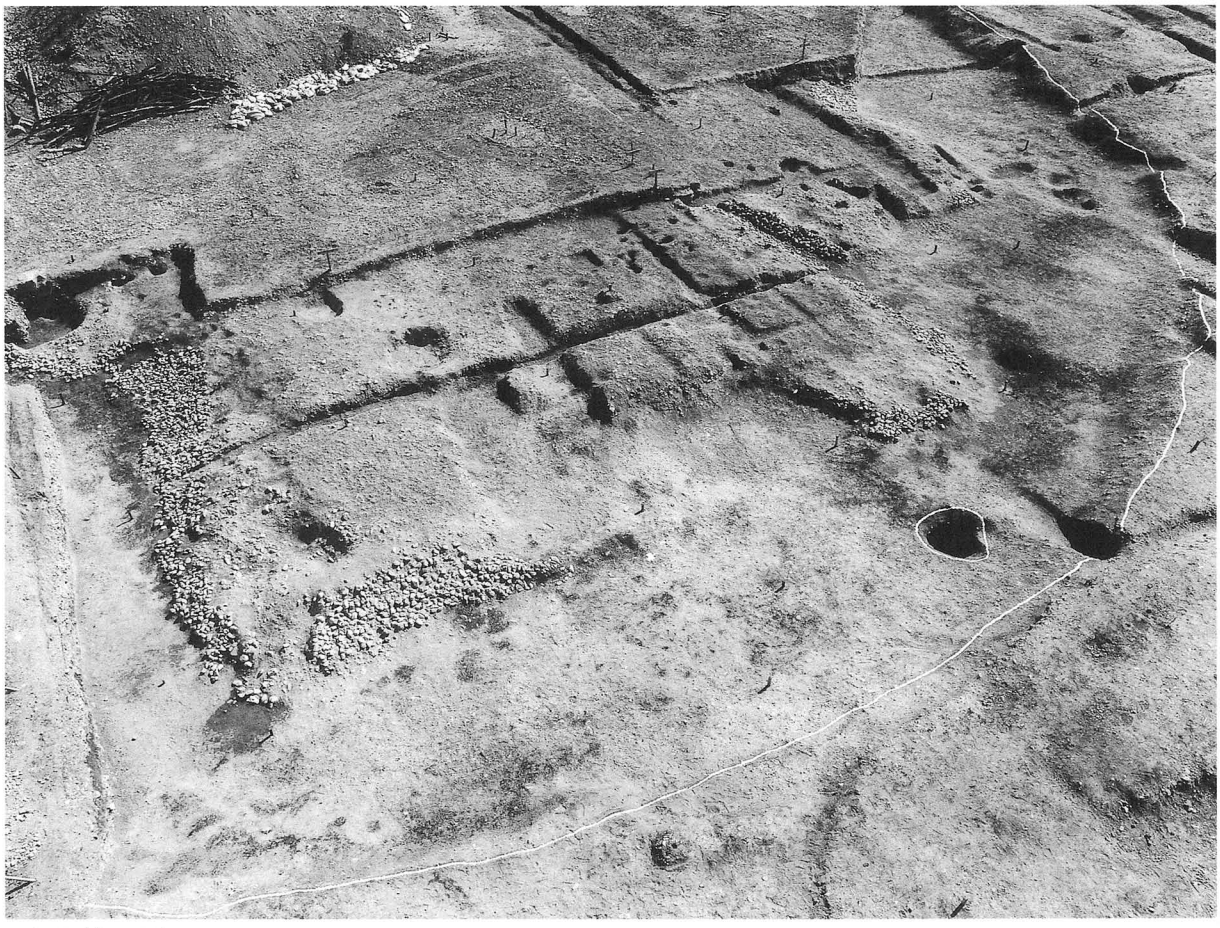


3 円筒埴輪列（南から）

図版9　鞍塚古墳



1 全景（東から）

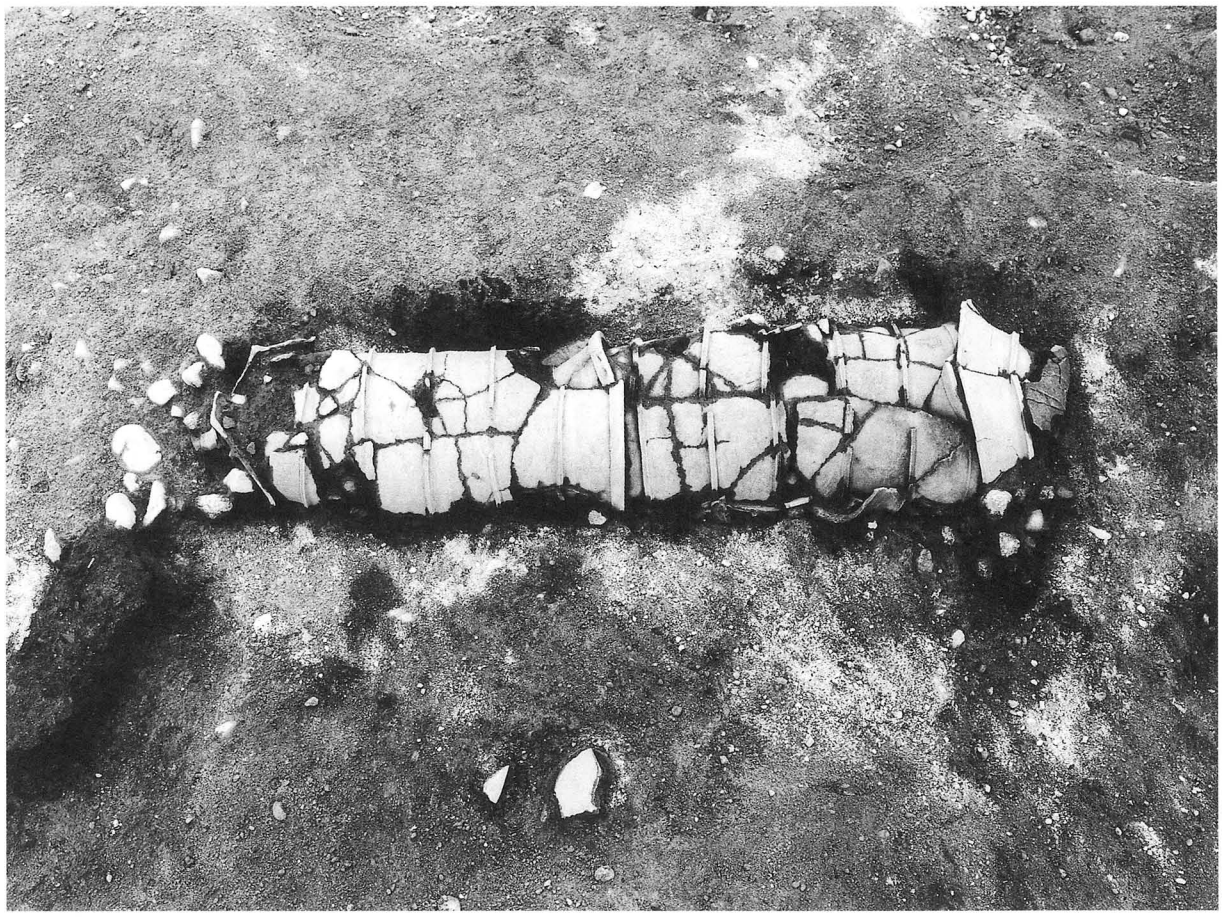


2 全景（南から）

1 検出状況（南から）

2 検出状況（南から）

図版11　Ⅰ・Ⅱ区埴輪棺墓

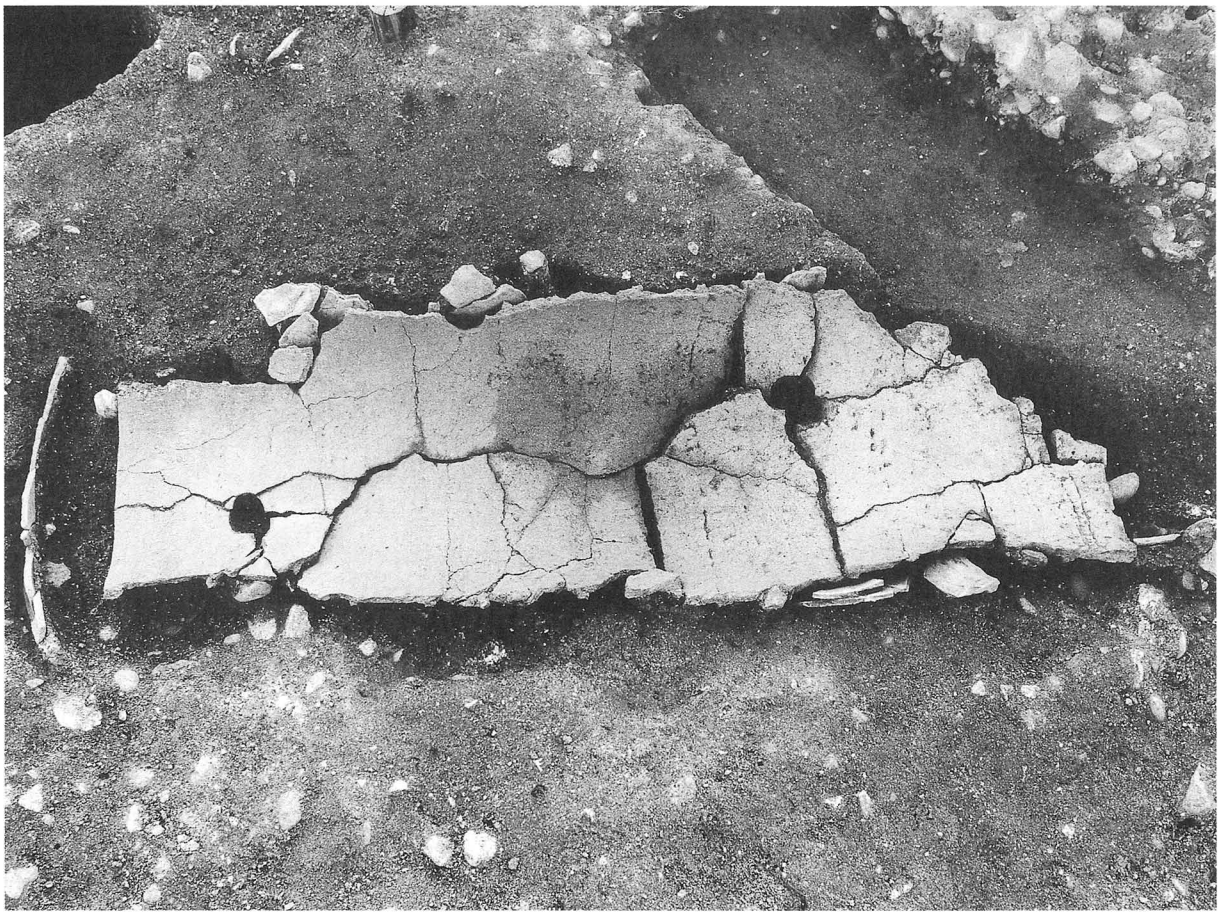


1 Ⅱ区・墓28（南西から）

2 Ⅰ区・墓23（西から）

3 Ⅰ区・墓27（南東から）

図版12　Ⅰ・Ⅱ区埴輪棺墓



1 Ⅰ区・墓2（南南西から）

2 Ⅱ区・墓30（東から）

3 Ⅱ区・墓36（西から）

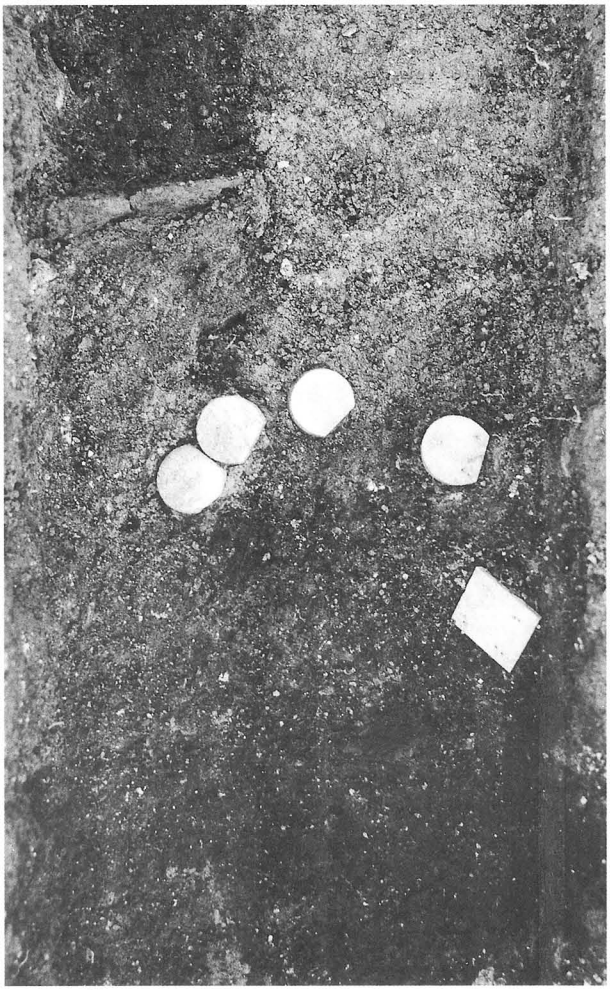
1 墓7（西から）

2 墓20（北西から）

3 墓14（南東から）

図版14　I区木棺墓

1 墓1（南から）

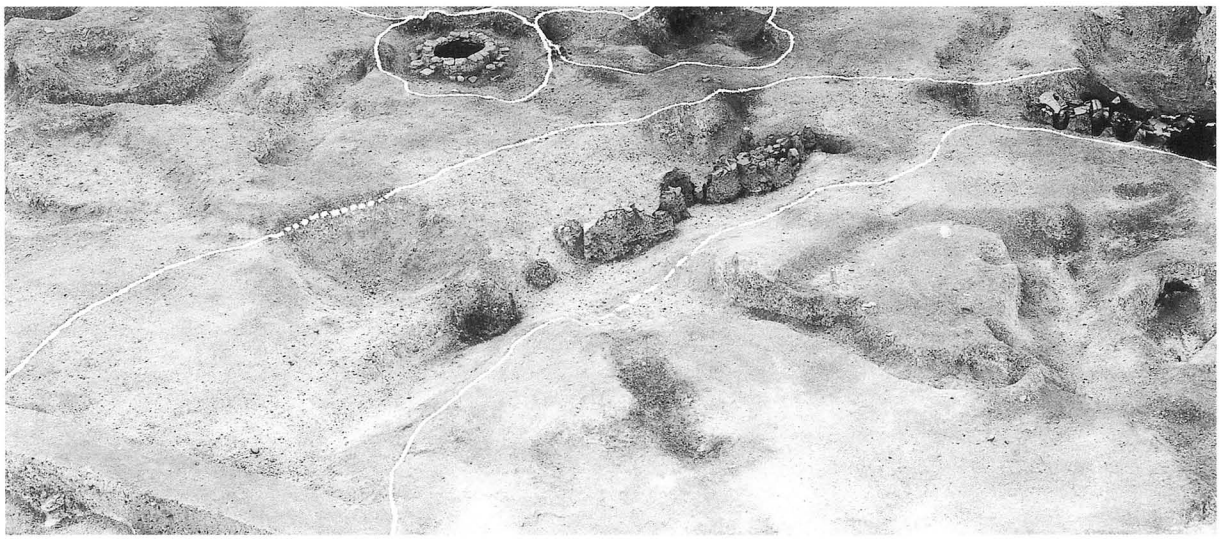


2 墓1石鋌帯出土状況（南から）

3 墓9（北から）

図版15　Ⅱ区溝3

1 全景（垂直）



2 全景（南西から）

3 埴輪出土状況、墓29（南から）